

EDF日本支部召喚 :Restart

クローサー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2013年7月17日 宇宙からの電波を受信、地球外生命体の存在を確認。

2015年2月1日 有事に備え、連合地球軍「EDF」結成。

2017年4月1日 地球外生命体「フォーリナー」襲来、地球侵略開始。

2017年11月16日 フォーリナー母艦 マザーシップ撃墜。

2021年10月30日 アリゾナにて最後の巨大生物が撃滅。巨大生物の駆逐が宣言される。

2028年6月28日 EDF日本支部及び日本列島消失。

※本作は「EDF日本支部召喚」を短編として再構築した作品です。

※前作の前日譚をこの作品に移しました。

※2020/10/7、設定関連を更新。

目次

前日譚 フォーリナー大戦

最後の休息 | 1

最後の休息 2 | 11

無自覚の布石 | 20

死地へ | 27

更なる絶望へ | 37

星船 | 53

戦士集結 | 61

神話 | 71

絶望は終わり、そして悪夢へと

90

人類最後の司令官（権力者） | 96

設定関連

設定集&本編前時系列（10／

7更新） | 104

本編

第1話 始まり | 128

第2話 現状把握 | 145

第3話 接触 | 156

第4話 視察と会談 | 171

第5話 変化の光、戦乱の影 | 190

第6話 Counter（カウンター） |

Over（オーバー）Kill（キル） |

第7話 神速 | 205

220

第8話	戦後処理と黒い作戦	237
第9話	今後の相談	254
第10話	悪夢の襲来	261
第11話	英雄以上、『英雄』未満	270
第12話	拍子抜け	285
閑話	最悪に備えて	299
次章予告		309
本編第二章		
第13話	魔王再来	318
第14話	怪生物	326
第15話	双方の思惑	331
第16話	怒涛	341

第17話 侵食

前日譚 フォーリナー大戦 最後の休息

2017年。人類は歴史上最大の、絶滅の危機に立たされていた。

宇宙から襲来した異邦人：フォーリナーは、人類に対して巨大生物を中心とした苛烈な殲滅攻撃を開始。対する人類は、制空権を全面喪失してもなお、EDF地球防衛軍を中心として各国軍と連携した連合軍で抵抗戦を開始した。北米、南米、欧州、中東、極東、シベリア戦線を中心に幾つかの戦術的勝利や戦略的勝利を収める事に成功する。その中でも主だった物は第三次巢穴掃討作戦日本支部が発令した巢穴掃討作戦。2度に渡る巢穴掃討作戦の失敗と偵察の情報を経て、巢穴掃討専門部隊 モールチームを含めた3個大隊が、関東地方に存在していた最大直下1000m以上の規模を持つ超巨大巢穴に突入。約2週間にも及ぶ戦闘の末、巨大生物の女王の撃破に成功。しかしその道中で幾多の巨大生物の罠によって多数の部隊が壊滅。地上に生きて帰れたのは僅か1割：そこから即座に戦線復帰可能な兵士となると、それはほんの一握りだった。第一次欧州防衛戦欧州方面軍全軍と巨大生物100万、ヘクトル3000、飛行ドローン5万によって勃発した、フォーリナー大戦の中でも最大規模の戦い。5日間にも及ぶ総力戦の末に欧

州方面軍が辛勝するも、この戦いによつて欧州方面軍は半壊。戦力の立て直しは行われていたのだが、その前に飛来した精銳飛行ドローン レッドカラーの急襲を許し、欧州戦線崩壊の遠因の戦いとなる。第二次北米決戦日本支部の四つ足歩行要塞（ナンバー1）破壊作戦後に発令された、北米版対四つ足歩行要塞作戦。結果としてはアメリカ合衆国東海岸部を蹂躪していたナンバー2の破壊には成功するものの、カナダを破壊していたナンバー3の撃破には失敗。このナンバー3は、後にマザーシップと共に北米戦線を蹂躪。北アメリカ大陸を完全制圧する事となる。が有名だろう。しかし、その度に人類は決して無視出来ない量の血の代償を支払わざるを得なかった。それに対してフォーリナーは一切の損害をも無視する物量を以て、真正面から次々と連合軍を粉碎。僅か半年間で、欧州戦線の崩壊を皮切りに、全戦線の崩壊が開始。その始まりから僅か5日間で、人類は連合軍を始めとした有力な戦力の殆どを失う事となった。

つまるところ、人類は1年と保たずにフォーリナーに敗北した。これは紛れも無い事実であり、真実である。

しかし、人類が敗北しても決して諦めず、抵抗を続けているのもいた。それがEDF日本支部である。EDF日本支部はフォーリナー大戦最初期から、極東戦線とは独立した日本列島防衛戦線を構築。日本列島という小さな戦線にも関わらず、最前線は北米戦線にも劣らぬ苛烈さであり、それ故に日本支部はしぶとく抵抗した。幾万の巨大生物を

粉碎し、幾千のヘクトルを破壊し、十数の女王を倒し、数体の超巨大生物を仕留め、そして四つ足歩行要塞さえも破壊した彼等の質は、間違いなく人類最大戦力と言つても良いだらう。確かに北米戦線や欧州戦線でも、日本支部にも劣らぬ善戦を見せていた。しかし逆に言うと、日本支部は一個の大陸を跨ぐ巨大戦線の戦果と同等の奮戦をしていると言う事だ。この事実は余りにも恐ろしい事だ。北米戦線、欧州戦線はこの戦果と同等の戦果を打ち立てる為に、数十万規模の陸軍を動員し、他の前線と比較すると圧倒する程の物量と火力で押し潰した。日本支部は全く逆で、僅か数万でこの戦果を叩き出しているのだ。日本列島という狭い戦線にも関わらず、これ程の密度かつ劇的な戦線は、全く以て存在していなかった。

しかしそれ故に、彼等は持ち堪え、そして孤立してしまつた。最早自分達以外に味方は無く、敵は無尽蔵。最早希望もなく、この戦いが最早人類という種を1秒でも長く存続させる為の延命処置に過ぎない事を、誰もが心の底で悟っていた。その絶望に飲まれ、自らの手で命を絶つ者も決して少なくなかつた。化け物に喰われるよりマシな死に方であると考えてしまうのも、当然といえれば当然だと言えた。しかし同時に、多くの人が生きる事を諦めなかつた。

生きたい。

ただそれだけの、ちつぽけな生存本能。しかしそれは何よりの活力となり、今日のE

D F日本支部を支え続ける、唯一の柱となっていた。

その日の夜の日本列島は、場違いの雪が降っていた。

例年ならば11月に雪が降るならば精々北海道、信越地方や北陸地方だったというのに、今年は何故か関西地方でも雪が降っていた。異常気象ではあるのだが、今現在そんな程度の事に構っている暇など微塵もありはしなかった。

E D F日本支部は、人類の最後の砦は今、陥落寸前なのだから。

約7ヶ月間にも及ぶ総力戦の果てに、E D F日本支部は北海道、関東、中国地方西部、四国、九州を完全放棄。残された関西全域と東海地域、中国地方東部に絶対防衛線を設置して生き残った3600万人を護っているだけの状況だ。

既に一度、フォーリナーは絶対防衛線に対して猛撃を行なっている。総力戦によって奇跡的な撃退に成功こそしたが、E D F日本支部も最早有力な戦力は払底し、もう一度同じ規模の戦力が絶対防衛線に投射されたならば、それはE D F日本支部の終焉と同意義であった。

しかし、どうしてかな。フォーリナーはそんなチャチな事を面倒くさがったかどうか

は知らないが、少なくとも日本支部の想定外の行動を起こした。

世界各地を蹂躪していたマザーシップが日本近海に出現。日本列島に向けて真っ直ぐ向かってきているというのが明らかになったのだ。

まさかの展開に驚いたが、EDF日本支部司令以下は遂に最期の時が来たと確信。最終決戦に向け、攻撃部隊の抽出が開始されていた。結果、編成出来たのはギガンテス10両を含めた陸軍1個大隊と空軍2個飛行隊。たったこれだけの戦力が、今のEDF日本支部が持てる全力の攻撃部隊。

たったこれだけの部隊で、敵の総大将を討ち取れる可能性は限りなくゼロに近い。マザーシップが飛来した第三次北米決戦の際、EDF北米方面軍は決戦要塞X3を対マザーシップに投入したが、結果は1時間と保たなかつたらしい。EDFの最高戦力である決戦要塞を1時間で墜とした相手に、たかが陸軍1個師団で立ち向かおうなど、きつと後にも先にもない事だろう。いや、無ければならない。

出撃は明日、三重県の絶対防衛線第2ラインで行われる。攻撃部隊は最後の晚餐と宴を、大阪市の各飲食店を貸し切って行なっていた。天然食料も細々となり、最早飲食業は成り立たなくなっていたが、EDF日本支部は大金を積み上げて天然食料を用意し、大盤振る舞いを行う事にした。市民達にも不十分ながらも行き渡り、皆が皆、最後の宴を楽しんでいた。

逆三日月の光は雪をしんしんと降らす雲に遮られ、フォーリナーの夜襲に備えてカンカンと照らされた大阪市の光が周囲を照らす。その光の下、人々はワイワイと騒がしく最後の宴を楽しんでいる。

その光景を、「彼」はとあるビルの屋上から見下ろしていた。

「…」

彼の足元には開けられた日本酒とお猪口が置かれており、少し飲んだ形跡もある。しかしその表情には、全く酔った様子も無い。彼はただ、無言で人々の談笑を見下ろしていた。

「こんな所に居たか、ストームー…いや、????」

振り返る。

「…貴方こそ、何故ここに？大石司令長官」

「何…私も静かに晩酌しようと思つて此処に来たんだが、どうやら君が先客だったようだ」

そういつた大石の右手には皿に山盛りに盛られた唐揚げと割り箸2本、左手にはお猪口が握られていた。…お猪口はしっかりと用意している辺り、完全に確信犯である事は言うまでもない。

何を言うまでもなく大石はストームーの右に位置取り、手すりに背中を預けて座り込

んでストーム1との間に皿とお猪口を置く。ストーム1も座り、大石から割り箸を受け取った。

「ありがとうございます」

「いや、寧ろこれだけなのが申し訳ないくらいだ。君が下に降りてくれれば、他にも色々振る舞えるだろうに」

「騒がしいのは少々苦手です」

彼は日本酒を持ち、大石が持参したお猪口に注ぎ、瓶を邪魔にならない場所に置いた。
ストーム1
「…頂きます」

2人は割り箸を割り、唐揚げを取って一口。今となつては貴重な天然食料、その中でも更に貴重な肉類も今日に限つては盛大に放出されていた。パリつという音と共に程よく熱い肉汁が口の中に入り、旨味を舌に伝える。

「…今じゃ、かつてはたった数百円だったこの唐揚げも貴重な食料か」

「あらゆる産業が崩壊した以上、仕方ありません。経済そのものも最早意味が大して無く、そもそもとして我々は日本列島の外に出る事は出来なくなりましたから」

「……………」

二人は言葉を交わす事も無く、唐揚げを着に日本酒を楽しむ。30分もすれば、唐揚げが盛られていた皿は空となり、代わりに用無しとなつた2つの割り箸が置かれてい

た。

「……………」

「……………」

ただ静かに、時間だけが過ぎるその空間。その空気を、大石は断ち切った。

「…明日は、決戦だな」

「…ええ」

「……………勝てると思うか？」

「…こんな形で聞きたくはないですが、勝てると思いますか？北米の決戦要塞X3をも墜とした相手に、たかが陸軍1個大隊と空軍2個飛行隊が敵うならば、この戦争は今頃人類が勝っています」

「…そうだろうな」

グイツと、お猪口の酒を一飲み。アルコールが喉を通過する感触を明確に感じつつ、新たな酒を注ぐ。

「私も焼きが回ったな。ひたすらに目の前の人達を守ろうとして考えて考えて考え抜いて、その果てがこんなザマだ。何千万の市民を守るために数万の兵士に余計な負担を掛け、戦術的勝利に何の意味も無い指揮さえも取ってしまった。数十の市民の為に、数百の兵士を失う意味が果たしてあったのか、今でも考えてしまう。…結局、守りきれなけ

れば意味が無いというのにな」

「……………」

「…すまないな、こんな暗い話などするべきではなかったか」

「いえ、一人で溜め込み過ぎるよりは良いです。それに、ほぼ勝ち目はありませんが、可能性は決してゼロじゃありません」

「…何？」

思わず、大石は彼に顔を向ける。彼の表情は、苦笑いそのものだった。

「明日の最終作戦に出撃する陸軍部隊は、全員が志願者です。下で軽めに見てみましたが、多くの者達が「大切なもの」を失い、ある意味で人としてのタガを外しています。それ故に彼等は士気が低く、同時に高くもある死兵。死に場所を求め、一つでも多く奴等を道連れにしようとする彼等の突撃力は決して舐めたものではありません。マザーシップの弱点さえ分かれば、そこに一撃を穿つ事が出来れば…奇跡が起こるかも知れませんね」

「……………」

「どちらにしろ、最悪の中で最善を尽くすしか無いでしょう。そんな都合が良い展開は早々起こる事がありませんし、そもそも全滅も覚悟の上。それに…」

「家族を殺したクソ野郎どもを1匹でも多くブチ殺したいという点では、自分も彼奴ら

と全くの同類です。その序でに、人類の意地汚さを見せつけてやります」

そう言つて、彼はお猪口を右手に持った。

「…そうだな。存分に暴れて来い。最後の大舞台だ、幸い武器弾薬だけは存分にある。奴等に目にもものを見せてやれ」

大石もそれに同調してお猪口を持ち、二人は同時に逆三日月に向けて掲げた。

「人類に」

「EDFに」

そしてその酒を一口に、景気良く飲み込んだ。

最後の休息 2

二人が人類EDFに向けて杯を捧げた、その直後。

屋上から建物内に繋がるビルの扉が唐突に、凄まじい音を立てて開く。

「やつほー!!」

と共に、二人にとつてはとて色んな意味でも聞き覚えのある声が聞こえた。一瞬の視線の交差の後、同時に振り返る。

「やあやあスーくん、司令ちよーかん!探してたんだよー!」

そこに居たのは、兵器開発部の最精鋭の科学者 篠ノ之束。雪が降るほどの気温でもあるにも関わらず、エプロンドレス&am p;ウサミミの格好を着ているのは寒さに強いのか、それとも気にしていないのか。

それはともかく。二人の姿を認めると彼女はすぐさま、当然のようにストーム1の隣に座つて腕に抱きついてくる。そんな彼女の行動に彼は慣れていいのか、特に声を上げる事もなく受け入れる。

「もー、何だつてこんな人の居ない所に居るのさスーくん。兎さんは寂しいと死んじやうんだよ?」

「下は人が多過ぎる。静かな所にいたかっただけだ」

「あー…すまない、篠ノ之博士。その背中の物はなんだ？」

早速2人の世界から弾き出されそうになった大石司令は、東の背中に背負ってある細長いガンケースに注目し、問いかけた。

「おっとつと、東さんとした事がすっかり忘れる所だったよ」

彼の腕から離れた東は、ガンケースを下ろして2人の対角線上の位置に置く。

「私が今ここにいるのは、スーくんに渡したい物が漸く完成したんだ」

カチカチと、ガンケースに施されているロック解除の操作を開始。4桁から成る暗証番号と指紋認証を終え、封を開けられたその箱が、開けられる。

そこにあつたのは、一丁の武器。銃種はスナイパーライフル。それもサイズを見るに量産型のMMFシリーズではなく、高火力型のライサンダーシリーズか、ストリンガーシリーズのように思える。しかしそれでも、彼女が持ってきたその武器は、余りにも重厚な見た目と威圧感を持っていた。

「この武器の名は、ストリンガーJ9。全世界で唯一、マザーシップの装甲をも貫ける可能性がある…人類に残された牙だよ」

「J9…!?それは此処には十数丁分のパーツしか無かった代物だぞ!?まさか、再生産に成功したのですか!？」

武器の名を聞き、思わず大石は声を荒げた。

ストリンガーJ9。それはかつて存在していたEDF東京基地の兵器開発部が着手していた、新型スナイパーライフル。ライサンダーシリーズを「対巨大生物兵器」として見るのなら、ストリンガーシリーズは「対^機ヘクトル用」として見るのがいいだろう。「マンハンター^人」という異名さえも持つ、平均全高30mの二足歩行兵器。ヘクトル。その見た目に反した運動性能の高さ、各所に施された円形関節による衝撃吸収機構、両腕に固定装備された粒子マシンガンやレーザー砲、プラズマ迫撃砲による大火力。それらを統合した戦力評価は「ヘクトル1機につき、大戦前の1個機甲部隊に匹敵する」とさえ言われている。しかもタチの悪いことに、フォーリナーにとってはヘクトルはいくらでも替えがある駒の一つでしかないらしい。日本支部の機動部隊殲滅作戦やヨーロッパ戦線の第一次欧州防衛戦で、数百数千のヘクトルが戦列を成して歩くその光景は、最前線の兵士達に深い絶望を与える光景の一つとして余りにも有名だ。

更に同時期から巨大生物の甲殻変異により、スナイパーライフルの火力不足が徐々に問題視され始めていた。その為EDFはスナイパーライフルの高火力型の開発を開始。最終的にライサンダーシリーズとストリンガーシリーズの2つが選ばれ、開発が始まっ

た。ライサンダーシリーズは巨大生物を即殺する威力、そして大群にも対抗し得る汎用性を。ストリンガーシリーズは、マンハンターを殺せる確実な大火力のみを求めて。

その果てに生まれたストリンガーシリーズの極致、ストリンガーJ9。それは大火力をひたすらに求め続けた科学者達の、オーバーテックノロジーの結晶。機関部には超小型のジェネレーターを搭載し、引き金を引くとジェネレーターが反物質を生成。同時に銃身が超電磁状態へ移行。結果、銃身の内壁に触れずに反物質弾は撃ち出され、形成限界射程である1600m内に存在するあらゆる物体を消滅させながら突き進む。

幸いにしてこの超兵器 ストリンガーJ9は開発に成功し、十数丁分のパーツの生産に成功していた。しかし不幸な事に、開発及び生産を行っていた東京基地が、フォーリナーの侵攻によって電撃的に陥落してしまった。

結果、設計図及び開発チームは東京基地から脱出する事は叶わず、EDFが手に入れる事が出来たのは、僅かに十数丁分のパーツのみ。組み立てる為の設計図も無く、バラバラのパーツだけでは武器にさえもならない。そしてEDFが欲していたのは「量産」だ。故にEDF日本支部は、ストリンガーJ9の再生産を兵器開発部に要求していた。しかし失われた人材のダメージは重く、そして原初の天才である篠ノ之東であっても、これ程の代物は手に余った。結果として、今日までストリンガーJ9の再生産は叶っていないかった。

しかし今、目の前には完璧な姿としてガンケースに収められたストリンガーJ9。大石が再生産の期待を抱くのも無理はない事だった。

「んーん、残念ながらストリンガーJ9の再生産は出来てないままだよ。銃身とかの構造解析は出来たけど、機関部のジェネレーターは未だにチンプンカンプン。どうやったら燃料無しに反物質を生成できるのか全く分からないもん」

「なら…」

「 فقط」

「実物があるのなら、設計図無しでも組み立てる事くらいは出来るよ」

「ッ…」

「ふっふっふー、司令ちょーかん。このくらいで驚いてどうするの。私を誰だと思ってるのさ？」

彼女の表情に浮かぶ絶対の自信。見方を変えればまるで傲岸不遜そのものだが、事実、彼女を上回る頭脳は今現在の人類に存在していない。

「この一丁は、大阪本部此処に現存してたパーツの中で一番状態が良い奴だけを選んで組み立てたよ。オリジナルのデータがほぼないから、どのくらい性能を取り戻しているのかは全

く分からないけど…それでも、試射データによると射程は1600m。輸送船の装甲を貫通する事に成功したから、威力は十分にある。だからといってマザーシップの装甲まで貫通する事が出来るかは、確約は出来ないよ。そして私が明日の作戦の運用に耐え得ると太鼓判を押せるのは、この一丁だけ。これを、スーくん任せたいんだ」

「…」

彼は、静かにストリンガーJ9の銃身を撫でる。掌に伝わる金属の感触と無機質な殺意。

「俺で良いのか?」

「スーくんだから、だよ。私が知ってる中でも、そして司令ちよーかんの中でも、スーくん以上の戦闘能力を持った兵士は知らない。今のEDFの戦闘ドクトリン戦闘教義は、少数精鋭主義による機動遊撃戦。一番良い武器を、一番の兵士に与えるのは当然でしょ?」

「…確かに、な」

会話が途切れ、沈黙の時間が生まれる。

「…司令ちよーかん。その…2人だけで話したい事があるんだ。少し、良いかな?」

「…そうだな。私も最終作戦の計画内容の最終確認がある。気が済むまで話していいわないさ」

大石はそう言い、持参したお猪口を置いたまま立ち上がり、そのまま屋上から退出。

ドアが閉まる音が響き、正真正銘2人だけの空間となる。

「…」

東は無言で、彼に真正面から抱きつき、顔を彼に見せないようにする。直後、すすり泣く声を彼の鼓膜が拾う。

「……………そーくん。私と一緒に、逃げようよ」

「…」

「なんでそーくんが、まだ…戦い続けなくちゃいけないの？明日はまだ1000人も戦ってくれる人がいる。それに…」

「もう、人類が勝てる訳がないよッ!!」

「たった半年で日本以外の軍隊は全滅して、もう私達しか居ないッ!!もう私も、そーくんも、皆も、もう勝てない事くらい分かっている事なのにッ、何でまだ戦い続けようとするの…!?もう、何もかも投げ出して2人で逃げて、最期まで一緒に居ようよ!!それで、それで…ッ、もういいでしょ!?!」

彼女の心の底を表す号哭。あらゆる抑えを破壊し、彼女が叫んだ言葉は、果たして彼の内に届くのか。

「…なら、何でお前は逃げ出す手段を作るよりも先に、こんなものを組み立てて、俺の元
ストリンガーJ9
 に持つてきたんだ？」

「分からないよ…私にも私分からないんだよ…!!私の中に今、フォーリナーを憎んで
 憎んで堪らない私と、こんな戦いから逃げ出そうとしている私が居て、あの頃からずつ
 と私の心の中で戦って、心を荒らして、私をおかしくする…!!もう私自身がどうしたい
 のか、私でもよく分からない…!!」

「俺も似たようなもんさ」

「え…?」

彼の言葉に、思わず束は顔を離して彼の顔を見る。彼の表情は硬く、その奥に潜む感
 情は読み取れない。

「俺の中にも、戦い続ける事に疑問を持っている俺もいる。其奴に対して俺は、ずっと明
 確に答えを出し続けている。それが正解か不正解か、それ以前に正解があるのさどうか
 さえ分からないが、そんな事は知ったこっちゃない」

「大事なものはな、自分を信じる事だ。何事にも最終的には自分の実力で結果は決まる。
 なのに自分を信じれなくて何が出来る。なのにお前と来たら…自分自身がブレッブレ
 な状態なのに、此処まで完璧な武ストリンガー9器を仕上げて来やがって。間違いなくお前は天才だ
 よ。幼馴染の俺が保証してやる」

次の瞬間、今度は彼が彼女の身体を抱擁し、耳元で囁いた。

「だから、ちよつと待ってる。明日にはあのクソツタレな球体を叩き墜として、お前の元にもう一度帰ってくる」

「ッ…!!」

再び、彼女の涙腺から涙が溢れ出す。

「…それは、私への愛の告白と受け取っても良いのかな…?」

「残念だが、まだ「幼馴染」としての言葉だ。俺と付き合いたいなら、次のチャンスを待つ事だな」

「…卑怯だよ、ホント…卑怯。東さんを弄ぶなんて、君じゃなかったら激おこぶんぶん丸なんだから…」

「…約束、だからね。私を1人ぼっちにするなんて、絶対に許さないから」
「分かってるさ。兎は寂しいとすぐに死ぬ、だろう?」

この時、第三者が居たのならば。^{二十六夜}逆三日月の淡い光に照らされた2人は、極上の芸術品の如く美しい姿となって見えた事だろう。

最後の夜が、深けていく。

無自覚の布石

2017年11月16日午前1時6分。

EDF日本支部 最終作戦「アイアンレイン」発動まで、凡そ9時間後に迫った。

先程までの騒々しい雰囲気は消失し、皆が寝静まり、静寂に包まれている大阪市の一角に存在しているEDF日本支部大阪基地の一室に、大石はいた。

「…」

特に司令としての仕事もなく、本来なら明日に備えて寝るべきなのだろうが…今日は妙に寝付きが悪く、椅子に座ってある機器の調整を行なっていた。

フォーリナー大戦後期から開発されていたものの、戦況の悪化によつて生産が不必要と認定された新型の通信機器。大石は倉庫の中で眠っていた完成品を引っ張り出し、再び使えるように設計図を睨みつつパーツを組み立てていた。

(…これで、良いはずだな?)

余ったパーツが転がってたりしないかを確認し、蓋を閉める。コンセントを電源プラグに接続し、電源をオンに。通信機器のメーターが動き、正常に動作している事を確認。カチカチとダイヤルやレバーを操作し、超広域汎用周波送信にセット。ハンディマイク

を手に取り、通話ボタンを押そうとして……少し弄ぶ。

「……………果たして、何の意味があるのか」

一つため息をつき、通話ボタンを押した。

後何日生きられるのだろうか。ここ最近、彼らはずっとそう思ってたばかりだった。

各戦線が崩壊してから、EDFや各国軍はフォーリナーの大群によって引き裂かれ、今では其々が小さなコロニーを作り、フォーリナーに見つかからないようにコソコソと食料を集める毎日。今でも通信によるコロニーの交流や人間の保護などは行なっているのだが、平均して数日経つたびに、何処かしらのコロニーとの通信が途絶えている。希望も未来も見いだすことが出来ないこの状況。

——ザザッ。

ある時突然、各所に点在するコロニーにある通信機器に、其々に僅かなタイムラグこそあれどほぼ同時にノイズが入った。

通信機器の近くに居た者達は思わず通信機器を見やり、すぐに周波数を調整する。少し周波数を操作すれば、それはすぐに鮮明となる。

——トン、トン、トン。トン、トン、トン。

聞こえてきたのは、何かを軽く叩く音。軍人も首を傾げている辺り、この音に特に意味は無いらしい。1、2分程度それが繰り返されていたが、不意に人の声が入る。言語は僅かに癖がある英語。

『…此方は、E D F 日本支部大阪基地。この通信を受信しているかもしれない、何処かで生き残っている人達に向け、これを送信する』

初手で、彼等は驚愕の色を隠せなかつた。まさかまだ、こんな終末的状况で現存する軍事基地からの通信が飛んでくるとは思いもしなかつた。思わず応答しようとしたが、次に入ってきた言葉によってその手が止まる。

『この通信の応答は、受け取る事が出来ない。…受け取ったとしても、我々にはもう時間が無い。我々の抵抗に業を煮やしたのか、マザーシップが此方に接近している。明日にはこの基地も無くなっているだろう。だからこれは、我々…いや、私個人が遺す最後の通信となるだろう』

『この戦争…仮に「フォーリナー大戦」とでも名付けようか。フォーリナー大戦が勃発して以来、我々は日本国自衛隊と共に日本列島に巢食う巨大生物や、海から這い出てくるヘクトル兵団、空を覆う飛行船団と熾烈な戦いを行なってきた。幾多もの作戦の中で、数多くの、取り戻しようも無い戦士達の命を失ってきた。皆が皆、護りたいものを護る

が為に、散って行った。しかしそれでも、奴等を止めるには至らなかった…我々が気付いた時には、あらゆる戦線が崩壊し、我々は日本列島に閉じ込められた。救援も無ければ、資源も無く、そして戦力も無い。7日前の猛攻を耐えられたのは奇跡とも言っていない。しかしその奇跡と引き換えに、我々はなけなしの戦力や資源も消耗し、終末のカウントダウンを速めることになった』

『…先にも言ったが、現在我々の元にマザーシップが接近している。これに対し、我々EDF日本支部は残された戦力を結集し、攻撃部隊を編成。マザーシップに対する最後の攻撃作戦「アイアンレイン」を、約9時間後に発動する。最早大局的に敗北した我々人類にとって、唯一の希望となるのは、マザーシップの撃墜しか残されていない。だが、EDFに残された力はあまりにも少なく、そしてマザーシップの力はあまりにも強大だ。しかもマザーシップを撃墜できたとしても、フォーリナーがこの星を諦める保証さえもない。だが…それでも、それでも我々はやらなければならない!!』

『何故なら、我々はEDFだからだ!!!!』

『我々は決して敵に背中を見せない、我々は決して諦めない!!どれだけ敵が強大でも、どれだけ我々が無力でも、我々は最後まで戦い続ける!!たとえ敗北したとしても、我々は決して諦めなかったことを、大地に倒れるその瞬間までEDFは勇敢に戦い続けた事を、人類は最後まで戦った事を!!その事実をこの星の歴史に、奴等に刻み込む!!』

『…もし、マザーシップの撃退に成功したならば再度この通信を発信する。その通信が果たして勝利宣言か、それとも怒りに狂ったフォーリナーの侵攻によつて崩壊する基地からの最期の通信になるのかは分からない。が…少なくとも、その時は奴等の自慢の母船を地に墜とせた事に多少の溜飲が下がるかもしれないな』

『最後に、私の名前を覚えておこう。…EDF日本支部司令長官、大石宏光。通信終了』

カチ、と通話ボタンから指が離れて通信が途切れる。また一つ溜息を吐き、電源をオフに。

『…』

全くもつて自己中心的なエゴ。自ら他の地で生き残っているかもしれない人達に一瞬だけの希望を見せるなど、あまりにも酷い話だ。しかしそれを、せめて部下達には可能な限りに露呈せぬよう、真夜中にひっそりで行った。

『…』

通信機器を置く都合で横にずらしていた写真立てを手に取り、僅かに付いていた汚れを払い取る。

「…もうすぐ、そっちに行く事になりそうだ。その時はまた一緒に、美味しい紅茶を楽しもうか」

写真立てを置き、ベットで横になって目を瞑る。ものの数分で睡魔が大石の意識を侵食し、眠りについた。

この時、大石が発信した通信は日本列島を越えて宇宙まで届き、偶然生き残っていた通信衛星を経由して全世界に拡散し、届いていた。

『此方ベルリン、皆が賛同した。我々も作戦に参加する』

『了解した。歓迎するぞベルリン』

『モスクワだ、武器弾薬を融通してくれるコロニーは居ないか？参加したいんだが武器が足りない』

『此方ポドリクス、軍人さんがモスクワ基地の地下兵器保管庫の場所を知ってるらしい。今からそっちに向かうから合流しよう』

『此方はニューヨークより発信している。我々も参加する。他のアメリカコロニーも作戦に向けて準備している』

『誰でもいい、巨大生物の巣穴を吹っ飛ばす勇氣のある奴は居ないか？爆弾を放り投げ
て奴等を怒らせてやろうぜ』

『そいつあ良いな、ブチ切れた奴等の顔はどんな顔なのやら』

『∴所で、一つ提案があるんだが。我々の名前を決めないか？仮にも連合になるんだ。
名前くらいは決めても良いだろう？』

『なら、ちようど良い奴を思い付いた。これはどうだ？』

『カインドレッド・レベリオン。俺達もE D F反逆者の仲間血縁になるんだ。ピッタリな名前だろ
う？』

死地へ

三重県 志摩市 都市部中央。

その上空には、6隻のキャリアーと、世界各地を…否、地球を今もなお蹂躪するフォーリナーの母船 マザーシップが浮かんでいる。輸送船 キャリアーのハッチから小型ヘクトルによる空挺が行われ、都市部はおよそ80の小型ヘクトルによって完全な占領下に置かれている。

その郊外に、EDF日本支部の最後の攻撃部隊は居た。規模は僅かに一個大隊、法外な戦闘力を持つマザーシップを墜とすには、明らかな戦力不足。しかし、その事実を前にしても、彼らの目は死んではいなかった。

『…此方はEDF日本支部。これより、最終作戦「アイアンレイン」を発動する』

EDF日本支部大阪基地より発信された大石の通信が、全員の通信機を通じて届く。『フォーリナーの攻撃で世界は壊滅状態。EDFも、最早我々だけだ。敵の力は凄まじく、世界が滅びるのも時間の問題。しかし、我々は、我々だけは諦めるわけにはいかない。我々は攻撃されるのを待ちはしない。残った戦力でマザーシップを強襲し、マザーシップを撃墜する。それだけが、人類が助かる道である！三重県志摩市に襲来した

フォーリナーの戦力は、マザーシップ及び護衛飛行船団6隻、空挺済みの小型ヘクトル80。対する我々の戦力は一個歩兵大隊及びギガンテス10両、EJ24戦闘機及びF-15J戦闘機によって構成された二個飛行隊のみの敗残兵だ。しかし君達全員が今戦争を今日まで戦い、生き残ってきた一騎当千の古強者だ。だからこそ私は、君達が100万の軍集団に匹敵する事を信じている』

『今、此処で断言しよう。君達は間違い無く、「英雄」だ。我々の、希望だ』

『…全部隊、攻撃開始!!!』

それが、合図だった。

関の声を上げ、EDF日本支部攻撃陸軍部隊は志摩市に向けて突入していく。それは空気を震わし、志摩市に響き渡る号令へと変える。

ギガンテス10両、ハンターチームが時速75km/hの速度で突出し、突撃していく。

「全車、狙ええ!!」

ハンターリーダーが号令し、各車の砲塔に搭載されている140mm砲が小型ヘクトルに向けて照準を開始。優秀なデータリンク能力と姿勢制御能力によって、目標が重複する事なく照準を完了する。

「撃ち方始め!!」

同時に、10両の戦車の主砲が咆哮。勢い良く打ち出された新型砲弾は、小型ヘクトルの装甲をたやすく突き破り、内部でめちやくちやに暴れまくって機能を破壊。僅かな差がありながら、しかしほぼ同時に10機の小型ヘクトルが崩れ落ちて地面に倒れ、爆発。

「各個に撃て、輸送船直下まで潜り込むんだ!!」

続けて放たれる砲撃によって次々と小型ヘクトルを破壊していくが、同時に小型ヘクトルに装備されてあるマシンガンやレーザー砲、プラズマ迫撃砲による攻撃が開始される。マシンガンとレーザー砲はハンターチームに集中するが、プラズマ迫撃砲はその後方、歩兵部隊へ向かって落ちていく。

「散開!!」

歩兵部隊は小隊規模で分散を開始。其々が空を睨み、プラズマ砲弾が着弾するおおよその地点に当たりをつけて回避する。しかしずっと完璧な回避をしきれぬわけもなく、避けきれなかった者や爆風をともに受けた者達は大きく吹き飛ばされ、その者達は起き上がって再び走り出すか、それとも2度と動かなくなるかの二択となる。

「ツ……ハンターチーム、処理速度を上げるぞ!もつと注意を此方に向ける!」

『それでもこのじゃじゃ馬を何とか乗りこなしているんですがねえ!!まあいいや、派手に突っ込んで大暴れしましょうや!!』

ハンターリーダーの指示に、副隊長が景気良く応える。

その中で副隊長が「じゃじゃ馬」と揶揄したのは、彼等が操っているギガンテスそのものである。ハンターチームのギガンテスは、生産性の一切を無視して極限まで性能を突き詰めた最終決戦モデル。最大速度75 km/hにも及ぶ機動力に加え、フォーリナー大戦中期に開発された特殊装甲を採用。これによって酸、プラズマ、レーザーに対して有効的な防御能力を手に入れた。内部の電子能力も、陸上自衛隊の10式戦車の^{データリンク能力}C4Iシステムや指揮・射撃統制装置を搭載し、効率よく敵に打撃を与える一つの狩人の群れへとギガンテスを進化させる。

小型ヘクトルの粒子砲とレーザー砲の弾幕が、ハンターチームに襲いかかる。しかしギガンテスの特殊装甲の前に決定的火力となるには力不足であり、次々と140 mmによる反撃で小型ヘクトルが倒れていく。しかし、上空の輸送船6隻からハンターチームの処理速度には劣るが、それでも恐るべきペースで小型ヘクトルが次々と降下していく。

『くそ、次から次へと輸送船から降りてくる!!これじゃキリがない!!』

『隊長、輸送船を落としましょう!!』

「ダメだ、角度が悪い!もつと近付かないと有効打にならないぞ!!」

輸送船…というより、フォーリナーの大型兵器の殆どは強力な装甲で守られており、

弱点以外の攻撃は一切を受け付けない。輸送船の場合、下部のハッチの中にある放出口が唯一の弱点であり、その角度故に陸戦部隊以外では輸送船の撃墜は不可能である。

この短い討議を交わしているだけで、数十発ものレーザーや粒子弾がギガンテスに被弾。まだ問題ないが、こうして被弾し続けていればやがて装甲は疲労し、貫通を許すかもしれない。

が、彼等は構わず突き進む。構わず撃ち続ける。ノーガードの殴り合い、しかし相手は無限大に倒れ、無限大に増える。このままでは限界はすぐに見えていただろうが、この戦場にいるのは彼等だけではない。

「撃てえ!!!」

歩兵部隊から、数百発のロケット砲弾やスナイパーライフルの銃弾の弾幕が展開。彼等が持つ武器も有効射程圏に入り込み、火力戦が始まった。

場面は変わって、EDF日本支部大阪基地 オペレーティングルームへ。

「歩兵部隊、交戦を開始しました!」

「輸送船団、現在もなお小型ヘクトルを投下中!!やはり輸送船を撃墜しなければ……!」

「ハンターチームは引き続き機動戦闘を継続！火力と機動力でヘクトルを翻弄し、歩兵部隊の援護を！隙あれば輸送船への攻撃も構わん!! ああクソツ、ハンター2 突出し過ぎだ！少し下がれ!!」

部隊を管制するオペレーターや状況を逐一観察するリーダー員、そしてEDF日本支部の最高指揮官かつ最終作戦 アイアンレインの総指揮官の大石の怒号によって騒乱となっている。大石もその騒乱に負けぬ程の声を張って各部隊への指示を送りつつ、時には自ら無線機を取って直接指示を送る。

戦況は、互角に近い。火力と射程はEDFが上回っているから小型ヘクトルは次々と倒せているのだが、輸送船6隻から次々と小型ヘクトルが降下してきており、数が思うように減らない。このまま近付けば歩兵部隊の大損害も免れないが、かといって遠距離から削っても輸送船からその分を補充されるだけで、結局は弾と時間と命の無駄な消費に終わる。ならば損害覚悟で防衛線を強行突破し、輸送船団を壊滅させるしかない。

「…やつぱり。司令、輸送船団より降下される小型ヘクトルのペースが落ちてきています」

「何?」

「最初は分間72機でしたが、現在は60%程度です。この調子で小型ヘクトルを漸減し続けければ…」

「いずれは輸送船直下まで潜り込めるか……よし」

「大変です、司令!!」

新たな戦術指示を出そうと無線機を手に取った矢先、それを止めるかのように一人のオペレーターが声をあげた。

「どうした?」

「世界各地で一斉に戦闘が始まりました!世界中至るところでEDFの旗が掲げられているとのことです!!」

「何だ?!?すでに各地のEDFは壊滅したはずだろう!!」

「旗を掲げているのは、市民達です!!生き残った市民達がEDFの旗を掲げ、世界中で戦闘を開始したようです!!彼等は「カインドレッド・レベリオン」と名乗り、各地から続々と、我々に向けて通信が入っています!!すべて内容は同じ……!!」

『幸運を祈る』……以上です!!」

「……ツ!!!」

その瞬間、大石の頭の中で全てが繋がった。突然の市民達の行動、そしてEDF日本支部に向けたただ一言の通信。その理由と意図を、彼は理解した。

理解したからこそ、彼は己を激しく嫌悪し、机に拳を叩きつけた。

「…ハンターチーム、聞け!! 現在飛行船団から降下される小型ヘクトルの数が減りつつある! しかしこれ以上の時間を掛ければ、マザーシップからの砲撃が始まる恐れがある!! 故に君達は戦線を全速力で強行突破し、輸送船団を撃破! 返す刀で小型ヘクトルを包囲し、殲滅しろ!」

『ハンターチーム、了解! 全車行くぞ、後ろは構うな!!』

ギガンテスのエンジンが咆哮し、コンクリート製の壁を突き破る。

視界が開けた刹那、50m先に小型ヘクトル2機と交戦する歩兵部隊を発見。照準し、速射。一機撃破するが、もう一機が脅威ギガンテスに気付き、歩兵部隊を無視して砲口を向ける。が、その瞬間歩兵部隊からの全力射撃。ゴリアスとステイングレイによる一斉射は、ダメージを負っていたヘクトルに更なる大ダメージを与え、その巨体をバラバラにした。

ギガンテスは勢いそのままに別方面の援護に向かい、歩兵部隊は続けざまに上空の輸送船へ攻撃。他方面からもいくつかのロケットが飛来し、弱点に合計数十発を受けた輸

送船は全機能を停止。地上を向けて垂直落下を開始した。

他の箇所でも小型ヘクトルの戦線を突破し、次々と輸送船へ攻撃、撃墜に成功しつつある。この勢いを保てれば、マザーシップの護衛戦力は殲滅出来る事は明白。

だが、そんな簡単に事は運びやしない。

突如、マザーシップの下部の装甲が解放。そこからおよそ全長300mの細長い物体が出現し、展開される。

『マザーシップから巨大砲台が展開ッ!!』

『…ッ!!全部隊に緊急連絡!!巨大砲台に急速なエネルギー充填を確認!!』

『全員散開しろっ!!急げえ!!!』

攻撃が一時中断し、全陸軍部隊は回避行動を取る。その最中、展開されたマザーシップの巨大砲台から甲高い音が響き、一部の部品は白く輝き始める。

そして。

——キイイイツ!!!

真下から、一直線。巨大砲台から白いレーザーが照射され、そのまま町を切り取るかのように角度を付けて振るわれた。

『あ…』

『逃げ』

刹那、直線4 km、半径200 mの範囲が、核に匹敵する業火によって全てを消し飛ばした。

地獄は、まだ始まったばかりだ。

更なる絶望へ

大地が、震える。

マザーシップの巨大主砲より放たれた一撃は、正に破壊の権化の如く。そこに存在したあらゆる物質を焼却し、無に返した。純粹な熱エネルギーによる焼却攻撃は、この7ヶ月で数十の都市と幾千幾億の命を焼き尽くしてきた。

その力はこの場でも遺憾なく発揮され、一瞬にしてEDF最終攻撃部隊は歩兵7部隊とギガンテス1両を喪失。

『マザーシップの砲撃が着弾ッ!!レンジャー2―1、2―3、2―4、3―2、3―6、4―1、5―2、タンク7の連絡が完全途絶!!小型ヘクトルも数体が巻き込まれて消滅しました!!』

『全部隊、可能な限りの全火力を巨大主砲に集中!!マザーシップの攻撃を止める!!』

しかし、そこで立ち止まっては全人類は滅亡する事と同意義。彼等は決して足を止めず、天を睨む。

成る程、確かにマザーシップを見た一部の者が「神」と揶揄するだけの事はある。一片の瓦礫さえも生み出さないその業火は、ルールオブゴッド神の御技と名付けられるに相応しい。

しかし、それは人類が膝を付く理由には決してなり得ない。「神」が降臨した？
ルールオブゴッド
 「神の御技」が振るわれた？

だからどうした。

神だろうが上位者だろうが、たかがたった一つの存在。そんな奴が、幾億の命を燃やす灯を壊そうとする事など、決して我々EDFが認めない。

それを証明するべく、地より力が放たれる。武器性能限界一杯で撃ち放たれたそれは、僅か数秒で数千のロケットの弾幕となつて現れる。更に速く、スナイパーライフルの銃弾幕が巨大砲台に着弾。僅か7ヶ月で数度のブレイクスルーの果てに生まれた対フオーリナー弾頭は、しかし巨大砲台の装甲を凹貫ませる事に至らないに成功する。

遅れて幾多のロケット弾が次々と着弾するも、これも巨大砲台の致命傷とはならない。

刹那。

ある兵士の武器から放たれた1発の反物質弾が、巨大砲台の装甲を貫通。巨大砲台内部機構に薄く展開されているエネルギーシールドさえも突破したそれは、射線状に存在するあらゆる物質を消失させ、巨大砲台に損害を与えた。

『巨大砲台に損害を確認！全輸送機、撃墜！』

『よし、良いぞ！散開しながら攻撃を継続しろ！固まっていれば巨大砲台に吹き飛ばされるぞ！』

『志摩市より北部200km地点に地底から巨大生物5000出現！志摩市に向かっていきます！』

『航空部隊に攻撃要請！ミサイルで吹き飛ばせ！』

本部からの指示に従い、各部隊は更に動く。各陸軍部隊は志摩市各所に散らばるよう散開しながら巨大砲台への攻撃を継続。航空部隊は、志摩市北部に向かってくる巨大生物の殲滅に。

次々と弾幕が着弾している巨大砲台は、第二打撃の準備を開始する。再度、マザーシップ内部から生み出される膨大なエネルギーが、巨大砲台に注がれ始める。

『巨大砲台第二撃、間もなく!!』

『足を止めるな、砲火を止めるなッ!!これは無理でも、第三撃は撃たせるな!!』

直後、再度砲撃。

再び巨大砲台から白いレーザーが照射。またしても町を切り取るかのように角度を付けて振るわれ、爆発。大地が抉れ、全てが焼き払われる。

『ッ:!!レンジャーチーム、全滅状態!!タンク6も破壊されました!!』

『本部ッ、応答願います:!!こちらレンジャー1-5!砲撃で皆やられました:動ける

のは自分だけです……！最寄りの部隊へ合流出来るルートを指示してください！』

『レンジャー1ー5、其方にタンク9を向かわせます！合流しタンクデザントで砲撃地点から離脱、その後他部隊と合流して下さい！』

『ヘクトル全滅を確認!!』

『何としても巨大砲台を破壊しろ！ダメージは蓄積している、第三撃は阻止しろ!!』

混線する無線。その最中でも攻撃部隊は統制を失ってはいない。

『このお、このお!!お前らのせいであんな死んだんだ！ちきしょう……ちきしょうツ!!』
『どうせ帰る場所はないんだ！この命……くれてやる!!』

『墜ちろツ……』

『墜ちろオオオオオオオオオオオツ!!』
『!!!!』

瞬間。弾幕に紛れ、数度目となる反物質弾が巨大砲台に着弾。ボロボロになりつつあつた装甲を容易く破壊し、遂に巨大砲台のコアを貫いた。機能不全を防ぐ為に常時多量のエネルギーを貯蔵しているコアの損傷は、決してあつてはならぬ事。損傷した箇所から膨大なエネルギーの流出が始まり、コアどころか巨大砲台そのものの爆発が連鎖的に発生していく。

『巨大砲台の破壊に成功ッ!!崩壊していきます!!』

『やった!ついにやった!俺たちの勝ちだ!』

すると、マザーシップから巨大砲台が抜け落ち始める。巨大砲台の爆発は止まっていない。

『巨大砲台が落ちるぞーッ!!』

『勝った!人類は勝ったんだッ!!』

皆、喜びの声を挙げる。その目の前で、巨大砲台は爆発。粉々に粉碎され、その姿を消した。

『まだまだッ!!総員、対空戦闘用意!!』

それを打ち破ったのは、大石司令の怒声。

『貴様ら、何をぬか喜びしている!?!我々はまだ巨大砲台を破壊しただけだ!!我々は漸く奴の武装一つを剥いだけ…!!』

『マザーシップは、まだ死んでなどいない!!!!』

それに應えるかのように、マザーシップは、絶望の権化は。その力を、開放する。

——ヴォーン！

マザーシップの装甲板の一部が、分離。上部約100、下部約100、総数約200枚の板は、マザーシップをゆっくりと周回し始める。

『マザーシップの変化を確認… マザーシップの周囲に、何か…何か、飛んでいます！』

刹那。

50以上のレーザーと50以上のプラズマ砲弾が、マザーシップ下部の浮遊装甲板より放たれた。

『ぐあっ!?!』

『攻撃してくるぞ！あれはマザーシップの砲台だ!!』

『総数、およそ200!!下部の浮遊砲台の砲撃に地上部隊が晒されています!!なんていう要塞なの…ツツ!?!』

『クソ、総員砲台を攻撃しろ!』

本部の指示がならずとも、既に彼等はマザーシップの浮遊砲台への攻撃を始めていた。しかし、2秒毎に放たれるレーザーとプラズマ砲弾の弾幕の前には、余りにも。

余りにも、火力の差が大きすぎた。

『うわああああああッ!!』

『本部、本部ッ!! 敵の攻撃は余りにも苛烈ッ!! 既に負傷者多数、このままでは全滅を待つだけです!!』

『くそッ…!! 総員、建物に隠れながら敵砲台を破壊せよ!! 最後まで諦めるな!!』

『クソ、プラズマ砲弾来ぞ! 回避イ!!』

『此方タンクロー! 射角が取れない、全車外縁部に移動して機動砲撃戦に移行する!!』

マザーシップはレーザーのみならず、低速なれど建物ごと破壊出来るプラズマ砲弾を雨嵐の如く投射している。このままでは地上部隊が浮遊砲台を破壊する前に全滅するのは、明らかだった。

しかしその時、オペレーターの1人が、気付く。

「これは…大石司令、見てください! マザーシップの下側が開いています!」

それは、巨大砲台の展開部分だったマザーシップ下部。そこは今、赤く発光する場所を露出し、多量のガスを放出している。

「どういふことだ…?」

「おそらく、大気の吸収口だと思われます。マザーシップは過去の作戦にて地球の大気を吸収し、「呼吸」している様子を観測しています。そして現在投射している凄まじい攻撃力を発揮するためには、更に大量の大気が必要とするものと思われます!」

「つまり……！」

「はい、大気吸収口にはシールドを展開できないはずですが、マザーシップの弱点です！」

「だが、弱点が分かっても……！」

『ああああああああああ!!』

『ぐあああああああああああッ!!』

「レンジャー1―3、応答して下さい！レンジャー1―3!!」

「レンジャー5―1聞こえるか!?レンジャー5―1ッ!!」

「戦車部隊、4両目が破壊されました！」

「攻撃部隊は、壊滅5割以上損失的状况だッ……!!」

悲鳴をあげて途絶えていく通信、応えるはずのない部隊に必死の呼びかけをするオペレーター達。

町を更地にせんと言わんばかりの大火力の前に、地上部隊の多くは壊れかけの建物から比較的な建物へと逃げ惑い、まともな反撃を行う暇さえ無い。

「弱点が分かっても、どうにもならないというのか……ッ!!」

『地上部隊、聞こえるか？此方は最終航空部隊だ。我々はこれよりマザーシップへの突

貫を開始する』

『此方本部、言っている意味が分かっているのか!?!相手は全世界の航空戦力を殲滅させているんだぞ!』

「だからといって、このままじゃ地上部隊は皆殺しにされる。そうなったら人類は終わりだ。囹は、しづとい方が良い」

『……………』

「俺達は全員覚悟の上だ。だから、行かせてもらおうぞ」

『…分かった』

「オーライ。全地上部隊、これから俺達がマザーシップに対して喧嘩を売る。どのくらい砲火が弱まるかは分からないが、兎に角幾らか注意が引けたらマザーシップに攻撃を行え。後は任せたぞ」

そう言つて、彼は周波数を切り替えて部隊との通信に入る。

「…そういう事だ。お前らの命を俺にくれ」

『隊長、それは今更過ぎやしませんかね?この戦争が始まってから、ずっと隊長に預けつ

ばなしですぜ俺達は』

『我々も貴方に預けよう。既に覚悟は出来ていることだ』

周囲には、EDFのEJ24戦闘機14機と、元航空自衛隊のF-15J戦闘機8機。計22機のちっぽけな航空戦力。

しかし今、彼等は最後の矢となり、マザーシップを穿つ意思となる。

「…命を求めるならば命を捨てよ!!全機、突撃!!」

アフターバーナー。ジェットエンジンより排気されるガスに再び燃料を吹き付けて生まれる大推力は、EJ24戦闘機とF-15Jを音速の壁を破るには十二分。

高度500mでソニックブームを巻き散らしながら、水平線の先に存在しているマザーシップへ突貫を開始。

「大空戦のデータでは、マザーシップのレーザーは重力に逆らう程の高火力かつ直進性だ!奴が攻撃してくるタイミングは水平線から俺達が飛び出た瞬間!その前にミサイルを全弾叩き込む!全機、データリンクは完了しているな!」

『オーライ!』

「全機、FOX3!」

その合図をきっかけに、EJ24戦闘機とF-15J戦闘機のハードポイントに接続された圧縮空間搭載のミサイルポッドから、間隔と発射角度を変えつつも次々とミサイ

ルが放たれる。その総数、1584。

『スツゲエ光景だなあ、コリヤ。後にも先にもこんな光景見れるかどうか』

『2度も見たくはないがな』

『全くもつてその通りで』

刹那、リーダーに映し出されてたミサイル群の一部の反応が消失。彼我の距離と高度から見て、明らかにミサイル群は水平線から飛び出しているわけでもない。つまりは。

「…マズいな、マザーシップが水平線外から迎撃している。レーザーを曲射でもして来たか」

『向こうも進化するってか…予定に変更は?』

「無い」

『此方地上部隊!砲火が航空部隊に逸れた、これよりマザーシップへ攻撃を行う!』

先行するミサイル群の反応が次々と消失する中、地上部隊からの通信。どうやら彼等の迷惑通り、マザーシップの注意を引き付ける事に成功したらしい。

「ミサイル群、半分消滅か…予想以上に迎撃ペースが早い」

『幾ら私達より速くても、静止目標には真っ直ぐしか進みませんから』

「合図と共に^{回避行動}ブレイク。各個の判断でマザーシップに接近しろ」

ミサイル残存数、471。

342。

279。

67。

刹那、水平線の先。マザーシップの影が、見えた。

「ブレイク!!」

瞬間、22の矢は彼等が思うがままの方向に旋回。刹那、およそ40の光線が航空部隊に向けて飛来。およそ光速の1%の速度であつても、その速さは約10792528km/h^{299792458km/s}。法外ともいえるその速度の前では、今日まで生き抜いて来た歴戦のパイロットとも言えど、直撃しない事を祈る事しかできない。

ミサイル全弾消滅、^{F15J一機}サクラ4被撃墜。

「ッ…!!」

^{サクラ1}彼の視界の端に偶然、サクラ4がレーザーの直撃を受けて爆散する瞬間が見えた。あれでは^{脱出}ベイルアウト以前に自分自身が死ぬという自覚さえも抱かぬまま死んでいったかも知れない。

「く、そッ…!!」

(この精度で飛んでくるとか、冗談じゃねえ…!!)

ピッチ、ロール、ヨー。基礎的な技術から生まれるありとあらゆる高等技術を使用して行われる回避機動を以つても、2秒おきに飛来するレーザーの雨は、機体の半径30m以内に常に飛来する。既にEJ24戦闘機は5機、F-15J戦闘機は3機喪失。

『ぐ、うつ……意識が、飛びそうだ……!』

パイロットの1人が、そんな声を漏らす。レーザーの雨を避ける為に続けられている激しい回避機動は、それに相当する重力加速度によつてパイロットの身体に襲い掛かる。避けなければレーザーの直撃を受けて爆散するが、かといって回避機動を取り続ければやがて頭に酸素が十分に行き渡らなくなり、思考低下によつて回避機動が疎かになり、最終的にはレーザーの直撃を受けて、死。

結論からして。彼等航空部隊が生き残る道は、「今すぐに回避機動を行いつつも撤退する」という道以外に可能性など存在していない。

しかし。

(退けるかよ……!!此処で退いても、次はもう無いんだよ!!)

今が人類最後の戦い。此処で死を恐れても、最早意味は無い。

次々と放たれるレーザーの雨を躲していく航空部隊。しかし、少しずつ、少しずつその数が、減っていく。

(あの、クソ野郎……!!)

チラリとリーダーを見るが、既に自分以外の全機が撃墜^{戦死}したらしい。マザーシップは、目の前に。地上からは、激しい砲火が見える。

(…)

すると、彼は一切の回避機動を放棄。真つ直ぐ、愚直な程に真つ直ぐに、最大速度でマザーシップへ突撃を開始。当然、マザーシップのレーザー迎撃の精度は急激に上昇。僅か3撃目で左翼に直撃。瞬間的に直撃部が融解し、抉り取られる。幸いにして燃料への引火だけは免れたようだ。飛行バランスも大きく崩れかけるも、咄嗟の操縦によつて体勢を瞬間的に立て直す。高度を下げ、後はタイミングを合わせるだけ。

マザーシップのレーザーが最大数飛来する。だが、もう遅い。

(持っていていけ、この命…ッ!!)

「サクラーツ、FOX4ツ!!」

刹那、高度を上げ、最後の1機であったF-15J戦闘機が、味方の弾幕さえも抜けてマザーシップの吸気口に衝突。マッハ2.5^{3087km/h}で飛来したおよそ3tの破壊槌。それはマザーシップに突き刺さり、吸気口から炎を上げて活動を止めるには充分な威力となった。

マザーシップの発光部分が脈動し、全ての砲台が沈黙する。

『サクラー、マザーシップ吸気口に特攻：!!マザーシップ、活動停止しました!!』

『あの野郎、やりやがった!!自分の命を犠牲に、やりやがったぞ!!』

『遂にやった：遂にやったぞ!マザーシップをやった!』

『我々の、勝利だ!!』

——ガゴン。

…否。

マザーシップ下部、各所から10本の円柱型砲台が突き出る。並び立つ姿は、正に逆さ吊りの巨塔。

『…は、あ?』

思いもしなかった、したくもなかったその光景。マザーシップが見せるその光景を、人類は茫然と見る他に無く。

刹那。

円柱型砲台から膨大な数のパルスビームの弾幕が、生き残っていた浮遊砲台から再びレーザーとプラズマ砲弾の弾幕が放たれる。

文字通りの弾幕。隙間のない熱弾の豪雨に、街が、人が、全てが、飲み込まれた。

星船

「ツ……………こツ……………んな……………」

その光景を、誰一人として信じたくなかった。

『うわ、うわ、うわわあああああああああああ!!?!』

『クソツタレがああああああツ!!!』

次々と途切れる声とシグナル。隊員のヘルメットバイザーから送られる通信画面は、画面一杯に広がるレーザーとプラズマ砲弾、そしてパルスビームに覆い尽くされ、途切れる。

「マザーシップは、健在です…周囲から砲台が出現…戦闘形態を、取ったようです…」
「これまでは、本気ですらなかつたということなのか…? そんな、そんな馬鹿な話があるかあ!?!」

誰もその叫びに答えない。答えられない。

此処にいる誰もが、諦めていなかった。此処にいる誰もが、奇跡を信じて此処まできた。此処にいる誰もが、全力を尽くしてきた。此処にいる誰もが、戦っていたのだ。その果てに辿り着いたのが、コレか。

なんてあまりにも残酷で、一方的で、理不尽で、絶望的で、破滅的な事か。

もしもこの世界に神が実在するのなら、間違いなく悪神だ。でなければ、此処まで残酷な現実が存在する訳が無い。

マザーシップ最終形態。

それは、マザーシップに備わっている全ての砲火力を以って眼前の敵を殲滅する、防御の概念さえも捨て切った捨て身の形態。

およそ200の浮遊砲台、10本の巨大砲台から放たれるレーザー、プラズマ砲弾、パルスビーム、ジェノサイドキャノンによる掃滅攻撃は、戦場の大地を地獄へと塗り替えていく。

「レンジャー部隊、およそ7割が…通信途絶…もしくは、シグナル途絶…最早、戦闘継続は、不可能………」

「…………アハツ、アハハハハハツ、アヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハツ!!!」

『本部、応答願います！此方レンジャー4―3！負傷者多数、戦線を離脱しました！』

『レンジャー5―1、戦線を離脱した…生存者は3名…』

『レンジャー4―7です…戦闘継続不可能、戦場離脱しました…』

オペレーターの1人が耐えきれず遂に発狂し、どうしようもなくケタケタと笑う。

そして生き残っていた通信から、戦場離脱の無線が次々と入る。

「……………いしまで、か……………」

大石司令が呟いた言葉は、司令室の皆の心にスルリと入り込んだ。
最早打てる手は、無い。

E D F 日本支部が抽出した最後の攻撃部隊は壊滅し、戦闘継続は不可能となった。そしてE D F 日本支部が再攻撃出来る戦力は皆無であり、マザーシップの侵攻を止める事は出来ない。

大石司令最大最後の、E D F 日本支部を、日本列島を、全人類の未来を。地球の全てをチップにし、オールインしたギャンブルの結果が出た。

——人類の敗北、と——

——不！！

突如、マザーシップの巨大砲台の一本の中心部が爆発。それは巨大砲台の全体を誘爆させ、マザーシップから剥がれ落ちる。

《b》「ッ!? 巨大砲台1基、大破!! マザーシップから落着します!!」

「あの攻撃の中を生き残っている者がいて、そしてまだ戦いを続けているというのか?!? そんな馬鹿な!!」

「そうとしか考えられません!!」

「でも、もう戦場に残っているシグナルは一つとしてありませんよ!」

騒然とする司令室。その最中にも、数個の浮遊砲台が爆散する。

「浮遊砲台4、爆散!! 間違いありません、誰かが、誰かがまだ戦っています!!」
「ッ!! 此方本部!! 誰か戦場に残っている者を見たか!」

『本部…俺は見た、俺は見たぞ…』

大石の呼びかけに、レンジャー6—3の唯一の生存者が応えた。

『ストーム1だ……ストーム1が、戦っている！』

『たった、1人で……!!』

駆ける。

戦場を駆ける。

地獄を駆ける。

あの世に最も近い大地を駆ける。

『こちらレンジャー7-1。生き残ったのは私だけです……戦線を離脱しました』

空からは視界を覆い尽くされそうな程の物量のレーザー、プラズマ砲弾、パルスレーザーが飛んでくる。

刹那で見極める。あらゆる攻撃の着弾地点外に身体を晒し、攻撃を躲す。

ジェノサイドキャノンの着弾。核攻撃に劣らぬ爆発が正面の離れた場所で発生し、爆

風が身体を吹き飛ばさんとする。

『レンジャー7-1-1! ストーム1を見たか!』

アーマースーツの筋力補強機能を全開。前方に跳び、衝撃波と衝突、不可視の壁を突き破った。

プラズマ砲弾が多数飛来。回避は不可能。左手に持つAF100で迎撃。人類史上最高の英知と技術が詰め込まれたその銃身から、7.56mmの銃弾が連続発射。それはスナイパーライフル並みの素晴らしい直進性で各プラズマ砲弾に連続命中。空中で次々と爆発し、役目を終える。

反撃に右手に持つストリンガーJ9をマザーシップの気吸収口に照準、即時射撃。ジェネレーターから生成された反物質弾が、超電磁状態の銃身を辿り、発射。極音速で放たれた最強の一撃は、マザーシップに打撃を与え、悲鳴を上げた。

『ストーム1はたった1人で、マザーシップと交戦中!』

マザーシップの攻撃が一時的に停止する。それと同時に彼も、ストーム1も立ち止ま

る。

目一杯に酸素を補給する。身体の節々が痛い、身体が休息を求めている、心臓がはちきれん程に拍動し、聴力を奪う。

それらの身体の警告を全て無視。左手のAF100の弾倉を交換。続いて右手のストリンガーJ9のジェネレーター及び銃身を急速冷却。

『繰り返します…』

再装填完了。

瓦礫の山に立つたった一人の英雄は、空を睥む。マザーシップは再び息を吹き返しており、今にも攻撃を再開するだろう。

AF100とストリンガーJ9の銃口を、空へと向ける。

『ストーム1は、マザーシップと交戦中！』

マザーシップの全火力が、たった一人の英雄に向けて放たれた。

人類史上最大最強の英雄は、既に誕生した。

人類が勝利するか、フォーリナーが勝利するか。

地球が再び人類の安寧の地となるのか、それともフォーリナーが永遠に奪うのか。

人類が絶滅するか、それとも否か。

全ての運命は、ストーム^{英雄}とマザーシップ^{絶望の権化}の手の中に。

戦士集結

NAZEDA?

マザーシップの頭脳に相当するAI基盤にインプットされている、思考アルゴリズム。それは今、眼前に見える不可解な光景に疑問を抱いていた。

NAZE, ANOSEIBUTUHASINANAI?

今回の戦いは、最終形態の移行までに殲滅出来る可能性そのものが97.19%の数値だった。たとえ最終形態に移行する異常事態になったとしても、最終的な勝率は100%であることも。

しかし、ならば、何故。

ANOMUSIHA, SINANA I?

何故、 たった1人を殺せない？

マザーシップの指向可能な全火力をたった1人に叩きつけているのに。その弾幕が、全ての逃げ場を塞いでいる筈なのに。全ての攻撃の命中率が、100%の筈なのに。

当たらない。

当たらない。

避けられる。
当たらない。

NAZEDA?

マザーシップは考える。何故此処まで想定外の事態が連続的に発生しているのかを。AIリソースのおよそ10%を使い、因果律を元にこの世界を再観測する。たかが10%と侮るなかれ。マザーシップのAIは、全力を出せば100光年以内の未来を観測する事さえも可能とする。現に、人類が滅亡し、地球を我が物に出来る未来が観測出来たからこそ、マザーシップは2017年4月1日のあの日、地球への侵略を開始したのだ。だが、この未来は知らない。

侵略前に観測したあらゆる未来にも、観測したあらゆる因果律の果てにも、こんな光景など、こんな事態など観測されていなかった。

有り得ない光景、有り得ない事態、有り得ない未来。そして再観測された未来は。

不明。

HA?

マザーシップは困惑した。未来が見えないなど、自己を確立してから一度もなかった。全ての未来はマザーシップの手の中に、未来を選ぶ権利もマザーシップの手の中

に。今までもそうしてきた、今もその筈だった。

だが、未来が見えないという事は。それはつまり、
マザーシップが負ける可能性を否定できない。

HUZAKERUNA!!

認めない、認めない。認められない。そんな事実など、そんな可能性などけして認めない。未来を再観察。

不明。

不明。

不明。

不明。

不明。

不明。

不明。

不明。

不明。

不明。

不明!!

H U Z A K E R U N A A A A A A A A A A A A A A A A A A
!!!!!!

この時、マザーシップは1つ。たった1つ、致命的な間違いを犯していた。彼は、ストーム1は。最早。

人類でありながら、人類の域を超越していた。

彼の身体能力は、フォーリナー大戦の壮絶な戦闘経験を経て、一戦。また一戦と経過する毎に成長していった。

そしてこの戦い。マザーシップという最大最悪の敵を前に、遂にその殻を打ち破つた。

研ぎ澄まされた視覚は1mm単位で敵の動作や攻撃を見極め。

研ぎ澄まされた聴覚は間違いなくあらゆる音を聞き分ける。

研ぎ澄まされた嗅覚は光学兵器が大気を焦がす匂いさえも嗅ぎ取り。

研ぎ澄まされた前庭感覚は、己の身体の状態を1mmの間違いもなく脳に伝え。

研ぎ澄まされた固有覚と触覚で、1mmの間違いなく身体の行動をコントロールする。

そして研ぎ澄まされた神経は、極限にまで時を引き伸ばす。

それ等全ての情報を統合し、答えを叩き出す脳の能力は。

最早、一瞬先の未来さえも観測していた。

無論、フォーリナーの因果律式を基とした未来観測と比べれば、それは赤子のように弱い。100光年以内の光景など分からないし、並行世界への分岐点など分からない。しかし、それでも一瞬先のあり得る未来を観測し、その未来を拒否している。

それはつまり、『因果律の変更』以外の何物でもない。

しかも彼は、一瞬毎に自分が死ぬ因果律を否定している。

最早、神業とさえも呼ぶ事もおこがましいソレを、明確にストーム1は咀嚼し、己の力の一部としている。故に、彼は最早人類でありながら人類を超越した存在。マザー

シッポの未来予測を拒否する化け物。因果律で動くのではなく、因果律を動かす怪物。マザーシッポとストーム1はの力関係は、最早上位者^{強者}でも下位者^{弱者}ではない。

今、この時、この瞬間、この戦場においては。確実に、完全なる対等に、ストーム1は立っている。

残された最後の方法は、真つ向勝負。己の能力を総動員し、眼前の敵を倒すまで終わらないエンドレスゲーム。そこに確定された未来など存在しない。

マザーシッポにとっては、初めての戦い方。

S I N E
!!!!

また一発。ストーム1の反物質弾が、大気吸収口に吸い込まれた。

マザーシッポの大気吸収口から、炎が上がる。まるで悲鳴のような甲高い音が、弾幕

の着弾音に紛れて響き渡る。

(どうだ、マザーシップ。反物質の弾丸はひとたまりも無いだろう?)

思考の片隅でそう思いつつ、思考の殆どを戦闘行動に集中。レーザー飛来、一瞬後の被弾箇所、左肩と右足。アーマースーツの筋力補強機能を稼働させ、強引に運動ベクトルを変換。飛来したレーザーを紙一重で回避。続いてプラスマ砲弾を片手間に迎撃。

(まだだ、まだだ、まだだ。まだ奴を落とすには火力が足りない)

幾らストームーが規格外の領域に到達しているとはいえ、土台は人間。そもそも土台が違うマザーシップと対するには、やはり不利であるという事実は否めない。

そして、マザーシップは隠し札をオープンした。

マザーシップの側面4箇所が存在している放出口が解放。そこは以前の戦いにて、飛行ドローンガンシップの出現が確認されていた。故に、ストームーもガンシップの出現に備え。

直後に彼の頭脳が観測した、一瞬先の未来に顔を歪ませる。

重い音と共に現るは、レッドカラー。

軍が半壊状態だったとはいえども、僅か8機で欧州司令部を急襲、壊滅させた：
フォーリナーの通常戦力の中でも随一の戦闘能力を誇る、赤い死神。

それが、ざつと50機以上。

(ふッ、ぎッ、けッ……!!!?)

マザーシップに手一杯なのに、よりにもよってレッドカラーを50機以上、同時に相手にしろ？ 幾らストーム1とはいえど、不可能の所業だ。ストーム1でもレッドカラーを同時に相手にするととなると、10機前後が限界だ。しかもそれは、マザーシップを抜きにした前提だ。

レッドカラーが一齐にストーム1に向けて戦闘機動を開始。ストーム1もマザーシップの攻撃を中止し、レッドカラーの迎撃を最優先。しかし、レッドカラー特有の超機動力、耐久力によって大した効果も上がらず、しかもマザーシップの全力攻撃に常に襲われている。そのような状態で、しかも50機以上のレッドカラーの迎撃など、出来るわけが無かった。

100m以内に接近したレッドカラー4機が、ストーム1へ砲口を向ける。
光速の $0.8\% \times \frac{239983396.64\text{m}}{\text{s}}$ の速さで撃たれるレーザー砲では、100mなど零距离射撃処の話ではない。

彼の頭脳が観測した未来でも、回避することが出来ないと断定されてしまった。

(ッ、そ……!!!)

レッドカラーのレーザー砲に光が灯り――

——4機同時に、ストーム1の後方から飛来した弾幕に撃墜された。

「!？」

思わず、後ろを振り返るストーム1。其処には。

「レンジャー1—7、戦線に復帰!!戦闘を再開する!!」

「レンジャー4—3、戦闘再開!!奴を死なせるな!!」

「レンジャー7—6、突貫!!俺達の死に場所は此処だ!!」

「タンク2、ぶちかます!!当たればワンパンの戦車砲だオルアア!!」

3つの歩兵部隊と1両のギガンテスが、それぞれの全速力を持って戦場へと飛び込み、レッドカラーへと攻撃を与える姿が見えた。

レッドカラー50機以上の攻勢を躲すのは、確かにストーム1たった1人には不可能だ。

だが、彼は1人ではない。

彼には共に歩める仲間がいる。彼には背中を預けられる戦友がいる。彼はワンマン^人アーミー^{軍隊}にあらず。

彼は、彼等は。地球^{Earth}防衛^{Defense}軍^{Force}だ。

自然と、戦士達は大きく息を吸い、そして声高に叫ぶ。

『E、D、F!! E、D、F!!』

人類の守護者の名を、地球の守護者の名を。天上より現れし侵略者に、その名を知らしめるように。

現代に蘇りし神殺しの神話が、始まる。

神話

「ストーム1!!」

レンジャー1—7の隊長が、ストーム1に向けて新品のヘルメットを放り投げる。それを視界の端で確認したストーム1は、ライサンダーJ9を拡張領域に格納。空いた右手で破損して使い物にならなかったヘルメットを脱ぎ捨て、刹那飛来したレーザーを回避。そしてヘルメットを受け取り、被る。

装着した直後、ヘルメットバイザーの機能が起動。一瞬のOS画面が流れ、消失。直後に簡易射撃補助システム、超小型生体電波両用識別式レーダーの画面、武器の装弾数、アーマースーツの耐久概算値が視界の端々に映し出された。

『ストーム1、聞こえるか!?!』

「此方ストーム1!!残存戦力と合流、マザーシップとの戦闘を継続する!!」

『了解、此方もお前のシグナルを再確認した!増援は今からではとても間に合わん、お前と合流した部隊が真正銘の全戦力だ!!』

『我々の運命を、人類の未来を、地球の未来を!!お前に託す!!ストーム1、マザーシップ

を撃墜せよ!!』

「了解!!!」

弾幕を躲しながら、周囲を見る。空に居座るマザーシップからは相変わらず多量の弾幕が放出され、此方に殺意を示す。レッドカラーの誤射も厭わない程に。しかしフォーリナー通常戦力最強と謳われるレッドカラーでは、その程度の誤射では墜ちていない。被弾の反動を受けつつ、此方の周辺を飛び回っている。

そこにレンジジャー1-7、4-3の各人が持つ武器から放たれる弾幕がレッドカラーを絡め取り、遠方に弾き飛ばすか、それとも耐え切れずに爆散する。

レンジジャー7-6はレッドカラーの攻撃やマザーシップの弾幕を防御している。そのやり方は、周辺に量産されたコンクリートの塊を鷲掴みでは盾にし、時にはボロボロになったそれをプラズマ砲弾に向けて投げる等、兎に角我武者羅に。

唯一の機甲戦力たるタンク2は、全速力で廃墟を駆けながら140mmを撃ちまくる。大火力の戦車砲は浮遊砲台はおろか、レッドカラーでさえも命中すれば一撃で撃墜している。

「――」

ストーム1は左手のAF100を圧縮空間に格納。ストリンガーJ9を両手に持つて大気吸収口が開くその時を待ちながら、巨大砲台一本と浮遊砲台4基を片手間に墜と

す。それでもマザーシップの火力は1割も落ちていない。今は耐える、レッドカラーは彼らに任せ、マザーシップに打撃を与えられるその時を待つ。

唐突に、マザーシップの大気吸収口が解放された。

刹那、ストリンガーJ9の3速射。武器限界性能を引き出して続けて放たれた3発の反物質弾は、狙い通りマザーシップの大気吸収口に命中。再びマザーシップが悲鳴を上げる。しかし、それでもマザーシップが墜ちる気配はない。

それどころか、巨大砲台が再びマザーシップ内部から姿を表し、8本から9本に増えた。

「——ツチ」

思わず舌を打つ。その光景が示す事は、即ち砲台を攻撃しても火力は減少する事は無い。この弾幕をどうにかするには、マザーシップそのものを墜とさなければ何ら意味を持たないという事だ。

(だが、どうする?いくら反物質弾を撃ち込んでも、火は吹けどそれ以外は健在だ)

(大気吸収口が弱点なのは間違いない、それ以外に撃ち込んでも、反物質弾でもはじき返される。だが、大気吸収口の中にも更に弱点があるのか?)

レッドカラーに反物質弾を撃ち込みつつ、思考を回す。アドレナリンの過剰分泌と極限の集中状態に晒され続けている脳細胞は悲鳴を上げ、知恵熱を発している。

『不意に、ストーム1の無線機がノイズ音を発する。数秒の後クリアとなり、通信機能が回復。』

『——やつほー、聞こえる？スーくん』

大阪基地、スーパーコンピューター管理室の一室。

その部屋の中、篠ノ之束は1基の第一世代量子スーパーコンピューターに背中を預け、1つのノートパソコンと無線機を駆使して作業を進めていた。いや、正確に言うとき少し違うが、

『お前、どうやって軍用通信に入り込んだ？』

「ふっふっふ…束さんの頭脳の前には、セキュリティなど…無意味なのだあ」

『…どうした？』

「今、マザーシップの解析を進めてる所なんだけど…今わかってる事を直で伝えようと思っ、ねッ…」

『束』

「聞いて。マザーシップには、ナノマシンに相当する自己修復機能が存在する可能性が高い。幾ら反物質弾で大気吸収口や、砲台を攻撃したところで、修復されたら実質ツノーダメージになる……！」

『束！』

「ストームーツ!!」

彼女は声を荒げた。普段見せていたおちやらかな雰囲気は微塵もなく、そして彼の名前を初めて正式名称で叫んだ。

「私は私のやるべき事をやるツ!! 貴方は、貴方のやるべき事をやって!!」

『——』

暫しの、しかしたった数秒の空白の時間が流れる。

『束』

「……何?」

『マザーシップの心臓が分かったら直ぐ伝えてくれ。叩き潰す』

「りょーかい!」

通信を切り、彼女は作業に……否、再び分割思考の一つを、電脳世界の奥深くに意識を落

と

(あれ?)

そうとして、全身の力が抜けて横に倒れ始める。

「——ッ!!!」

(気を、落とすな篠ノ之東エ!!!)

喝を入れて全身の制御を取り戻した刹那、右手を床に付き、倒れるのを阻止。床に落ちた鼻血を軽く拭き、再び背中をサーバーに預ける。

「フーツ…!!」

一つ深呼吸をし、改めて意識を電脳世界に落とす。

彼女の背中…: 脊椎部には、2ヶ月前に彼女を実験台として接続されたAMS接続専用機器があり、その接続部からコードが伸びている。その先は小さな機械を通し、そして大規模並列化された第一世代量子スーパーコンピュータ群に接続されている。

彼女がやっている事は、スーパーコンピュータに己の脳を直結させ、その膨大な計算能力を利用したマザーシップの解析。

フォーリナーの母船かつ最大最強戦力たるマザーシップ。その力は今も尚未知数と言っても過言ではない。何せ現在進行中の最終作戦^{アイアンレイン}で初めて見せる形態が2つもある。こうなつては最早事前に観測出来ていたデータなどは殆ど無意味に等しい。そんな状

況でマザーシップの解析をしようとしても、深刻なデータ不足でまともな解析結果が出る筈が無い。

しかし彼女は、不足するデータをストーム1の新品なヘルメットに搭載されている超小型カメラでマザーシップを観測し、それでも足りないデータは己の推測で強引に保管させる為に、こんな無謀な手段を取った。

A.M.S 接続専用機器という名の通り、その本来の用途はA.M.S 機器への接続専用に使われる。間違つても第一世代量子スーパーコンピューター群という名の怪物機器に直結させるものではない。

故に、幾ら中継機で負担を可能な限り軽減させているとはいえ。

「あつ……………か、あ……………あ……………あ……………」

彼女の脳は、その膨大な情報に嬲られていた。

人類最大の天災天オの頭脳だからこそ、まだ多量の鼻血と40℃以上の高熱、そして身体の痙攣と意識混濁だけで済んでいるが、それが並の常人ならば一瞬も保たずに情報の津波に人格を破壊され、そして廃人と化していただろう。

身体がそんな状況でありながら、電腦世界の奥深くに飛び込んだ分割思考マルチタスクの彼女機ノ之束は、

それを無視してマザーシップの解析を推し進める。フォーリナー大戦前では世界一の計算能力を誇っていた日本製スーパーコンピュータ「京」を遥かに超越する、フォーリナーテクノロジーの応用で生まれた化け物を、彼女は彼女の脳一つで掌握し、操っている。表の彼女がマザーシップを随時観察し、電脳世界裏の彼女がその情報を元に、計算式を変更し、計算し、観測し、解析する。たつた一人のチームプレイは、現在進行形で篠ノ之東の生涯の中で最高の結果を作り出している。

(…これだけ解析しても、マザーシップの心臓が分からない。いや、正確には絞れているけど、それでも候補箇所は50以上…!! 一体何が、何の解析が、何の方程式が足りてないの!?)

膨大な情報の波に晒されながら、彼女は思考を回し、そして記憶を探る。何でもいい、現状を打破出来る何かを求めて。

(考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ。私には何かがある、私には何を思い付ける？ 彼奴は何がある、彼奴は何を隠している?)

彼女は分割思考の一つでありながら、更に分割思考を発動。更に分裂した彼女の意識体は「篠ノ之東」の記憶を総洗いしつつ、そして思考の底に沈んでいく。

あらゆる記憶、あらゆる知識、あらゆる計算式、あらゆる発想。彼女の全経験、全記憶、全能力を今この瞬間、限界を超えて引き出す。

(…ツ!!)

そして、計算式突破口を見つけろ。それは、導き出した当時の彼女でさえも彼女自身が机上の空論と評価し、何処にも発表されることのない多次元空間航行論の計算式。

確かに、当時は机上の空論だった。だが、今ならば。

即座にその計算式の全文を思い出し、そして打ち込む。その計算式の挿入によって生まれる矛盾やバグは、即座に修正。

そこから、どれくらいその情報に格闘していたのだろうか？ 数秒、数十秒、数分、十分、いや、経過時間などどうでもいい。

とにかく、彼女はやってのけた。

彼女は、遂に宇宙の未知の一つの答えに手を掛け、啓蒙した。

答えを手にした彼女は、即座に電脳世界からの脱出を開始。理想の状況本来の予定なら、表の彼

女に脱出のエスコートをして貰う予定だったが、其方は余りの消耗によって廃人寸前の状態となっており、エスコートは不可能。それどころか完全な人格破壊の危険が迫っている。やはり中継機による負担軽減及び逆流防御の加護があっても、想定が甘かったと言わざるを得ない。

(ツ…!!)

電脳世界からの脱出が先か、それとも彼女の人格の崩壊が先か。

彼女の身体の状態は、深刻化していた。

莫大という表現でさえも役不足な表現となる程の計算能力を誇る、第一世代量子スーパーコンピュータ群にAMS接続していた彼女の脳は限界を迎えていた。

最早意識は無いと言っている程に混濁し、身体の痙攣も止まってしまうている。目にも最早光が宿っておらず、何処にもピントが合わさっていない。そして鼻から流れ出ていた血は、彼女の身体を伝ってエプロンドレスを紅く染めていた。

ピクリ、と右手の指が動き。

「ツツツツアア!!」

彼女は意識を取り戻し、刹那。脊椎部に接続されていたAMSコードを引き抜き、物

理的に第一世代量子スーパーコンピュータ群から切断。

鼻から流れている多量の血も脳の激痛の前に気にする余裕もなく、両手で頭を抑えながら蹲り、苦悶の喘ぎ声を上げる。

(二度と、二度もこんな事やるもんかこんな事ツ!!死ぬ、冗談抜きで死ぬるツ!!!)

思考をする事でさえ脳が悲鳴を上げる。出来れば今すぐにも意識を落として眠りたい。しかし、まだそれをする訳にはいかない。彼が、ストーム彼等が戦っている。彼女が手に入れたソレは、何の比喻なく正に人類の存亡に関わる情報。絶対に伝えなければ、彼等は負けてしまう。

彼女は、身体を動かそうと考えるだけでも激痛が走る脳を酷使し、何とか無線機を掴み取る。無線こそ切っていたが、まだストームに無線を送ることが出来る。

震える手で無線機の電源を入れ、トークボタンを押し込み、無線を繋ぐ。

「スーくん、マザーシップの、心臓が分かったよ……マザーシップのど真ん中、そこにある……一片1m弱の正方形の、超出力ジェネレーターを、反物質弾で……粉々にぶっ壊して。多分……1発だけじゃ……ナノマシンで急速修復、されちゃうから」

返答を待つ。時間は、僅かに数秒。

『ありがとう、束。後は任せろ』

東からの短い通信を終え、改めて戦友達に向けて通信を開く。途切れる事のないマザーシップの弾幕を片手間に躲しながら。

「全員、よく聞け。マザーシップの弱点が分かった。中心部のジエネレーターを破壊すれば、マザーシップは墜ちる。方法は一つ、奴の真下に潜り込んで、真上に撃ち抜く」
『…だが、どうやって撃ち抜く？我々はマザーシップから見て、中心部と外縁部のちょうど真ん中で戦闘を続ける事で、何とか半壊で済んでいるんだぞ』

『こんな状態で仮に無策で真下に潜り込んだら…消し飛ぶな、間違い無く』

「俺が1人で突入する。レンジャー1—7、4—3、7—6、タンク2はここから援護を頼む」

『幾ら何でも無茶だ、マザーシップだけじゃなくレッドカラーもまだ十数機は残ってるぞ？マザーシップにトドメを刺さるのは間違いないストリンガー無くその武器だけだ。万が一失敗したら——』

「心配する必要は無い」

「失敗はしない」

何の感情も無く、淡々と呟かれたその言葉に、全員が沈黙した。

そうだ、今自分達が共に戦っている男は、決して常人では測る事の出来ないナニカを持っている。彼はたった一人で一個軍団に匹敵する程の力量を持っている。彼が立った戦場に敗北は無く、そして彼の前に立ち塞がった尽くの敵が屠られていった。

彼は間違いなく、人類史、否、地球史上最強の生命体なのだ。最早、この事実はどう濁しようも無い確固たる事。

『…了解。幸運を、ストームー』
「備えろ。隙が見えたら突撃する」

レッドカラーが突撃。即座に弾幕が張られ、被弾の衝撃で機体が傾くと同時に、反物質弾が直撃、爆散。

7本の巨大砲台からジェノサイドキャノンが立て続けに着弾。多方面からの衝撃波に戦友達の足が取られ、そこにレーザーの雨が突き刺さる。

返しに、大気吸収口に反物質弾の一撃。マザーシップが何度目かの悲鳴を上げ、一瞬。いや、ほんの刹那、攻撃が止まる。

だが、彼にとってはその刹那は、十分過ぎる隙となった。

——ガッツツツ!!!

地面を割る程のエネルギーで右脚を踏みしめ、そして前に走り出した。そのエネルギーによって生まれた初速は、 50 km/h 。人類最速限界とされる速度をたった1歩で叩き出し、尚も加速する。

2歩目は 64 km/h 。

3歩目は 76 km/h 。

4歩目は、 90 km/h 。

マザーシップの真下までは、目測にして百数十メートル。秒速にして 25 m/s の速度で突き進むストーム1ならば、数秒で辿り着く距離。しかし、それはつい先程まで余りにも遠い距離だった。

しかし、今この瞬間は。届く距離にある。

進む、進む、進む。

勝利は、手の届く場所にある。

この時、マザーシップは恐怖を感じていた。

思考回路は疑問に埋もれ、そして埋もれた疑問にAIリソースを奪われて狙いがほんの僅かに荒ぶる。

マザーシップは今この瞬間も尚、何故だった1人の人間を殺せないという疑問の答え

を探していた。

人類が負ける未来を観測した、人類が勝てる未来は一つたりとも観測されていなかった。人間という種族を観測した、人間という種族の限界を観測した。だからこそ、マザーシップはこの現在を理解出来なかった。

：いや。マザーシップはたった一つ。たった一つの要素を観測出来ていなかった。

ストーム1の双肩には、仲間の未来、戦友の未来、市民の未来。そして今、全人類の未来と地球の未来が託されていた。

故に、彼に一瞬の躊躇いは許されなかった。その躊躇いが1000の戦友の未来を奪うからだ。

故に、彼に1歩の後退も許されなかった。そのたった1歩が10000の戦士の命を無駄にするからだ。

故に、彼にたった一度の敗北も許されなかった。その敗北が、幾万の兵士と市民の未来を閉ざしてしまうからだ。

故に、彼は倒れる事を許されなかった。彼が倒れたその時、人類の未来は潰えるからだ。

故に、彼は抗い続けた。故に、彼は挫けなかった。故に、彼は戦い続けた。

マザーシップが測り損ねたたった一つの要素。

それは、どんな絶望的状况にも諦めず、そして戦い続ける為の何よりの原動力。それ即ち、不屈の心。

「——よう、マザーシップ」

遂にマザーシップ直下に辿り着いたストーム1。1mm違わずマザーシップの真下に止まり、両の足で地面を踏みしめて。ストリンガーJ9の銃口を真上に向ける。

「随分と、地球で暴れてくれたな」

極限にまで引き延ばされた時の中で、ギリギリまで照準の調整を続ける。狙う箇所は極めて小さい、少しのズレも許されなかった。

照準を完全完了。引き金に掛けた人差し指を、引き絞る。

「受け取れ。これが返礼だ」

そして、放たれる反物質弾。全ての安全装置を解除され、限界を超えて5発連続で反物質弾を発射したストリンガーJ9の銃身は、冷却機構が間に合わず、赤熱化。

5発の反物質弾は、大気吸収口からマザーシップの内部に侵入。あらゆる物質を消滅させながら、遂にマザーシップの「心臓」を、1発も外さずに到達し、撃ち抜いた。

即座に多量のナノマシンが「心臓」の修復を試みるが、しかし5つの銃創を修復する

には、あまりにも時間が足りなさ過ぎた。

その結果は、「心臓」から膨大なエネルギーが漏洩し――

——
ツ
!!!!!!

その時、マザーシップが、爆ぜた。

断末魔は、響く事はない。何故なら、その時既にマザーシップは死んでいたのである。

全ての機構が停止した、人類のおよそ7割を殺戮し続けた機械仕掛けの神が、墜ちていく。

『マザーシップ、大破!!墜落します!!!』

『総員、直ちに退避しろ!!マザーシップが墜ちる、出来るだけ遠くに逃げろ!!!』

本部からの警告が飛ぶ前に、既に戦士達は退避を開始していた。最早マザーシップからの弾幕も、レッドカラーが頭上を飛ぶ事も無い。

ただひたすらに、墜ちるマザーシップから全力で逃げる。

時間にして、30秒、いや20秒程だろうか？

遂にマザーシップの船体が地面に接触。

それをきっつけに、二度の爆発。それはマザーシップを包み隠す程の火力で、マザーシップの船体を、粉々に砕いた。

その衝撃波は、戦場周辺だけに留まらない。

「東から超大規模な振動を観測!!まもなく到達します!!!」

「総員、衝撃に備えろオ!!!」

大阪本部を超えて、中国地方、九州地方を通過。いや、それだけに留まらない。

全方向に拡散した衝撃波は、やがて日本列島を通り過ぎ、アジア、ユーラシア、オーストラリア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ大陸まで到達。

その衝撃波は、大小こそあれど確かに地球を覆った。

』

無線が、ノイズを吐き出し続ける。

やはり先の衝撃波が原因だろう。正直ノイズを吐いてるだけまだマシかも知れない。

電源を入れ直したり、周波数を細かく弄ったりしても、中々ノイズは取れない。

「…チツ」

ゴンと、少し強くヘルメットを叩く。

『——せよ、誰か聞こえるか!?!』

途端に、ノイズがある程度取れて無線から声が響く。この声は大石司令だろう。拾ったのは途中からだだが、特徴的な声は良くわかる。

無線のスイッチを入れる。

「此方、ストーム1。マザーシップの撃墜に成功。アイアンレインの完遂を宣言する」
「繰り返す。マザーシップの撃墜に成功。作戦は成功した」

西暦2017年11月16日 12時19分。
マザーシップ、撃墜。

絶望は終わり、そして悪夢へと

「……ふう」

本部との通信を終え、ストーム1は下半身の力を抜き、重力に従って腰を地面に落とす。

「……………」

そして、そのまま背中も地面に付け、再び大きく、大きく息を吐いた。

「…やったんだな、俺達は」

「…ああ、やった。マザーシップに、勝ったんだ」

「…なんていうか、実感が湧かないな。本当に奴が墜ちた事が、今でも信じられない」
彼の周囲にいた戦友達が、少しずつ言葉を紡ぎ始める。彼らの殆ども腰を落としていたり、地面に横たわっていた。

「…俺もだ。今この瞬間が夢か何かで、次の瞬間には目が醒めるんじゃないかって、疑ってる自分がある」

「…だったら、随分とご都合主義的な夢だな。俺だったら衝撃波に吹っ飛ばされた衝撃で目が醒める」

「…」

暫しの沈黙。

「…マザーシップが墜ちて、万事解決。なんて訳が無いよな…」

「…巨大生物は、今も地底に穴を開けて巣を作っている。一刻も早くなんとかしないと、増殖し続けるぞ」

「…て事は…」

「俺達の戦いは終わっちゃいない。いや、まだ始まったばかりだ」

いつの間にか上半身を起き上がらせていたストーム1が、再び言葉を紡ぎ始める。

「俺達の敵は、地の底で嫌になる程の速度で、嫌になる程の数を増やす。そして俺達を喰らう。奴等の数は一体どれ程いる？幾万、幾十万、幾百万、幾千万…いや、幾億と。対して俺達は、ボロボロの陸空軍、海軍に至ってはたった数隻の艦船だけ。はつきり言つて、戦力差は酷過ぎる」

「だけど、やらなきゃいけない。じゃなきゃ、さっきの2時間の戦いの意味が、今まで戦ってきた意味が無くなるからな」

「…」

皆が浮かべる表情は同じように見えて、しかし違っているようにも、彼には見えた。今頃降りかかってきた極端な疲労のせいか、少しボヤける視界に思わず苦笑した。

「ま…そう、だな。今はこの勝利をゆつくりと嘯み締めておこうか。…迎えももうすぐ来るだろうしな」

2017年11月20日。

この日、EDF日本支部の動員可能な全戦力が最前線に集結していた。

マザーシップ撃墜直後、確認されていたフォーリナーの残存輸送船は大気圏外への離脱を確認されていた。そして多量のガンシップを吐き出していたマザーシップも撃墜され、大空戦から喪失し続けていた制空権も獲得する事は不可能ではないとして、僅かに残っていた爆撃機や攻撃機、そして戦闘機も全力投入する事を決定していた。そして陸軍も、必要最低限を除いた全戦力が攻勢に出る。

もしこの攻勢に失敗したら、などと考える事はない。それを考える事自体が無意味に等しい事だ。

全隊員の無線機に通信が入る。その通信相手は、大石司令長官。

『諸君。我々は4日前、フォーリナーの母船であるマザーシップを撃墜し、フォーリナー船団の撃退に成功したと思われる。この時が、この戦争に於いて最大のチャンスである

事に間違いない。我々は動員可能な全戦力を以つて、総反撃戦略：地球奪還作戦を

オペレーション・リイーカーアブチャ

発動し、地球を再び人類の手の中に取り戻す。しかし、日本列島にいる巨大生物だけでも、最低推定でも数百万以上と言われている。はつきり言おう。我々は既に致命的な数的不利の状況下にあると。そして我々に残された時間は少ない。我々に残された物資は、潤沢でもない。弾薬も、燃料も、食料も、あらゆる物資には限りがあり、そして今それらを補充出来る手段はほぼ無いに等しい。しかし、我々には科学による手段がある、頭脳と知恵による閃きがある、一騎当千たる君達がいる』

『——充分だ。0を1に変える為のピースは充分に揃っている。奴等に人類の意地汚さを見せてやろう。奴等に人類の底力を見せてやろう。奴等に、地獄を見せてやろう』

『さあ、我々に残された勝機を見つげに行こうじゃないか』

——そう。マザーシップの撃墜は、フォーリナー大戦に於いて序盤の出来事に過ぎない。

そうだ、フォーリナー大戦は寧ろ此処から。今この瞬間からが本番、天王山に漸く辿り

『…待て、確かレンジャー62の現在地はッ…?!?!? 巫山戯るな、同地域に2機の四つ足歩行要塞だ?!?!?』

「これが、クラス5の巣穴…縦穴だけでこれとか、冗談キツイぞ?」

「忘れるな、俺達の任務はあくまでも威力偵察だ。軽く小突くだけで——」

「リーダーに反応ッ?!?!: おいおい待て待て待て何なんだこの反応の多さ?!?!?」

『緊急通達!! ヴアラク4体が戦闘地域に接近中!! 繰り返しします!! ヴアラク4体が接近中!!』

『ヴアラク4体イ!!?!? 何だってそんな数が纏めて来るんだ?!?!?』

『そんな事考えてる場合か!! 回避、回避イ!!?!?』

『…なんだ、これ』

『…フオーリナーの…: 仕業、じゃない…: 明らかに、人同士で争ったんだ』

『…だとしても…: なんてこんな事になってるんだよ…:!!』

「名は、なんて呼べば良い?」

「…: ラウラ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前の名前は何だ?」

「ストームーと呼んでくれ」

三年半にも及ぶ、悪夢が始まった。

人類最後の司令官（権力者）

時にして、2017年12月1日。

EDF日本支部が地球奪還作戦 第一フェーズ 日本列島奪還作戦を発令してから
11日が経過。

「燃料備蓄はどうなっている？」

「減少の一方です。藻類燃料などのバイオ燃料の増産は行われていますが…それ以上に
機甲戦力やインフラの需要が供給を圧倒しています。このままでは日本列島を奪還す
る前に燃料が保つかどうか…」

「だが、此処で戦力の一部停止は行えん。我々が現在の優勢的な戦局を保っているのは、
ほぼ全軍の戦力投射による火力圧倒による殲滅力だ。これを失えば、我々は攻撃能力ど
ころか防衛能力さえも失い、人類最後の砦は陥落する」

「…」

「最早我々は引く事は出来ない。前だけを向き、そしてあらゆる敵を殲滅し、未来を切り
開く。それ以外の道は無い」

オペレーターの声が飛び交うオペレーションルームの一角、そこで話し合っている2

人の人物。

その片割れは、EDF日本支部司令長官 大石宏光。

EDF日本支部の総指揮を担う、そして唯一残存する人類軍の指揮系統の頂点。そして、人類最後の権力者となつてしまつた男だ。

今でこそこんな立場となつてしまつたが：元々はこんな立場に全く似合わぬ人物だつた。

そもそも人類最後の砦となつたEDF日本支部は、創設前から様々な問題点が噴出していた。

一つ。極東に於いてEDFを管理する極東支部がある中で「日本にだけ」、「日本支部」を設立するという必要性。

一つ。日本国憲法第9条「戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認」による日本国の軍事関係、日本国に駐屯する在日米軍の軍事関係、EDFの「対異星人軍」^{フォーリナー}による軍事関係の衝突及び干渉の懸念。

一つ。一部の日本国民：特に本部設置予定地として選ばれた大阪府の市民達からの、

超法規的軍隊の駐屯の反対の声。

代表的な問題だけでも、これだ。その困難さから、EDF日本支部の設立は早い段階で立ち消えるだろうと多くの人が予想し、想定した。

しかし大石だけは違った。彼はEDF日本支部設立の為に様々な場所へと出向いた。時には大阪府の市民達の交渉の場に自ら出向き。時には国会の場へと自ら出向き。時にはテレビのニュース番組にも自ら出向き。精力的に各地を転々とし、その度にEDF日本支部の設立の必要性を説いた。大石はハッキリ言つて軍事の才能だけを見ると平凡寄りの無能だったが、しかしこう言つた調整などに於ける能力と才能はあつた。そして本人のやる気もあつた。

その甲斐あつて、最終的に支部としては最も遅くEDF日本支部は設立された。その後大石はEDF日本支部司令長官として、引き続き噴出する問題の解決や、自衛隊や在日米軍との積極的な交流、設立後も引き続き反対の声を出す市民達の説得を行なつてきた。その姿はとも一つ一つの基地の司令官などではなく、まるで中間管理職のようだと、大石の姿を見た一部の者は思つたと言う。

…そして、2017年4月1日。全人類は突如、絶滅戦争の戦火にその身を晒す事となった。同時に、大石が積み上げていた努力の成果と、大石だからこそその能力を開花させるきっかけとなつた。

E D F 日本支部と自衛隊、在日米軍は直ちに共同体制を確立。指揮系統や政治的混乱を避ける為に E D F 日本支部が支柱となり、各地にて効率的な戦闘を展開。E D F 日本支部に足りない物を自衛隊と在日米軍が、自衛隊と在日米軍に足りない物を E D F 日本支部が補う相互協力により、混乱の最中でも、最も多くの人命を救い、そして戦力比的に見て最も多くのフォーリナーを屠る事となる。

しかし相手は人命の常識が一切通用しない宇宙の化け物達。その常識の外による物量戦術、技術的格差、戦術及び戦略行動の前に殆どの人類軍は敗北を重ねる。

例外は北アメリカ戦線、及び日本列島戦線だった。北アメリカ戦線は国家軍の中で世界最強かつ最大の規模を誇る米軍と、E D F 最大の規模と戦力を誇る E D F 北米軍の物量と連携によって。日本列島戦線は、大石の独自の戦略眼によって。

先に記述したが、大石の軍人としての才能は平凡寄りの無能だった。しかしそれはあくまでも「人類対人類」に於いての話。「人類対フォーリナー」に於いては、大石に軍人の才能はあった。他の者から見ればまるで非常識な戦術や戦略が、結果としてフォーリナーに最も有効打を与えられる手段だった。だが人類的に非常識な戦術と戦略は、時には甚大な損害を発生させた。特に四つ足歩行要塞破壊作戦、第三次巢穴掃討作戦、第7次関東防衛作戦の損害は凄まじく、程度の差こそあるが確実に回復不可能なダメージを負っていた。

しかし此処で幸運だったのは、この時のEDF日本軍と自衛隊の練度は既に世界最強であった事。そして何よりも、大石の常識外な戦術と戦略を120%の理想系で応えらるる男ストーム1が居た事だ。

この二つの要因により、日本列島戦線は致命的な戦線崩壊を招く事なく、整然と戦線を後退。戦力や軍需資源の浪費を最小限に抑えた。

しかし他の戦線はそうは行かなかった。EDF日本支部は確かに戦力比で見れば他の巨大戦線にも劣らなかったが、戦場規模ほどの巨大戦線よりも小さかった。だからこそ四つ足歩行要塞は一つだけで済んでいた、超巨大生物も総数4体で済んでいた。

後に彼等はその全てと相對する事となるが。

日本を除くユーラシア大陸には四つ足歩行要塞が4機、超巨大生物が7匹。

南北アメリカ大陸には四つ足歩行要塞が3機、超巨大生物が5匹。

オーストラリア大陸とアフリカ大陸には四つ足歩行要塞が1機、超巨大生物が2匹ずつ。

総数25体のフォーリナーの戦略兵器が、日本列島の外に存在していたのだ。

これらに加えて、巨大生物や飛行ドローン、ヘクトルの物量戦術の圧力。結果、人類軍は敗走の末に潰走、壊滅。核兵器を投入しても尚宇宙からの侵略者はあらゆる物を呑み込んだ。その例外が日本列島戦線のみ。北米本部、欧州支部、南米支部、中東支部、極

東支部、シベリア支部、各国軍は壊滅し、その姿を消した。

そして日本支部以外のあらゆる指揮系統が死滅した為に、必然的に大石は人類最後の軍隊の最高司令官、人類最後の権力者へとその立場を変質させていた。

味方は既におらず、周りには敵しかいない四面楚歌。ハッキリ言ってこんな状況からの勝ち筋は全く浮かばず、オペレーション・アイアンレインも最早破れかぶれの最終攻勢のつもりだった。だがストーム1の活躍により、オペレーション・アイアンレインは戦略的勝利を収め、EDF日本支部は千切れかけの綱の上に立つ事に成功する。

地球奪還作戦。

それは人類が再び地球の支配種族となるか、それともフォーリナーが成り代わるかを明確に決定づける生存戦争の幕開けだ。

人類戦力はEDF日本支部 残存戦力全軍のみ。

フォーリナー戦力は幾億もの巨大生物、幾万ものヘクトル、彼等は未だ知り得ない25体の戦略兵器。

致命的な戦力差に加えて、減り続ける食料、燃料、弾薬、エネルギー。あらゆる物が不足し、どれか一つでも尽きた瞬間に人類の敗北が決定されるデッドゲーム。

だが、彼等に最早傍観も、絶望も、逃避の色は無い。勝つ、勝てる、勝たなければ。

(そうだ、我々はまだ戦える)

大石はタブレットをポケットから取り出し、戦略地図を開く。

其処には、日本列島の関西、東海、中国地方東部以外の全土が赤く染まつた世界地図。赤色の意味は当然、「フォーリナー支配領域」を意味する。

人類支配領域は僅か78,400?。対してフォーリナー支配領域は147,165,600?。面積差は約1877倍にも及ぶ。現有戦力でこれ程の領土奪還はず不可能。故に各地に離散していると思われる人類の現地勢力と随時合流し、戦力を拡大しつつ奪還を進める他にない。細かな作戦計画などは存在せず、端的に言えば奪還する大陸の順番以外には「高度の柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対処する」と言つた内容しか書かれていない。そもそも詳細な作戦を今立てれる程の情報も、時間も無い。正に無い無いづくしの地獄絵図だ。

(我々はまだ諦めていない。我々は必ずお前達に勝利する)

しかしそれでも、兵士達は彼等の全力を尽くし、戦う。其処に息を吹きかければ儚く消え去りそうな程の希望の残り香だとしても。其処に希望があるのならば。

そして彼等が諦めないのならば、大石も諦める訳には行かない。最前線で戦う彼等が

諦めていないのに、最後方の自分が勝手に諦めては道理なんて物は一切通る訳がない。
無能にも、無能なりの矜持はある。

（目に物見せてやる。化け物が人間を殺すんじゃない、人間が化け物を殺してやる）

だからこそ、彼は「人類最後の司令官」に相応しい。

設定関連

設定集& a m p ;本編前時系列 (10 / 7更新)

国家

EDF

厳密に言うとは国家ではないが、此処に記述する。連合地球軍。2015年2月1日に結成された超法規軍であり、かつては150万人とアメリカと同等の戦力を持っていたが、フォーリナー襲来によって壊滅。2028年現在は300万人に大きく増大した他、フォーリナーのテクノロジーを吸収した事により、襲来前と比べて遥かに強化された。

フォーリナー大戦によって世界各国が崩壊した為、世界政府としての機能も併せ持っている。

EDF日本支部

本作品に登場する国家の主人公枠。

日本に駐屯するEDF部隊の司令塔であり、日本統治機構。フォーリナー大戦に於いて、最後まで部隊の指揮を取っていた唯一の本部。マザーシップ撃墜の功績により、転

移前はEDF総司令部にも劣らぬ発言力があつた。

しかし2028年6月28日、突如としてEDF日本支部：つまりは日本列島が異世界に転移。約2日間の混乱の後、空軍及び海軍による周辺探索を開始。その際にロデニウス大陸のクワ・トイネ公国を発見し、隣国クイラ公国と共に国交を締結。フォーリナー大戦以前のインフラを輸出し、対価に貴重な天然食料と地下資源等を手に入れることに成功する。その後、ロウリア王国がクワ・トイネ公国に侵略の構えを見せた事により、ロデニウス大陸の戦争に介入する。

EDF日本支部の統治地域は、日本列島の本州、北海道、四国、九州のみ。フォーリナー大戦の結果壊滅し無人島化した南西諸島や伊豆・小笠原諸島を完全放棄。防衛観点上維持及び補給が困難である離島の防衛を始めから諦めることにより、日本列島の殆どを構成する北海道、本州、四国、九州の4主要島の防衛に集中配備する事を防衛計画の前提としている。

軍事ドクトリンは少数精鋭主義。仮想敵のフォーリナーはそのテクノロジーも驚異的だが、しかしそれ以上に巨大生物による暴力的物量が主戦力となっている。その為、暴力的物量をどうやっても用意できないEDFは、暴力的な質によつて数的不利を補うように努めている。

クワ・トイネ公国

EDF日本支部がこの世界に転移した直後に、初の接触が行われた国家。天然食料に飢えていたEDF日本支部にとつて、天然食料が腐る程にある国家が天然食料を（EDF日本支部から見ても）超安値で輸出してくれているのはとてもありがたい事であり、EDF日本支部の対応は地下資源を輸出しているクイラ王国と同等の最恵国待遇として

いる。
ロウリア戦争に於いて亡国の危機となっていたが、EDF日本支部の武力介入により、ギムを物理的に喪失する被害を除いて無傷で戦勝国となる。

ロウリア王国

クワ・トイネ公国の隣国。人間至上主義と亜人殲滅を国是としていた為、パーパルディア皇国の軍事支援を受けて宣戦布告無き侵攻を開始。

しかし、EDF日本支部の武力介入によって僅か2日で軍が壊滅的な被害を被り、降伏した。

単語解説

フォーリナー大戦

2017年4月1日より、全世界規模で勃発した対異星人戦争。その戦いは4年半にも及び、フォーリナーの隔絶した技術と巨大生物の繁殖、暴力的な物量により、最終的

に世界各国の国家機構は崩壊。人口は70億から15億まで減少し、陸地のおよそ60%が戦火によって荒廃。畜産業も99.9%が全滅。食料は後に開発される化学食料に代替される事となる。日本列島も、国土のおよそ50%がフォーリナー大戦によって焼き払われ、更にその内の23.1%が原子力発電所の崩壊による放射能汚染、毒ガス兵器フォーリナー大戦中期になると、人類支配圏外の地域：特に巨大生物が多数存在する地域が発見された際、EDFや各国軍は対巨大生物に超高濃度の毒ガス兵器や環境汚染兵器を投入していた。無論フォーリナー大戦前に各国が締結していた「化学兵器の開発、生産、貯蔵及び使用の禁止並びに廃棄に関する条約」などの条約など、もはや有名無実化していた。などによる深刻な汚染が発生する事になった。

人類内戦

マザーシップ撃墜後、EDF日本支部による地球奪還作戦「オペレーション・リイカーアップチャ」が進行されていた最中に発生した、人類同士による最後の戦争。主な原因は極端に不足していた食料や水、医薬品などといった物質を巡って争われ、その戦いは悲惨に尽きた。場合によっては、人類内戦の最中にフォーリナー残党が乱入し、人類を蹂躪していたその最中に更にEDFが介入する地獄絵図な戦場もあつたという。この人類内戦の死傷者の詳細は現在も不明だが、最も可能性のある説はフォーリナー大戦の犠牲者の4%：即ち2億2000万人と言われている。

登場兵器

A F 2 0

E D F 日本支部レンジャーの標準装備の一つ。フォーリナー大戦後期に開発されたアサルトライフルだが、安定した性能と信頼性の高さが評価され、10年経過した現在も標準装備の一つとして採用されている。

ブレイザー

個人用火器としては法外ともいえる程のコストと技術力を結集して作り上げられた、フォーリナーテクノロジーと純粹科学が融合した超技術の集大成。全長僅か1mの銃に装填されるエネルギー・カプセルには小型原子炉並のエネルギーを搭載し、その膨大なエネルギーによって1万ボルト級出力で放出されるレーザーは、巨大生物を瞬時に灰に還す程の威力を誇る。

その過大な威力故に、世界で僅か13人しかこの武器を持つ事を許されなかった。

A F 1 0 0

ストームチームレンジャーの標準装備。フォーリナー大戦最後期に開発されたアサルトライフルであり、その威力はA F 2 0を超越する。しかし製造技術はフォーリナー大戦時に失われており、A F 1 0 0 本体の再製造は現在不可能となっている。

ストリンガーJ9

AF100と同じく、製造技術が失われた兵器。反物質弾を発射し、射程内に存在するあらゆる物質を消滅させながら突き進む。

E551ギガンテス

140mm砲を装備したEDFの主力戦車であり、フォーリナー大戦の教訓を活かして製造された第5世代戦車。

140mm砲の火力、戦車ならではの強靱な装甲、強力なエンジンによって生み出される軽快な機動性。全てに於いてバランスが取れた性能であり、EDF機甲部隊の中核を担う、信頼性が極めて高い兵器である。

E651タイタン

全長25mの重戦車。36cm主砲を装備し、主砲砲塔の上に更に140mm砲塔を2つ搭載し、副砲としている。

EDF兵士の間ではタイタンの事を「陸上戦艦」と呼ぶ者もいる。

BM03ベガルタ

ギガンテスやタイタンのような戦車と異なり、ベガルタは二足歩行兵器となつている。当初ベガルタは閉所に於ける機甲戦力として製造されたが、今現在では汎用型、重装型、接近戦闘特化型、対空型の計4つのシリーズに分かれ、其々の運用目的に合わせ

た武装やスペックとなっている。

BMX10プロテウス

全長25mの巨大人型ロボット、通称ギガンティック・バトルマシンとも呼ばれている。

この巨体の装甲は最早小型要塞にも匹敵する強靱さであり、武装は203mm砲を速射するバスターカノン2門、30連装マルチサイルランチャー。単純だがそれ故に分かりやすい超火力を持つこのプロテウスは、各EDF機甲部隊の最高火力を担っている。

ファイター（元ネタ：エースコンバット6 CFA-44）

フォーリナー大戦後に生まれた第6世代戦闘機であり、フォーリナーのテクノロジーをふんだんに使用したEDF最強かつ唯一無二の制空機。

カナード付きデルタ翼機であり、推進力となる双発エンジンには3枚パドル式左右独立三次元推力偏向ノズルを採用。更に各所に補助用の小型ブースターを取り付けており、低速時には小型ブースターを使用して戦闘機とは思えぬ超機動を行う事が出来る。

搭載兵器は30mmレーザー砲2門、最大24の目標を同時に撃破可能な全方位多目的ミサイル誘導システム「ADMM」、汎用レールガンユニット「EML」の3種。

最高速度はマッハ4に達し、巡航速度もスーパークルーズとなるマッハ2を発揮す

る。

爆撃機ミッドナイト

フォーリナーの機甲戦力に対して投入される大型爆撃機。

最高速度マツハ3、巡航速度マツハ1.4、爆弾積載量420t、爆弾倉1つ。

爆撃機カロン

フォーリナーの主戦力、巨大生物に対して投入される中型爆撃機。

最高速度マツハ3.4、巡航速度マツハ1.8、爆弾積載量300t、爆弾倉3つ。

セントエルモ級イージス戦艦（元ネタ：アーマードコアV セントエレモ）

EDFが誇るイージス戦艦であり、ベースはイージス艦であるものの、あらゆる状況に対応するように様々な改造が施されている為、原型はあまり残っていない。船体は三胴船型と波浪貫通タンブルホーム船型を掛け合わせたような形状になっている。

全長は310.1m。

武装は38cmレールガン連装砲7基14門、連装型35mmCIWS24基48門、8連装水平ミサイル発射機9基、ミサイルVLS72基、組み立て式小型テンペストAOミサイルVLS1基を搭載。装甲はマザーシップの主砲を除く攻撃に有効的に耐える事が可能。

最大速度は40kt。ヘリやVTOL機を離発着させる小型飛行甲板まで装備して

おり、EDF海軍の主力艦として採用されている。

アイオワ級フリゲート艦

EDF海軍艦隊の直衛艦として近接防空力に特化するよう設計された。その際にアイオワ級戦艦を参考に設計された為、まるでアイオワ級がスケールダウンしたような印象を持つ。中でも多数配備されている20mmレーダー連動式ガトリング砲は、自動射撃システムが不具合を起こした際に備え、手動照準と手動発射が行えるように設計されている。

全長は241m。武装は28cmレールガン3連装砲3基9門、12.7cmレールガン連装砲8基16門、20mmレーダー連動式ガトリング砲80基。

アリコーン級潜水戦闘空母1番艦　アリコーン（元ネタ：エースコンバット7DLCアリコーン）

フォーリナー大戦後、世界復興の最中に建造されたEDFの決戦兵器の一つ、「決戦要塞X7-1」のナンバリングが与えられた超兵器。

潜水艦でありながら戦闘機の離着艦機能、200mmバーストレールガン2基、600mmレールキャノン1基、VLS48基、CIWS8基を搭載する超重装潜水艦であり、その戦闘力はイジラク級要塞空母1番艦エウロパ、2番艦デスピナ、三番艦フォルニョート、計3隻のモンスター・キャリアー。その名の通り、空母としての機能

は勿論として、マザーシップの攻撃にも耐え得る強靱な装甲を持つ。全長1400mもの船体に搭載された武装は、汎用主砲として4基8門の51cmレールガン連装砲、対空兵装として360基の巡航ミサイルVLS、420基の35mmCIWS、対地支援用として4基の超大型巡行ミサイルVLSを搭載。機関は核融合炉であり、その恩恵を受けて最大速度は30kt。デスピナ内部に簡易的な兵器製造機構、食料生産機構を備える等、無補給でも暫くは継続戦闘が可能となっており、正に「要塞空母」と言わしめるに相応しい性能を持つ。を**除けばEDF海軍艦の中でも随一**。しかし何よりも期待されているのは、**隠密戦力投射能力**。EDFが再びフォーリナーの侵略を受け、対宙迎撃網赤道上に設置された200cmレールキャノン、世界各地に建造された120cm磁気火薬複合加速方式半自動固定砲、ストーンヘンジ、各基地及び専用発車基地に設置されたテンペストミサイル、そして宇宙空間に配備された軍事衛星から成る。が突破されて地上戦に移行した時、アリコーン級潜水戦闘空母の役割は海岸部に於ける豊富な武装による迅速な火力支援、そして600mmレールキャノンによるマザーシップに対する奇襲打撃。砲口径こそストーンヘンジの半分だが、使用される砲弾は対フォーリナー装甲砲弾「グラインドバスター」、そして圧縮空間搭載式空間制圧砲弾「トールハンマー」による火力は壮絶に尽きる。しかしそれ故に、秘密戦力として機能できるように詳細な活動は一般公開されず、秘密に包まれている。

英雄部隊解説

シユヴァルツェ・ハーゼ

ドイツ語で「黒兎」の名を持つ、欧州にて量産された無名の英雄が隊長を務める、精銳のウイングダイバー部隊。

戦闘能力は後述のスプリガンよりも劣るが、しかし英雄部隊の一つとして数えるには十分な実力を持つ。

尚、隊長のラウラ・ボーデヴィツヒは、人類内戦中に地球奪還作戦を実行していた部隊の一つ、ストームチーム（後のフロントライン）と出会った特殊な経歴を持つ。

オメガチーム

E D F 日本支部の英雄部隊の一つ。

最も多く『英雄』と共に戦った部隊であり、「最強の凡人」が集う部隊でもある。

その実力は確かに英雄部隊の中でも上位に入るが、しかしストームチームの領域の技量には及ばない。故に、彼等は原子光線銃 ブレイザーが全隊員に配備されており、その超火力によって擬似的にストームチーム並の戦力を手に入れている。

ストームチーム

E D F 日本支部最強にして、人類最強の歩兵部隊。

レンジャーチーム「フロントライン」、ウイングダイバーチーム「スプリガン」、フェンサーチーム「グリムリーパー」の3部隊によって構成されており、状況に応じて分離と統合を有機的に行う。その際の指揮系統だが、スプリガンやグリムリーパーによる統合の場合は、これも状況によって異なるが、フロントラインとの統合の際は無条件にフロントラインが上位権限を保有する。

もし全部隊が統合して作戦に参加した場合、それは人類にとっての一大決戦となるとさえ言われている。

グリムリーパー

「死神部隊」の異名を持つ精鋭フェンサー部隊。ストームチームの部隊名はストーム3。

ストームチームに於いては、重装兵フェンサーの能力を最大限に活かした近距離砲撃攻撃や、近接装備 ブラストホールスピアによる近接戦闘を担当する。

その戦闘能力は極めて高く、特に機甲戦力への近接戦闘に於いては他のフェンサー部隊を寄せ付けない程。

スプリガン

「^戦ヴァルキリー^乙」の異名を持つ精鋭ウイングダイバー部隊。ストームチームの部隊名は

ストーム2。

ストームチームなら於いては、近距離戦闘による大火力高速戦闘を担当する。ウイン

グダイバー特有の空中機動力と至近距離兵装　レイピアによる対巨大生物戦闘能力はグリムリーパーをも上回る。が、機甲戦力に対しては戦術上相性が悪い。

フロントライン

比喩なく人類史上最強の歩兵部隊。ストームチームの部隊名はストーム1。

僅か5人のレンジャーで構成された少数部隊に関わらず、その戦闘能力はグリムリーパーとスプリガンを大きく上回る。

部隊名の由来は、戦場にて、彼等が立つ場所こそが最前線フロントラインになる事実を喩えられた。ストームリーダー（元ストーム1）

個人ではあるが、しかしその特殊性から特別に記載する。

フロントライン隊長兼ストームチーム総隊長を務める。彼が持つ二つ名は非公式も含めると数多い。『英雄』、『ワンマン人アーミー軍』、『人類最強』、『戦略兵器の個人』、『神殺し』、『人類史上最大の救世者』、『史上最も多くの命を蹂躪した個人』。

フォーリナー大戦中に彼が挙げた戦果の詳細は、現在もなお不明な箇所が多い。しかしその中で提唱される説の一つによると、彼は彼一人だけで、巨大生物のみに限っても数十〜数百万を屠ったとも言われている。これが決して過大評価として評価されていないというのも、彼が彼たる所以だろう。

以下は、マザーシップ撃墜迄に彼が単独で成した戦果である。

蟻型巨大生物：1万以上

蜘蛛巨大生物：1万以上

赤蟻型巨大生物：1万以上

女王蟻：7

巨大蜘蛛（奈落の王）：4

ヘクトル：150以上

飛行ドローン：1000以上

精鋭ドローン（レッドカラー）：19

輸送船：41

超巨大生物　ヴァラク：4

四つ足歩行要塞：1

マザーシップ：1

未確認（不明）が多いマザーシップ撃墜以降の戦果を含むと、この戦果を遥かに上回る。

そして、この戦果はあくまでもフォーリナーの個体のみ記載されている。

時系列（フォーリナー大戦：日本列島／抜粋）

2013年7月17日

宇宙からの電波を受信、地球外生命体の存在を確認。

2015年2月1日

有事に備え、連合地球軍「EDF」結成。

2017年4月1日

地球外生命体「フォーリナー」襲来、地球侵略開始。

4月1日～10日

世界各国が混乱状態。巨大生物と輸送船団との関係性が掴めず、攻撃しなかった事が災いし、輸送船団が巨大生物を投下されるのを確認されるまで、フォーリナーは悠々と巨大生物を投下していった。

4月16日

大空戦。世界各国の空軍が集結し、マザーシップの撃墜を試みた。結果、マザーシップ到達前に飛行ドローンの迎撃を受け、壊滅。以降全世界の制空権はフォーリナーの物となり、EDF及び各国軍は陸海軍のみの抵抗戦を強いられる。

4月24日

円盤撃墜作戦。強靱な装甲に守られた輸送船の弱点を発見し、世界初の撃墜に成功する。

5月2日

フォーリナーの戦闘兵器 ヘクトル兵団に対して津川浦海岸と千条ヶ原海岸に防衛線を展開。津川浦防衛線は作戦成功するも、千条ヶ原防衛線は崩壊。翌日には市街戦に突入、決して少なくない損害を払ってヘクトル兵団の殲滅を完了する。

5月13日

巨大生物の巢を確認。直ちに歩兵部隊が突入するが、想定を遥かに超える物量を前に撤退を余儀なくされる。

5月17日

蜘蛛型巨大生物の出現を確認。

6月2日

マザーシップが日本近海に飛来。四つ足歩行要塞を投下。四つ足歩行要塞のプラズマ砲撃により、一つの市街地が壊滅的被害を被る。

6月3日

四つ足歩行要塞進行阻止作戦。関東壊滅を阻止するために発令されたが、余りにも性急過ぎたためにEDF日本支部及び陸上自衛隊の両軍の戦力が随時投入された為、多大な被害を被った上に作戦も失敗する。これにより、関東全域は四つ足歩行要塞のプラズマ砲撃に晒される事となる。

6月4日

関東郊外に複数の巨大生物の巣穴が確認。破壊に成功。

6月9日

地底再突入。しかし作戦途中、全長40m以上の超巨大生物 ヴアラクが出現し、作戦は中止される。

6月11日

対超巨大生物作戦発動。討伐に成功する。

7月3日

遠距離支援型ヘクトルの兵団を確認。プラズマ砲撃を受けながらも撃破に成功。

7月14日

赤蟻型巨大生物出現。

7月20日

地底進攻作戦（第三次巣穴掃討作戦）開始。2週間にも及ぶ戦闘及び侵攻の末、巨大生物の女王の撃破に成功。しかし突入部隊の7割が壊滅する大損害を負った。

8月10日

輸送船より小型ヘクトルが投下。防衛線を突破した空挺急襲により、降下地点は大きな被害を受ける。

8月22日

ヘクトルの大兵团との市街戦。投入された機甲部隊及び歩兵部隊の6割の損害と引き換えに殲滅に成功。

9月7日

蜘蛛型巨大生物の大軍団と狙撃大隊が交戦。壊滅的被害を被りつつも殲滅に成功。

9月18日

関東地域周辺に甚大な被害を与えていた四つ足歩行要塞が停止。EDF陸軍が急襲を試みるものの、撃破に失敗。

9月20日

四つ足歩行要塞破壊作戦。EDF日本支部陸軍と陸上自衛隊の総力を投入し、撃破に成功。しかしこの作戦により、EDF日本支部陸軍は戦力の大半を喪失。陸上自衛隊は壊滅状態に陥り、単独の組織的行動が事実上不可能となる。以降の陸上自衛隊は、EDF日本支部陸軍の指揮下に入る。が、それでも四つ足歩行要塞による被害は甚大であり、以降の攻勢作戦の決行はほぼ不可能となる。

9月24日

マザーシップ撃墜作戦。結果はマザーシップの砲撃により攻撃部隊が壊滅し、失敗。

10月1日

関東に2体のヴァラクが出現。A.L.レーザー銃を装備した特殊歩兵部隊の活躍により、撃破に成功。

同日

人類の人口はフォーリナー大戦前の半数以下となる。

10月10日

巨大生物の巣穴に強行突入。多大な被害を受けながらも掃討に成功。

10月12日

巣穴掃討を逃れた女王型巨大生物数体及び子体の大群を掃討。

10月15日

日本全土の巨大生物が関東地方に行進。十数万の巨大生物との交戦に入る。辛勝するも、残存機甲戦力は壊滅。残存海軍もこれを支援しようとしたヘクトル兵団と交戦し、相討ちとなる。

同日

数十万との巨大生物の戦闘により、関東平野は壊滅。東京基地も陥落し、多数の技術者や新兵器試作品などを失う。

10月16日

精鋭飛行ドローン、別名「レッドカラー」が欧州司令部に飛来。欧州司令部は壊滅す

る。

10月18日

レッドカラーが東海地域に出現。決死隊によつて全機撃墜に成功。

同日

北米戦線完全崩壊。マザーシップの砲撃により、EDF総司令部壊滅。総司令部権限が南米支部に移行。

10月25日

超巨大生物 ヴアラク・サイボーグが出現。出撃部隊の半壊と引き換えに討伐に成功。

同日

欧州司令部、北米司令部に続き、南米司令部も壊滅。中東、極東、シベリアからの連絡も途絶え、組織的な抵抗を行っているのは日本支部のみとなる。

11月2日

廃墟となった東京にフォーリナーの大軍団が集結。少数の決死隊により撃破に成功。

11月9日

再びフォーリナーの大軍団が日本列島に襲来。包囲下に置かれたEDF日本支部は総力を以つて抵抗し、奇跡的に撃退に成功。

11月14日

マザーシップが日本近海に飛来。EDF日本支部は最終決戦に向け、最後の攻撃部隊を編成。

11月16日 10:00

最終作戦「アイアンレイン」発動。マザーシップ及び護衛飛行船団への攻撃を開始。

10:17

世界中のレジスタンスの連合組織「カインドレッド・レベリオン」が、EDF日本支部の援護の為決起。マザーシップを孤立させる為、市民達の決死の攻撃が全世界で行われる。

10:37

護衛飛行船団壊滅。攻撃部隊がマザーシップへの肉薄に成功する。

10:38

マザーシップの巨大主砲が出現。砲撃により2割の攻撃部隊が壊滅。

10:51

マザーシップの巨大主砲の破壊に成功。

10:52

約200の浮遊砲台がマザーシップより展開。苛烈な砲撃を開始。

10:59

マザーシップの下部に弱点を発見。しかし攻撃部隊は壊滅状態に陥り、単独の肉薄は不可能な状態だった。

11:08

攻撃部隊を再度マザーシップ直下に肉薄させる為、EDF日本支部及び航空自衛隊の残存航空戦力が決死の突撃を開始。

11:19

残存航空戦力全滅。しかし元航空自衛隊隊長機の特攻により、マザーシップ活動停止。

11:20

マザーシップが再稼働、戦闘形態に移行。10本の巨大砲台が出現。本当の総火力が攻撃部隊に向けられた。

11:27

攻撃部隊との通信途絶。

11:30

戦線離脱した攻撃部隊の生存者により、ストーム1がマザーシップと交戦状態を継続している事が判明する。

11:32

一部の兵士達がストーム1を援護する為、独自に戦線復帰。

12:03

マザーシップ、大破。

2017年11月16日 12:19

マザーシップ、撃墜。

同日

マザーシップ撃墜後、残存飛行船団は地球より撤退。

2017年11月20日〜2018年12月23日

EDF日本支部、

オペレーション・リイーカーアプチャ
地球奪還作戦

第一フェーズ発動。日本列島奪還を開始する。そ

の最中、人類支配領域外にて資源不足による「人類内戦」も勃発する。

2018年

化学食糧開発により、極めて逼迫していた食糧事情の改善に成功。

同年12月24日〜2021年10月30日

日本列島の巨大生物を完全掃討、日本列島完全奪還。

オペレーション・リイーカーアプチャ
地球奪還作戦

第二フェーズ

発動。必要最低限の戦力を残し、全戦力を世界各地に投射。ゲリラ抵抗を続けていたE

DF部隊やカインドレッド・レベリオンと合流しつつ、世界各地に残存する巨大生物の

掃討戦を開始。また、EDF日本支部より化学食糧が提供され始めた事により、人類支配領域内に於ける人類内戦も終息へと向かう。

2021年10月30日

アリゾナにて最後の巨大生物が撃滅。巨大生物の駆逐が宣言される。

2021年10月31日～2028年6月27日

世界復興が本格的にスタート。されども戦火によつて荒廃した大地や自然のダメージは甚大であり、人口密集地を中心に復興させる事が限界であった。

2028年6月28日

EDF日本支部及び日本列島、異世界に転移。

本編

第1話 始まり

2013年7月17日。

その日は、人類史を、地球の歴史を大きく塗り替える日となった。アメリカ合衆国カリフォルニア州に存在している電波望遠鏡群「CARMA」が突如、その機能を大きく損傷させる程の出力と指向性を持った宇宙からの電波を受信し、それをきっかけに最大十数時間の時間差と出力の差異を持って、全世界の電波望遠鏡がこれを受信。最初は地球を包み込む程、それぞれ宇宙規模の自然災害。それとも何らかの兵器実験が疑われた。しかし数カ月後、この調査を進めた調査団が国連総会の場で「宇宙人」の存在を明言し、その事態は決定的となった。

歴史上初めて、明確に地球外生命体の存在、そして地球への接近が確認されたのだ。

2013年、全世界のあらゆる話題がその一点に集約した。宇宙分野のあらゆる専門家があらゆるメディアを通じて討論し、あらゆる者達が宇宙を見上げた。

2014年、人々は漸く落ち着きを見せ始め、そして疑問に思い始めた。

「^{宇宙人}彼等は何故、この地球を目指している？」

大小様々な説が飛び出た。友好説や融和説、偶然説や探究説。そして、侵略説。殆どの人々が楽観的な説を推す中、しかし一部の人は最悪の侵略説を叫び続けた。「もはやSFだった物語は現実となったのだ」と。「例え楽観的説論が正解だったとしても、備え無しである程愚かな事は無い」と。

大多数の人類が楽観的な雰囲気を持ったまま宇宙人來訪の準備を進め始める中、2015年2月1日。Earth Defense Force 連合地球軍、通称「EDF」が結成された。

異邦人フォーリナーという呼称についての起源は不明。一つ確実に言えるのは、ネットワークの誰かが宇宙人のそれを「フォーリナー」と呼んだ事からだと言える。の來援に備え、人類意思を統一させる世界統一政府を樹立する為の世界的政策と宣伝されたが、結成当初の間からは「無駄金の浪費にしかならず、なおかつ無駄にフォーリナーを脅かす反応を示す愚かな政策になる」などといった非難を浴びる事となる。

しかし実際の所は、EDF結成によって生まれる膨大な軍需産業と軍需經濟の蜜を吸い取る為、多くの先進国と多国籍企業の下に迅速な整備が進む事となる。結局の所、その手の人間からしたら異邦人の存在などどうでも良く、自分の懐が温まればそれで良かったのだ。一般人も、大騒ぎこそすれど自分の日常が変わらないのなら他人事とさえ捉えていた。

それが終わったのは2017年4月1日の事だった。

全世界に地球外生命体「フォオリナー」が襲来、地球侵略を開始した。此処に、^{異邦人}フォオリナーの目的は侵略である事が明確に事実として突き付けられる事となった。

しかも人類にとつて運が悪い事に、4月1日はエイプリル・フール。つまり「嘘をついても良いという風習」がその日に存在していた。それだけにフォオリナーの侵略を冗談のキツイウソと捉えてしまった人が多く、それ故に初期の避難活動に支障を起こし、結果的に世界的に膨大な犠牲者を生み出す事となった。

その日から、人類の壮絶なる生存戦争、「フォオリナー大戦」の幕が上がった。

各国軍とEDFは連携や仲違いを起こしながら、あらゆる場所で防衛戦線を展開。あらゆる兵器や手段を用いて、フォオリナーの巨大生物や兵器と苛烈な戦闘を全世界で巻き起こす。しかし、その力の差は余りにも圧倒的に過ぎた。僅か15日で制空権がフォオリナーの手に落ち、残った陸軍と海軍も膨大な物量の巨大生物や未知数のテクノロジの兵器の前に、戦士達は次々と倒れていった。そして欧州戦線の崩壊をきっかけに、各戦線は次々と崩壊。人類の有力な戦力はほぼ全てが壊滅する事になる。それは2017年4月1日より、僅かに約半年の事だった。

しかし、例外がただ一つ存在していた。

E D F 日本支部と日本国、つまりは日本列島防衛戦線。この戦線は戦線の小ささと人類戦力の小ささにも関わらず、フォーリナーの新種や新兵器の殆どが真つ先に確認される程の苛烈な攻防戦を繰り広げていた。そして各戦線が崩壊していく半年が経過しても、北海道、関東、中国地方西部、四国、九州を完全放棄しつつも唯一「戦線」としての防衛戦を展開可能な軍隊となっていた。しかし、残されたのは3600万の人類を押し込んだ関西全域と東海地域、中国地方東部。そしてそれを守る僅かばかりの残存戦力。日本政府と自衛隊は組織的に崩壊、E D F 日本支部も戦力は限界に近く、最早反撃など夢の中の夢、人類の命をほんの少しだけ引き延ばすだけの抵抗に過ぎなかった。目の前に広がるは、光の粒子希望さえも阻む漆黒絶望の闇。それに飲み込まれ、死んでいく者達も居た。しかし彼等は、とことん諦めが悪かった。けして敗北を認める事はなく、意地汚く戦い続けた。

それを見たフォーリナーの母船「マザーシップ」は、遂にその船体を日本列島に向けて前進を始めた。E D F 日本支部は、残された戦力から攻撃部隊を抽出し、2017年11月16日。マザーシップとの最終決戦「アイアン・レイン」を発動。その戦いはおよそ2時間に渡って繰り広げられた。

人類至上長い2時間の戦いの結果、E D F 日本支部は攻撃部隊の8割を喪失しながらも、マザーシップの撃墜に成功。

それは、正に奇跡の勝利と言つても過言ではなかった。そしてそれをきつかけに、マザーシップ船団は宇宙の彼方へと姿を消していった。人類は、余りにも多大な流血を以つて、異邦人の船団を地球から追い返したのだ。

数日後、E D F日本支部は地球奪還作戦「オペレーション・リリーカーアプチャ」を発動。まずは日本列島の完全奪還を目指し、再攻勢を開始。約2ヶ月で日本列島を完全奪還この日本列島奪還戦に於いて、E D F日本支部は致命的に不足する戦力を大火力兵器で強引に代替。所謂「ベルカ式国防術」や「焦土作戦」と言う方法に近い戦術ドクトリンを用い、2ヶ月というハイスピードで日本列島の奪還に成功した。その後の地球奪還作戦に於いても、E D F日本支部や合流した現地人類勢力は積極的にこの戦闘教義戦闘ドクトリンによる掃滅戦を展開。残っていた大半の自然破壊を引き換えに、確実な領土奪還を押し進めていった。し、世界各地への戦力投射を開始。最初こそ近辺の極東からだつたが、やがて人類支配領域の拡大と再構築されたインフラの拡大に合わせ、欧州や南北アメリカ、オセアニア等の地域にも派遣を開始。各戦線に於いて、フォーリナー大戦の経験を生かして再び生まれた新型戦艦による強力な火力支援によつて橋頭堡を確保し、現地人類勢力と合流この時、人類支配領域外では深刻な資源不足による「人類内戦」も勃発。人類支配領域外では人類は資源を求めて人類同士で争う中、残存するフォーリナーとも戦い

を続ける何つ巴にもなる地獄絵図と化していた。この人類内戦は、後に記述されているがE D F日本支部が開発し、量産する化学食糧が提供され始めた事により、人類支配領域内に組み込まれた地域の人類内戦は終息へと向かう事となる。インフラ整備と戦力拡充、化学食糧の提供などを施しつつも巨大生物を掃討。そして2021年10月30日、遂に最後の巨大生物を掃討し、地球奪還作戦は成功。

人類は地球全土を取り戻し、地球に残されたフォーリナーを絶滅させたのだ。それは、フォーリナー大戦勃発より約4年半の事だった。

そして、人類は世界復興の道を歩み始める。殆どの街が瓦礫と化し、森林の多くは灰となり、原子力発電所が存在していた地域は人の制御がなくなった事によってメルトダウンが発生。最低でも数十kmの範囲が放射能に汚染され、人類が近づけない不可侵領域と化した。海は石油プラットフォームより漏れ出た大量の石油と、海岸部に存在する原子力発電所より漏れ出た放射能汚染によって甚大な被害を受けた。空は唯一、何も変わらない青空を見せる。畜産業は文字通りの全滅と言って良い程の損害を受け、化学的に生産される化学食糧に代替された。

結論から言うと、地球の自然は致命的なレベルで破壊され、最早フォーリナー大戦以前の姿を取り戻すのは不可能なのは確実だった。しかしそれでも、残された土地で再び

人類は文明の再建を始めた。何も完全に元通りにする必要は無い。何せ人類は、僅かに15億程度しか居ないんだから。

フォーリナーが遺していったテクノロジーを吸収した人類は、僅か数年で大きな復興を見た。都市部には新品なビル群や住宅地が立ち並び、側にはEDFの基地や地下シエルトが建設され、市民達に安心感を与える。郊外には基地の他に対宙超大型兵器が建造され、再びフォーリナーが襲来した時に宇宙空間で船団を完全破壊する為の防衛網が張られた。

人類は再び、点在状態でこそあれど安泰の地を手に入れる事が出来たのだ。

2028年6月27日午後11時55分、東京基地第9監視塔内。周囲を見渡せる頂点部に、4名のEDF兵士が居る。2名は外を適度に見張り、2名は中央に置かれたテーブルでトランプを楽しんでいる。

「おらフルハウスウ！これでどうだ！」

「悪い、フォーカードなんだわ」

「うっそだろお前!?!いやイカサマしてんだろ絶対、その運の良さはあり得ねえって!?!」

「してないって。さっきお前に服に仕込みが無いか確認させたばっかだろう。さ、出しな」

「だーから言つたら。其奴と賭けしたら割に合わないどころか全部持つてかれるって。イカサマしてるようで全くしてない豪運を其奴は持つてるんだよ」

「俺等もどんだけこいつに掛け金持つてかれたのか、数えたくない」

「だー、畜生…ホラ」

EDF第3世代アーマースーツの機能に搭載された圧縮空間から、コンビーフの缶詰を取り出し、テーブルに置く。それを向き合っていた兵士が受け取り、圧縮空間に仕舞い込む…と思いきや。彼は手袋を外し、巻き取り鍵を手にとってペリペリと缶を開け始めた。

「あ、お前此処で食うのかよ」

「小腹満たしと夜食を兼ねて。欲しかったらポーカーで勝つてからな」

「もうやらねえよ。ベット出来る最低金しか残つてねえ」

開封されて姿を現した塩漬けの牛肉に、齧り付く。

「…相変わらずあんま旨くないな…」

「そりゃ天然食糧と比べたらなあ…」

「本物のコンビーフを食いてえ」

「1個100gで百数十万払えんなら食える」

「無理」

「なら諦めろ。畜産業の再建は進んでるが、このまま平和だったとしても数十年後の話だろうさ」

「そうだな…」

底に残されたコンビーフを口の中に運ぶ。

そして時刻は、2028年6月28日となった。

それは、あまりにも突然で、唐突だった。

6月28日午前0時0分ジャスト。日本列島全域を、目の前にある自分の手足さえも見えぬ程の「光」が覆い込んだ。

それは外のみならず、建物内や果てには地下でさえ例外ではない。しかし、それ程の強烈な「光」であるにも関わらず、誰一人としてその視力を損なう事は無かった。

数秒後。「光」は何もなかったかのように消失し、再び本来の景色を映し出した。

「……………今、のは、何だ？」

東京基地第9監視塔の彼等は、その現象に対し呆然としていた。

しかし次の瞬間、基地全域に響き渡る音量と数の警報音が響き渡る。その警報音の意味は、「第一種即時出勤態勢移行」。かつて存在していたアメリカ合衆国が定めていた Defense Readiness Condition 「デフコン」で例えるならば、デフコン1への移行。つまりは完全な戦争準備態勢となる事を意味していた。

「ツ……周囲警戒!!」

4人は直ちにアサルトライフル「AF20」の安全装置を解除。初弾を装填して構え、外を睨む。その上空を、東京基地よりスクランブル発進した戦闘機「ファイター」の編隊が通り過ぎた。

それは何も、東京基地だけの話ではない。

千歳基地、帯広基地、山形基地、岐阜基地、広島基地、高知基地、福岡基地、鹿児島基地、そして日本列島に於ける「首都」に相当する大阪基地、そして46都道府県フオーリナー大戦後、EDF日本支部は壊滅し無人島化した南西諸島や伊豆・小笠原諸島の完全放棄を決定した。各国政府が崩壊し、皮肉にも結成当初の宣伝通りに世界統一政府と

なつたEDF。その中でも日本列島の統治及び防衛を管轄に入れた日本支部は、防衛観
 点上維持及び補給が困難である離島の防衛を始めから放棄し、日本列島の殆どを構成す
 る北海道、本州、四国、九州の4主要島の防衛に集中配備する事を防衛計画の前提とし
 て決定したという経緯がある。故にフォーリナー大戦後、日本列島の地理は沖縄県を除
 いた46都道府県となつた。この他にも原子力発電所が存在していた地域は殆どがメ
 ルトダウンによる放射能汚染を受けており、事実上の放棄状態となつている。該当地域
 にフォーリナーが侵入した場合、EDF日本支部は海空軍による徹底的な^{ベルカ式国防衛}火力制圧戦
 によつてフォーリナーを殲滅する構えだ。の同様に第一種即時出動態勢が発令。陸海
 空、全軍が出動し臨戦態勢へと移行した。

同時にあらゆる都市に第一種即時出動態勢による避難命令が発令されると共に、民間
 の携帯やPCなどの通信端末に、以下の文章がほぼ同時に送信された。

—Jアラート発令—

該当地域：日本列島全域

詳細：6月28日0時0分、該当地域にてフォーリナーの攻撃の可能性がある正体不
 明現象が発生しました。EDF日本支部はこの事態を受け、第一種即時出動態勢を発
 令、合わせて該当地域の避難命令を発令しました。該当地域にお住まいの皆様は、直ち
 に防護アーマースーツを着用し、最寄りのシェルターへと避難してください。

これは訓練ではありません。

都市部に住まう市民達は、響き渡る警報音とJアラートの内容を見て、支給されていた防護アーマースーツを着用して家や会社、建物から飛び出し、最寄りのシェルターへと整然としながらも殺到した。

「落ち着いて避難して下さい！避難ルートにはEDFの兵士達が守備に付いています！何があつても決して足を止めず、冷静にシェルターへ向かつて下さい！」

避難活動を支援する部隊の1人が拡声器でそう呼び掛ける。

彼等の眼前には、歩道を飛び出して道路にも溢れて歩く市民達。彼等の任務は全国の3600万人の市民達を無事に、そしてパニックを起こさせず、かつ1分1秒でも速くシェルターへと避難誘導させる事。これだけを聞くと困難にも思えるかも知れないが、こういった事態に備えてEDFは年に4度、不定期的に避難訓練を実施していた。

正直言ってこんな事本番が起こって欲しくは無かったのだが、起こってしまった以上その使命を果たす義務がある。

その為には、必要とあらば己の命さえも捧げる覚悟さえも持つて。

騒然としているのは市民達だけではなく、EDF日本支部も似たような状況だった。

各軍各部隊は当然だが、特に騒然としているのは大阪基地にあるEDF情報本局。彼等は不明現象発生直後から発生した、日本列島外の全通信途絶の原因調査と、不明現象の調査、フォーリナーの存在の確認などで正にこまいな状態となっていた。

「札幌基地より観測データ受信!!」

「第2宇宙観測台より報告! 現在もフォーリナーに相当する人工物は確認出来ず!!」

「データサーバーの負荷がイエローに突入! このままでは46分後にサーバーがパンク状態に陥ります!!」

「不必要なデータを全て他部局のサーバーに一時避難させろ! 実行前に連絡を入れて許可を取り付ける事を忘れるなよ!!」

騒然とする中、情報局長の席に設置されていた固定電話が突然鳴り始める。局長は1秒にも満たぬ反射速度で送話器を掴み取って通話を開始。

「もしもし!?!」

『きよくちよー! お願いがあるんだけど!』

「篠ノ之博士ですか!?! 分かっているとと思うんですが今忙しいんですよ!!」

『分かっているから手短に言うよ!! ああの現象の発生前後の全国の

あらゆる種類の観測データ、全つ部私に頂戴!!」

「全部ですか!？」

『全部!!そこから全部洗って異常なデータを見つけ出す!!今は猫の手も借りたいでしょ!?!早く決めて!!』

「…分かりました、直ぐに送ります!」

『頼んだよ!』

短い通話を終え、荒々しく通話機を置く。

「不明現象発生時の前後観測データ全てを、篠ノ之博士に送れ!!最優先だ!!」

同時刻、大阪基地兵器開発部室。

本来ならまだ勤務時間外で、誰一人としていない筈の室内に、1人の女性の姿があった。

「……………」

彼女の姿は、余りにも特異的。胸元が開いたデザインのエプロンドレスと機械風のウサミミカチューシャを頭に付けた、まるで不思議な国のアリスの様な、かなり独特な服

装を着込んでおり、側から見ても、というかどうか見てもEDFの科学者には見えない。何ならEDF職員にも見えないし、寧ろ不審者として捕まるのが自然なそれだ。

しかしこれが彼女の普段着であり、何より彼女が人類に打ち立てた数々の功績によって、彼女がそうである事を許黙認されている。彼女こそが、人類史上最高の頭脳であるが故に。

彼女の名前は、篠ノ之束。

不思議の国のアリス風の研究衣を着こなすと共に機械の様なウサミミを着用する姿は変人以外の何者でも無いが、そのふざけた格好とは裏腹に、数多くの新技術をEDFに齎した現代のエジソン。

その功績は抜粋するだけでもフォーリナーテクノロジーを利用した兵器開発、圧縮空間の開発、第2及び第3世代のアーマースーツの開発、ウイングダイバー及びフェンサーの兵種開発、自立衛星AIの開発、etc。彼女の頭脳は多岐に渡る分野に於いて画期的な発明を数々と起こし、フォーリナー大戦時には数十の新技術の開発に成功し、数百もの新兵器の開発に携わっている。殆どの兵士の間では「兵器開発部無くして人類の勝利は無かった」と言われているが、正確には「篠ノ之束の頭脳無くして人類の勝利は無かった」というのが正しい。彼女が新たに開発した技術をきっかけに、他の者が其処から発想を得て更なる開発に成功する件もあり、EDFは彼女の代用になり得る頭脳

を発掘する事は出来ていないそもそも、彼女と同等レベルの頭脳を持つ者が現れるのはまず無いだろうと言われている。彼女の知能指数は最低でも400以上と計測されており、最早彼女の頭脳そのものが「特異点」であると言った方が良い。

その為、彼女は とある理由等で問題行動を繰り返しているのだが、彼女を切り捨てると人類の多大な損失に繋がる為に、EDF日本支部上層部の頭痛の種になっているのは周知の事実だ。

そんな彼女は今、2台の第二世代量子コンピュータ、2台の画面、2個のマウス、2個のキーボードを利用し、情報本局から送られてくる膨大なデータを調査していた。目はギンギンに開き切って2台の画面に映し出す情報を脳に読み取り、両手は目にも止まらぬ速度で2つのマウスの操作と2つのキーボードの操作を忙しく行う。

「……………巫山戯るな……………」

不意に、彼女の両手が止まる。徐々に両手は握り拳を作り、ギリギリとその手から音が鳴らんばかりに力が入り始める。

そして両手が振り上げられ。

「何っで！今来るんだよクソツタレのフォーリナーアツ!!」

振り下ろされ、その着地点となった2つのキーボードを 真つ二つに叩き割った。

「フーツ、フーツ…!!ああ、もう、予備のキーボード持ってこなきゃ…!!これも全部

フォーリナーのせいだ!!アンのド畜生野郎共、全員死ね!!共食いして絶滅しろ!!自害してこの世から居なくなれ!!箒ちゃんやちーちゃん、いつくんにりーちゃんを殺した事を死んで詫びろオツ!!」

自分がキーボード壊したと言うのに、この責任転嫁。まあ彼女のみならず、全人類がフォーリナーには憎悪を抱いているから、その感情自体は当然といえれば当然ではある。だからと言ってキーボードを2つも壊していい理由にはならないが。

「…待ってろフォーリナー、お前達が一体何をしたのか、直ぐに丸裸にしてやる…!!」
予備のキーボードをパソコンに接続し、作業を再開。

その後、兵器開発部室は明かりが消える事なく、一夜中タイピング音が響いていた。

突如、何の前触れも無く日本列島全域を襲った不明現象。

それが引き起こした事は何か。それが判明したのは、およそ13時間後のことだった。

第2話 現状把握

6月28日午後1時47分、EDF日本支部、第一会議室。

其処に集まっているのは、日本支部司令長官「大石宏光」を筆頭に参謀長や戦術士官等、日本支部を動かす重要人物が集っていた。…その中に一人、机に突っ伏して動かないウサ耳とエプロンドレスの格好をした女性がいるが、彼等は意図的に無視していた。

「…すまない、もう一回言ってくれ。何がどう起こったんだ？」

その声を挙げたのは、日本支部司令長官 大石宏光。

彼を含む全員の表情は驚愕や困惑に染まり、報告を伝えている情報局長自身も内心信じられない事ではあると思っている。

「…では、もう一度申し上げます。日本列島は、「転移」したと考えられます」

「……………はあ？」

以下同音、しかしそれも無理はない。フォーリナーや先の不明現象に関する報告が始まるのかと思ったら、初手で「日本列島の転移」と言われる等、彼等でさえ思ってもいなかった。

「……この場という以上、それは決して誤った報告では無いのだろうか…だとしても、どう

してそのような結論になった？」

「報告書は読みましたが……これに関しては、調べた本人が直接言った方が早いでしょう」
そう言つて、情報局長はその人物……突つ伏している女性、篠ノ之束に視線を向ける。それに合わせて全員が束に視線を向け、その気配に気付いたのか、束はゆつくりと顔を上げ、首を横に傾けてコリを剥がす。

「……篠ノ之博士、大丈夫ですか？」

「ん……まあ、うん。だいじょーぶ。7年前とかはもつとエグい労働してたし。説明だよね？」

「はい」

「おk」

ポキポキと骨も鳴らし終え、数枚の書類と会議室の中央に設置されている立体映像プロジェクトのリモコンを手に取り、立ち上がる。

「ほい、そんな訳で説明始めるよ。まずフォーリナーの観測に付いては、宇宙観測チームによると白。未だにフォーリナー、もしくはそれに相当する人工物は確認出来てないよ。寧ろ、問題はこつち」

リモコンを操作し、立体映像プロジェクトを起動。すると、其処には円状に座る皆に見えるよう配慮して複数枚の画像が立ち上がる。その絵は、どうやら星空の画像らし

い。

「これは昨日、つまり6月27日に観測出来た日本列島から観測出来た天体。で、例の不明現象発生後に観測してる天体がコチラ」

画像が切り替わる。其処には、同じく星空の画像。しかし、先の画像と比べても星の位置や数が全く合っていない。

「……この画像は？」

「言つたでしょ？不明現象後に観測出来てる画像だつて。つまり、今、私達の上に浮かんでる天体の画像がこれ」

『……………』

「異常は他にも。まず水平線の距離拡大。約4.65kmから約4倍の17kmに。これを考えると、多分惑星直径も3倍とか4倍になつてるんじゃないかな？全衛星の通信が途絶したからなんとも言えないけど。この変化にも関わらず、重力加速度は9.8065 $\frac{\text{メートル}}{\text{秒}^2}$ 、気圧は平均1015hPa。地球と大した変わつてないね。なんでなんだろねホント天体化学に喧嘩売りやがってこの野郎」

「博士」

「……ごめん。えーと、次に大気汚染。これはもう劇的だつたね。日本列島に於ける空気質指数実際にいくつかの国や地域で採用されている、大気汚染の程度を示す指標。日本

では「光化学スモッグ注意報」などの大気汚染注意報がこれに近い。フォーリナー大戦後は深刻な環境汚染により、E D Fは世界的に空気質指数を採用する事を義務付け、従来の測定に放射能汚染を加えた。の平均判定は橙から緑。空気が物凄く、信じられないレベルで美味しくなった。汚染地域は相変わらずだろうけど、少なくとも都市部で汚染を気にする必要は無くなったかもね。今後の観察は必要だけど。次は海洋汚染。これも空気質指数と同じくらい改善。ぶっちゃけ言ってフォーリナー大戦前よりも水質良いや。その証拠に、昨日まで絶滅してるのが確認されてた海洋生物が日本列島付近にメッチャいるのを、生きてた海底ソナーの一部が拾ってる」

「んなっ…!?!」

「た、だ、し！確認出来た海洋生物は全種類が未知の生き物。地球の海洋生物に似てるっ
ちや似てるけど、毒性があるかないかとかは実際に調べてみないと分からないよ」

「で、その他諸々の計測データに関しては多少の差異こそあれど、今言った異常に比べて
ら報告する必要がない程度の物。これら全てを纏めた結論を言うなら…突拍子の無い
事なんだけど、それこそ「日本列島が全く異なる星に転移した」なんて事じゃないと、説
明出来ないんだよ。これで、私から話すことは終わり」

そう言つて、彼女は着席。

星の座標変化等、十分な根拠を持って発表されても普通、「日本列島が転移する」など

聞いたたら万人は「あり得ない」と言うだろう。しかし彼等EDFは、あの地獄を生き延びてきた者達の反応は、少し違った。

「…フォーリナーの仕業か？」

「それはまだ不明。だけどその可能性も捨て切れないね」

「しかしもし奴等の仕業だとしたら、一体何の為に？」

「10年前の復讐も十分に考えられる」

「いや、それだったら転移と同時に攻撃している筈。半日も待つのは考えられない」

「転移そのものがフォーリナーの新兵器というのも考えられる。邪魔な奴を容易に排除出来るなら…」

「しかし転移前はフォーリナーはまだ観測されていなかった。奴等の仕業なら果てしな
い距離から我々に攻撃を…」

憶測が憶測を呼び、ザワザワと騒めく第一会議室。

が、日本支部司令長官が静かにテーブルを叩き、数秒の間を置いて沈黙が再び訪れる。

「此処で憶測を話し合っても何も始まらない。情報局長、篠ノ之博士。他に何か情報はな
いか？」

「日本列島が転移したという情報以外、何も…」

「こつちも同じく。そもそも私の本来の所属は兵器開発部、私独自に調べられるのもこ

れが限界だよ」

「これ以上の近辺調査となると、海軍空軍の出動が必要となります。衛星の通信は未だにロストしており、宇宙からの調査は不可能です」

「…調査に最適かつすぐに動かせるのは？」

「第1、第3、第7、第9飛行中隊、第1、第2艦隊、そしてアリコーン級潜水戦闘空母1番艦 アリコーンです」

「そうか…いや待て、アリコーンだと？ 予定だと確か、昨日補給を終えて太平洋にいた筈だぞ」

「それが…現場の手違いで補給物資の搬入に多大な遅れが生じていたようです。補給を終えて東京湾より出航後、日本領海内を航行中に転移に巻き込まれたようです。」

「…あの艦も巻き込まれたのは幸運と言うべきか、不運と言うべきか…兎に角状況は分かった」

大石が立ち上がると同時に、会議室に座っていた全士官も立ち上がる。

「今回の転移事象はとても隠しきれるものではないだろう。市民達には嘘偽り無く公表する。全EDF陸軍部隊は起こり得る混乱に備え、治安維持に努めよ。空軍海軍はフォーリナーの襲来に備え、いつでも出動出来るように。第1、第3、第7、第9飛行中隊、及び第1、第2艦隊、アリコーンに出動を要請。日本列島周辺を調査しろ。どん

な細かい事でも良い、何かあったらすぐに報告させるのだ。

皆も分かっているだろうが、此処が正念場だ。我々には物資が限られている。弾薬、燃料、食料。全てが万全とは言い難い。日本列島の補給が停止した今、我々は戦わずして斃れる恐れすらある。これ乗り越え、生き残らねばならない！諸君らの健闘を期待する！」

『了解!!』

同日午後2時、日本列島より南30km地点の海。

穏やか海の中。深度200mに、その艦はいた。その全長は495m、全幅116m、全高54m。とても潜水艦とは思えない巨体を持つその艦の名は、「アリコーン」。

フォーリーナー大戦後、世界復興の最中に建造されたEDFの決戦兵器が一つ、「決戦要塞X7-1」のナンバリングが与えられた超兵器。

潜水艦でありながら戦闘機の離着艦機能、200mmバーストレールガン2基、600mmレールキャノン1基、VLS48基、CIWS8基を搭載する超^{モンスター}武装潜水艦であり、その戦闘力はエウロパ級要塞空母1番艦^{EuroPa}エウロパ、2番艦^{Despina}デスピナ、3番艦

フォルニョート、計3隻のモンスター・キャリアー。その名の通り、空母としての機能は勿論として、マザーシップの攻撃にも耐え得る強靱な装甲を持つ。全長1400mもの船体に搭載された武装は、汎用主砲として4基8門の51cmレールガン連装砲、対空兵装として360基の巡航ミサイルVLS、420基の35m CIWS、対地支援用として4基の超大型巡行ミサイルVLSを搭載。機関は核融合炉であり、その恩恵を受けて最大速度は30kt。デスピナ内部に簡易的な兵器製造機構、食料生産機構を備える等、無補給でも暫くは継続戦闘が可能となっており、正に「要塞空母」と言わしめるに相応しい性能を持つ。を除けばEDF海軍艦の中でも随一。しかし何よりも期待されているのは、Covert Projection Ability 隠密戦力投射能力。EDFが再びフォーリナーの侵略を受け、対宙迎撃網赤道上に設置された200cmレールキャノン、世界各地に建造された120cm磁気火薬複合加速方式半自動固定砲 ストーンヘンジ、各基地及び専用発車基地に設置されたテンペストミサイル、そして宇宙空間に配備された軍事衛星から成る。が突破されて地上戦に移行した時、アリコーン級潜水戦闘空母の役割は海岸部に於ける豊富な武装による迅速な火力支援、そして600mmレールキャノンによるマザーシップに対する奇襲打撃。砲口径こそストーンヘンジの半分だが、使用される砲弾は対フォーリナー装甲砲弾「グラインドバスター」、そして圧縮空間搭載式空間制圧砲弾「トールハンマー」による火力は壮絶に尽きる。しかしそれ故に、秘密戦力として機能で

きるように詳細な活動は一般公開されず、秘密に包まれている。

本来ならばこの艦は、昨日の時点で東京湾から出航して太平洋へと駆り出している筈だったのだが、補給物資搬入の手違いで出航時刻が半日遅れるトラブルが発生した。本来なら単なるトラブルというだけで何の問題も無い筈のものだったが、先の不明現象：否、「転移現象」に巻き込まれてしまった。

唯一連絡が取れた日本支部からの要請により、まずは日本列島付近の哨戒任務に付いていたが、つい先程日本支部より、転移現象に関する情報が届けられた。これを共有する為、アリコーン艦長 マティアス・トーレスは発令場の艦内放送を用いて全艦に情報通達を行っていた。

「…以上が13時間前に本艦…否、日本列島周辺に確認された不明現象の詳細だと思われる」

『…』

沈黙。

無理もない。日本支部が保有する通常艦隊とは異なり、決戦要塞X7-1として建造されたアリコーンは、人類の中でも最高峰の人材が選ばれてきた。それ故に人員の出身は多国籍に渡り、だからこそそのショックは大きい。

日本列島周辺が転移したと言う事は、彼等は一瞬にして「故郷」を失った事と同意義

と言えるのだから。

「…皆の気持ちは分かる。私も皆と同じだ。護りたかつた故郷は、帰りたかつた故郷は、あの瞬間の一瞬で遥か彼方に消え去つた。しかしそれで我々が立ち止まる理由になり得るか？」

「否、そうはなり得ない！我々にはアリコーンしか無いのか!?否!!まだ我々には3600万の守るべき市民達が、日本列島がある!!EDFが、我々が立ち止まってしまうその時は、人類が滅亡するその瞬間だ！まだ人類は絶滅などしていない、ならば我々は立ち止まってはならない！たとえ故郷を失つても、たとえ戦友を失つても、たとえ家族を失つたとしても！我々は人類を守る為、今此処に立っている！今こそ、その使命を果たす時が来た!!」

「この情報と同時に、我が艦アリコーンに指令が届けられた！我々はこれより浮上し、日本列島南部海域の調査を開始する！航空戦力も動員し、徹底的に付近の状況を調べ上げる!!」

「アリコーン、浮上を開始せよ!!」

海面を、巨体が割つてその姿を表す。

アツプ^浮トリム^上25度の勢いは海面浮上後も艦首から中央部近くまでの船底を空気に晒し、数秒後、海面を叩いて盛大な水しぶきを上げた。

縦揺れが収まった直後、船体後部の：水上艦ならば艦橋に当たるとであろう箇所膨らんでいる楕円部の一部が開放。全長およそ480mの滑走路が出来上がる。そして、楕円部を屋根とした部分に仕込まれていたエレベーターが作動し、船体内部の格納庫にて整備されていた戦闘機 ファイター2機が姿を表す。

エレベーターが固定された直後、ファイターはアフターバーナーを開始。最大速度マッハ4を叩き出す大推力エンジンが火を吹き、急加速を開始。100m程進んだところで、機体下部の補助ブースターが起動。低速域にて超機動を行う事を主目的として搭載されたそれは、副次的に超短距離での離陸を強引に可能とした。下部から提供される推力によって強引に機体は勢いよく離陸し、直後安定飛行が可能な速度に到達。そのままアフターバーナーを継続し、水平線の先へと飛行していく。

再び2機のファイターが離陸。それを繰り返して、最終的には30機のファイターがアリコーンより離陸した。

第3話 接触

日本列島より西南西980km地点の上空に、空気を裂く物体が飛行していた。

「……まさか、転移なんてものが現実になるなんてな……」

決戦要塞X7-1 アリコーンより発艦したファイターのコックピットで操縦桿を握るパイロットが、小さく呟いた。

ファイターはフォーリナー大戦後に生まれた第6世代戦闘機であり、フォーリナーのテクノロジーをふんだんに使用したEDF最強かつ唯一無二の制空機である。機体構成はカナード付きデルタ翼機を採用。推進力となる双発エンジンには3枚パドル式左右独立三次元推力偏向ノズルを使用し、各所に補助用の小型ブースターを取り付けており、低速時には小型ブースターを使用して戦闘機とは思えぬ超機動を行う事が出来る。

搭載兵器は20mmガトリング砲2門、最大24の目標を同時に撃破可能な全方位多目的ミサイル誘導システム「ADMM」、汎用レールガンユニット「EML」の3種。最高速度はマッハ4に達し、巡航速度もスーパークルーズとなるマッハ2を発揮する、正に怪物と形容出来る性能を誇る。

そんな機体が何故そんな地点を飛行しているのかというと、正に今パイロットが呟い

た「転移現象」が原因だ。

事態を把握したEDF日本支部は、とても隠せるものではないと判断して転移を発表。シエルターでその発表を聞いた市民達は混乱や不安に包まれる事となったが、フォーリーナーの姿は確認出来ないという事もあり、EDF日本支部が想定していた暴動などは幸運にも起こることは無かった。

しかし、突然の出来事故にEDF日本支部の物資は限られている。食料は化学的に生産される化学食料を中心としていた為に、配給制とすれば日本列島の生産施設で十分に賄う事が出来るが、燃料弾薬となるとそうは行かない。日本列島は無資源地域だった為に、燃料弾薬は日本列島外からの補給に頼り切っていた。

補給が途切れ続ければ、EDF日本支部は1年で燃料が尽き、戦わずして自滅する。この緊急事態に、第1、第3、第7、第9飛行中隊、第1、第2艦隊、アリコーンは日本列島外の調査任務に出動していた。

「果たして、どうなるのやらな……ん？」

レーダーに明確な反応。

(数1、速度120km/h、IFF反応無し、同高度で接近中……か)

「此方SACS3。アリコーン、応答求む」

『此方アリコーン、どうした？』

「レーダーにアンノウン1捕捉。これより接近及び捕捉、アンノウンが飛行してきた地点の地域調査を試みる」

『了解した、直ちに日本支部に報告する。映像記録を開始せよ』

「了解」

ヘルメットに搭載されている超小型高性能撮影カメラを起動し、録画を開始。

自然と操縦桿を握る手に力が入る。ここから先は未知の領域、何が起こるか分からない。

(全兵装安全装置解除。…まだ引き金に指は掛ける段階じゃないな)

ファイターは僅かにエンジン出力を上げ、アンノウンへ接近する。

数分後、パイロットの視界に、アンノウンを目視する。しかしそれは、ある意味想定内で、しかしある意味想定外の物だった。

「……………Dragon……………」

晴天の空の中、1匹の竜が1人の人間を乗せて羽ばたいている。

クワ・トイネ公国の竜騎士マールパティマは、「ワイバーン」と呼ばれる飛竜に乗り、公国の北東部の沿岸哨戒の任に就いていた。

クワ・トイネ公国の北東方向には何も無い。青い海が広がっているだけだ。しかし現在、クワ・トイネ公国は隣国のロウリア王国と緊張状態が続いており、何も無い北東方向からのロウリア王国軍の奇襲も十分に考えられた為、こうした哨戒任務も発生している。

今日も何も無いまま哨戒任務が終わる、そう思っていたマールパティマの視界に、異物を目視する。

「ん……？」

よく目を凝らし、それを見る。双方が真つ直ぐ近づいている為、接近は速い。

「なん、だ……羽ばたいていない？」

彼がよく知る飛竜は、羽ばたかなければ空を飛ぶことは出来ない。しかし真正面から向かってくるそれは、一切羽ばたいていない。彼はすぐに通信用魔法具を懐から取り出して司令部に報告する。

「我、未確認騎を発見。これより要撃を開始し、確認を行う」

高度差は殆どない。マールパティマは一度未確認騎とすれ違い、後方より距離を詰める事を選択する。

そして、未確認騎とすれ違った。

(なんだ、あれは…)

マールパティマの認識からすれば、未確認騎は文字通り「未知」だった。羽ばたいておらず、何処かから大きい音が響いている。そして彼の位置からは見えていないが、茶色の胴体に蒼色で書かれた知らない模様様が2つ描かれている。

彼はワイバーンを羽ばたかせて反転、未確認騎の追跡を開始する。大きな風圧を受けつつも、一気に距離を詰められる。その筈だった。しかし追いつくどころか逆にあつという間に距離を離され始める。

慌ててワイバーン最高速度の235km/hで追跡を試みるが、それでさえも未確認騎は速く、段々と視界から小さくなっていく。

「なんなんだ、アレは…っ!」

「司令部!!司令部!!我、未確認騎の確認、追跡を試みるも速度が違いすぎて追いつけない!未確認騎は本土マイハーク方向へ進行!繰り返す、未確認騎はマイハーク方向へ進出した!」

マールパティマからの報告を聞いた司令部は、大慌てとなっていた。

第三文明圏最強の兵器であるワイバーンでさえも追い付けない未確認騎が、よりにもよってクワ・トイネ公国の中枢都市マイハークに接近していると言うのだ。未確認騎は速度からして、既に本土領空へ侵入している可能性が非常に高い。

マイハーク付近に駐屯していた第6飛竜隊に魔法通信が掛かり、緊急指令が流れる。

『第6飛竜隊、全騎発進。未確認騎がマイハークに接近中、領空侵入の可能性極めて大。発見次第直ちに撃墜せよ。繰り返す、発見次第直ちに撃墜せよ』

緊急指令を受け、第6飛竜隊が次々と滑走路より空に舞い上がった。全力出撃、12騎全騎。

そして直ちにマイハーク北東方面に飛行し、運良く未確認騎との真正面の正対に成功した。最初は点ほどに小さく見えた未確認騎は、あつという間に大きくなっていく。

その姿に、第6飛竜隊隊員は各々の感想を持つ。

「速いな……全員、聞け！導力火炎弾の一斉射撃で未確認騎を撃墜する！未確認騎は我が方の速度を凌駕しているとの事だ、攻撃のチャンスはすれ違う一瞬のみ！各人、日頃の訓練の成果を見せろ！」

第6飛竜隊隊長の指示を受けてワイバーン12騎は横並びとなり、口を開けて火球を形成していく。これこそがワイバーンが第三文明圏で最強と言われる所以、導力火炎

弾。12発の導力火炎弾を受けて無事だった物体は、少なくとも彼等は知らない。

そうして攻撃のタイミングを伺っていたら、未確認騎は突如として高度を上げ始めた。

「なあっ!?!」

ワイバーンの最高高度4000mを飛行していた第6飛竜隊にとつて、未確認騎の更なる高度上昇は想定の外も外。彼等からしたら4000m以上の高空を飛ぶなどあり得ない事なのだ。

それ故に、ワイバーンの最高高度4000mしか飛行出来ない第6飛竜隊は未確認騎が真上を飛んでいくのを見守る他に無く、唯々己の無力を嘆くしかなかった。

クワ・トイネ公国政治部会。

公国を代表する者達が集う会議の中、首相のカナタは内心で頭を抱えていた。

前日、軍事卿から正体不明の飛行体がマイハーク上空に侵入、同都市を偵察するように旋回飛行した後去っていったという報告が上げられた。その飛行体は飛竜ワイバーンが追いつかぬ程高速、かつ辿り着けない程に高空を飛行していた。

所属は不明、機体に国旗と確認できる物も見つかっていない。

「この報告について、皆はどう思い、どう解釈する？どんな意見でも構わない」

カナタの言葉に、真っ先に情報分析部長が発言する。

「当部分析担当班によると、西方の第二文明圏列強国「ムー」が開発している飛行機械に酷似しているとの事です。しかしムーの飛行機械と、今回の飛行物体の速度が余りにも違いすぎる上に、何よりも距離が広大過ぎます。我が国から2万kmも離れているのです、幾ら何でも、この距離を飛行するのは非現実的であると思われる」

結局は振り出しに戻り、場が膠着する。その時、外交部の幹部がドアを破らんばかりの勢いで場に飛び込んでくる。

「報告します!!」

その幹部から上げられた報告は、大きく纏めると以下の点になる。

本日朝、公国の北側海上に全長およそ300mにも及ぶ超巨大船が出現。海軍が臨検を行ったところ、EDF日本支部という国？の外交官と接触、敵対の意思が無いという旨を伝えてきた。他にも複数事項が判明。

1. EDF日本支部は、突如としてこの世界に転移した。

2. 元の世界と断絶した為、哨戒機にて付近の搜索を行っていた。その際にロデニウス大陸を発見。搜索活動中に公国の領空侵犯をってしまった事は深く謝罪する。

3. クワ・トイネ公国と直ちに会談を行いたい。

余りにも突拍子も無い、普通なら考えられない内容に政治部会は荒れた。

しかしEDF日本支部という統治機構は礼節を弁え、尚且つ謝罪や会談の申し入れは一応の筋は通っている。

この事から、まず外交官を官邸に招待する事が決定された。

クワ・トイネ公国都 首相官邸の応接室前。

国を取り纏める首相のカナタは、政治人生に於いてこれ以上にならない程の緊張を抱いていた。

通常ならまず外務局の者が交渉や会談を打ち合わせ、外務卿が国交締結を取り仕切った後、数多くの根回しや長い静観を経て初めて、クワ・トイネ公国に於ける政務元首の首相が、相手国の元首と条約宣言を行うのがクワ・トイネ公国の順序であった。

しかし、現在のクワ・トイネ公国は隣国のロウリア王国と緊張状態が続いており、準戦時体制にある。この状況に於いて、力のある国とは関係を持つておきたい。そして万が一、EDF日本支部が覇権的な思想を持っていた場合。クワ・トイネ公国は潜在敵国

を2つ持つ事となり、その国力が耐えられる可能性はより低くなる。

首相が担当者に緊張するなど情けない話だが、しかし未確認騎、超大型船の両方は想像を絶する程に高度な技術力を示している。その国力は本物である事は間違いない。故に、彼が緊張を隠せないのは無理もなかった。

(…入るか)

応接室内には、一足先にEDF日本支部の使者を通してある。

ドアを開けて入室すると、使者：EDF日本支部情報局員の3名は席を立ち、一礼した。

「初めまして、EDF日本支部情報局の田中と申します。急な訪問にも関わらず、国の代表が対応すると聞き及んでいます。光栄の極みです、どうかよろしく願います」

「ええ、よろしく願います」

クワ・トイネ公国は首相カナタ、外務卿リンスイ、外務局員5名となる。

「司会進行を務めます、クワ・トイネ公国外務卿のリンスイと申します。よろしく願います。…早速ですが、EDF日本支部の皆様、貴国の来訪理由をお伺いたい」

「はい、まずは資料を配布してよろしいでしょうか」

情報局員の1人が資料を配布する。しかしその資料を見て、リンスイは顔をしかめた。

「すみませんが…何と書いてあるのか全く読めません」

「…同じ日本語を話していたので、もしやと期待はしましたが…流石に都合が良すぎましたか。私達も、ここに来るまでに町で見た看板の文字が読めませんでした。しかし言葉は日本語で話す事が出来る…何故なんでしょうか？」

「いや、私達からすれば大陸共通言語をあなた方が話しているように聞こえますぞ」

「そうなのですね…そのような不思議な事が起こるとは…では、資料の内容を口頭で説明致します。私達は、この国から北東およそ1000km付近に位置する、EDF日本支部という…統治機構から参りました。…単位は通じますか？」

「無論、かしお待ちを。あの位置には国など無かった筈。確か群島があり、海流がともも乱れる海域です。一部の島には集落はあつたようですが…集落が集まり、国を形成したという事でしょうか？」

「いえ。私達が統治している島は約36万6千? EDF日本支部が統治しているのは本州、北海道、四国、九州のみである為、フォーリナー大戦前に存在していた日本の国土面積と比べると、およそ8000? 縮小している。の国土を有しており、お考えの集落ではありません」

リンスイは説明された国土面積に面食らった。確かに一国として十分な広さであるが、しかしそんな巨大な島が発見された報告は聞いた事が無い。カナタや他の者も啞然

としている。

「申し上げにくい事ではあるのですが……我々は「地球」と呼ばれる惑星から、何らかの形でこの世界に転移してきたと考えられています。その原因は判明していません」

「確かに、政治部会に於いてもそのような報告は受けました。しかし、国ごと転移など……一体どれ程の魔力を必要とするのか、想像が尽きません。失礼ですが、我々からすればあなた方はおとぎ話を元に、ホラ話を吹聴しているように聞こえます」

（まりよく……？）「信じられないのも無理はありません。我々も客観的な証拠が無ければ到底信じ得ない事でしたし、我々が地球にいた頃に「1000km先に国家ごと転移して来た」など言う者が現れたら、あなた方と同じ反応をしたでしょう。そこで、貴国から使節団を統治地域……日本列島に派遣して頂けないでしょうか？お互いの国をよく知するため、そして直接見た者の報告であれば、貴国も我々を信じる事が出来るでしょう」

「それは………しかし………」

「外務卿」

返答しあぐねてたリンスイを見て、カナタが割って入る。

「卿の気持ちも分かる。しかし、彼等はマイハーク上空に騎を飛ばし、大型船で来訪して来ている。群島集落が集まって国を形成した所で、いきなり大型船を造れる筈がない。我々の知り得ぬ力を持つ方々が、使節団を派遣し自らの目で確かめてほしいと申してい

るのだ。何よりも、礼儀を弁えておられる。条件次第だが、国交を前提に付き合つても良いのでは？」

カナタはリンスイから田中達に視線を移し、向き合う。

「EDF日本支部の方々よ。国交を開始するにあたり何を望む？観光に来た訳ではあるまい」

「第一に情報、第二に食糧や資源。我々はこの世界について余りにも何も知らない。この世界に付いて、可能な範囲で全て教えて頂きたい」

「ほう、食糧とな」

「はい。我が国は食糧需要は膨大です。勿論、貴国一国のみで対応可能であるという楽観的な考えは持つておりません。今後他国にも、食糧調達の交渉は行うつもりです」

「ふむ…貴国の食糧自給率は如何程か？」

「申し訳ありませんが、まだ答えられる段階ではありません」

一切顔色を変えない返答。答えの奥を読み取る事は出来ない。

「…国家転移と申されましたな。我が国が初めての接触であるか？」

「はい。今回の訪問が、転移後初の外交活動となります」

「ならば貴国は運がいい。いや、もしや神に祝福されているのかも知れませぬな。我が国は大地の神の祝福を受けている。穀物や野菜類が、

特段人の手を入れずとも生えてくるのです。貴国の食糧事情がどの程度にもよりますが、我が国ならかなりの部分を応じられると思いますよ」

「…ッ!？」

ピクリと、情報局員全員の表情が一瞬崩れる。

「……………それでは、E D F 日本支部は使節団受け入れの準備を迅速に準備致します。期限については、改めて」

「分かりました。外務卿、可能な限り準備を早くして差し上げなさい。大使についてはある程度権限を持たせて派遣するように」

「承知致しました」

会談後。

「…本当か否か、しかし決して無視出来る物でもない」

「資源もそうですが、それ以上に食糧事情は深刻な物ですからね。年々増加しつつある、化学食糧が原因と思われる健康被害と化学食糧特有の不味さ。これを部分的にでも解消出来るなら…」

「受けない手はない。しかし…「まりよく」とは何だろうか」

「この世界特有の言葉か、それとも…本当に魔法があるのかも知れませんね」

「まさか…とりたいがな」(フォーリナーの例もある…頭の隅に入れておくようにしておくか)

第4話 視察と会談

EDF日本支部とクワ・トイネ公国の初接触から1週間。

場所はクワ・トイネ公国 マイハーク港、外務局事務所前。

天気は快晴、気温も少し涼しい程度の理想的環境の中に、クワ・トイネ公国の外交団はいた。そして、彼らの前にはEDF日本支部より派遣された情報局員が1人。

「お集まりの皆様。本日は日本列島へ使節団として来訪頂けるとの事、喜びの極みです。私は今回の視察を可能な限り快適にお過ごし頂けるよう派遣された、情報局の田中と申します。何か不便な点があれば、遠慮なく申し付け下さい」

彼はそう言つて一礼し、その姿に使節団は毒気が薄まる。

が、その中の1人：ハンキ将軍は憂鬱な表情を浮かべていた。それに気付いたヤゴウが声を掛ける。

「ハンキ将軍、どうされましたか？」

「ああ、ヤゴウ殿…今は外務局出向の身、将軍と言うのはやめてくれたまえ」

「承知しました。それで、何か気にかかる事でも？」

「…今から船旅と考えると、どうしても気が重くてな…船旅は、想像するよりも良いもの

ではない……」

ハア……とため息を吐くハンキを見て、ヤゴウも思わず憂鬱な気持ちとなる。

彼らにとって、船旅とはいつ転覆するのかわからず、船内は光が入らないせいで暗く、更に通気が不足するせいで湿気もあり臭いも漂う。これだけでなく、帆船であるが故の船速の遅さによる長旅のせいで疫病が発生しやすく、食料も保存食だらけとなる。

正直な話、2人とも船旅に関してはロクな思い出が無い。故に、今回もロクな目に合わないだろうと覚悟を既に決めていた。

「今回は1日で着くと向こうは言っているがの……本当に1日程度なら我慢も短くなるが、日程に関しては何らかのやり取りのミスがあつたと思つている。あの海域を僅か1日で行くのは、到底無理じゃ」

「私も時間計算がおかしいとは思っています。ただ、相手は鉄竜クワ・トイネ側はファイターを「鉄竜」として認識している。を飛ばしています。もしかすると、我々の常識外れな速度が出せるかもしれません」

そうこう話している内に、まもなく時間となる。

一同は集合場所の事務所前から港に移動すると、其処には、島の様に大きい1隻の船があつた。

「デカイ……!!」

「帆が無いぞ!?!どうやって動くんだ!?!」

想像を超えた光景に呆然となる使節団を尻目に、田中は説明を開始。

「皆様、今回はあの船……「飛鳥Ⅲ」に乗船して日本列島に向かいます。本来ならこの港に接岸させようとしたのですが、残念ながら水深が浅く接岸不可能だった為、小船に乗って移って頂きます」

飛鳥Ⅲ。

その船はフォーリナー大戦の戦火によって大破、日本近海に沈没していた客船「飛鳥Ⅱ」をサルベージし、資材を流用して建造されたEDF所有の客船である。

全長237m、幅29.3mと飛鳥Ⅱに比べてほんの僅かに小柄な船体となったが、速度は40.2ノットと約2倍となっている。これはフォーリナー大戦後、開発された新型機関を採用された事により実現した。これだけに留まらず、甲板上には自衛用武装としてリーダー連動型自律式20mm対空連装砲が8基搭載されており、万が一の際には最低限の自衛が可能となっている。

飛鳥Ⅲは、フォーリナー大戦後も様々な理由で海を渡る市民達の為に、EDFが直接建造した客船の一つだが、これは「表向きの理由の一つ」に過ぎない。EDFの機密書類の一つに置いて、EDF所有客船の本当の艦種は、こう言われている。
市民脱出船、と。

これは特に日本支部やイギリス支部に於いて重要な事だ。10年前のフォーリナー大戦に於いて、奇跡的な勝利を掴んだ人類だが、それは文字通り奇跡の勝利だ。そして再びフォーリナーが襲来したその時、果たして日本列島やグレートブリテン島を防衛しきれる保証は何処にも無い。故に、万が一防衛不可能：日本支部やイギリス支部の放棄が決定された際、出来る限りの命を救い取る為に、市民脱出船（密船）の平均半数近くが日本列島とグレートブリテン島から2日で到達可能範囲内に配置されていた。

6月28日に発生した「転移現象」に於いて、EDF日本支部と共に転移されたのは飛鳥Ⅲを筆頭に6隻。その中で最も設備や自衛能力が備わっていた飛鳥Ⅲが、今回の視察に派遣された形となる。

なお、航行中も視察団からは見えぬ距離に「セントエレモ級イージス戦艦」と呼ばれる戦艦が2隻、飛鳥Ⅲを護衛する。

その後、使節団は飛鳥Ⅲが停泊している沖合から向かってきた3隻の小舟に乗り、飛鳥Ⅲに乗船。設備や広さに驚きながら、日本列島へと向かう事となる。

1日後。

「皆様、福岡市が見えてまいりました。九州、四国地方の中でも2番目に大きい街です最大の都市は、九州基地が存在している熊本市である。正面に見えるのは博多港です。博多港からはリムジンバス：大型の自動車に乗り、ホテル新日航まで移動して頂き、日本についての基本知識を学んで頂きます」

使節団は朝早くから起き、甲板から眼前に広がる日本の光景を眺め、そこに田中が今日の日程を説明している。

陸地が水平線に浮かんだかと思うと、あっという間に都市の輪郭がはつきりと見え、今では様々な建造物、巨大な橋や複数層に構成された巨大回廊までもが一望できる。

博多港に着岸後、一同はリムジンバスでホテル新日航に移動。そこで日本の基礎知識：信号システムや自動販売機、鉄道システムなどと言ったインフラを利用出来るようにする為の勉強会が開催された。

彼等からすると「科学」というのは未知数なものであり、それ故に好奇心は旺盛。田中に対していくつかの質問が飛んでくる。

「田中殿、此処は随分と発展しているようだが：首都は此処よりも発展しているのか？」
「はい。第一に人口がこの都市の比になりませんので、集合住宅：長屋のような家屋が立ち並んでいます。高層建築物も福岡市の建物よりも高く、道路や鉄道も効率的に運用

出来る様に網目状に広がっています。ただ、その分街並みそのものは、福岡市の方が綺麗だと個人的には思います」

「福岡市よりも発展しているのか……：軍隊を見学したいと思っっているのだが、無理じゃろうか？」

「軍隊の見学、ですか……：そうですね、少々お待ちを」

田中はスマホを取り出し、上層部へ連絡を取る。使節団達は、見たことがないスマホに視線が自然と集中する。

「了解しました、それでは失礼します。……失礼しました。確認した所、明日の昼頃に築城航空基地にて訓練が行われます。それで宜しければ、手配する事が可能です」

「おお、誠にすまんがお頼み申す」

「他に行きたい方は居られますか？」

「では、私も行きます」

ヤゴウが手を上げ、同行を意思を確認する。他の3人は市街視察に行く事となり、ハンキとヤゴウが訓練を視察する流れとなった。

(……しかし、何だ、この違和感は……？何か建物などが、妙に真新しく感じる……？)

翌日、EDF日本支部 築城航空基地。

訓練視察に来たハンキとヤゴウは、2人の為に設置された来賓室にいた。田中と同伴し、訓練内容に関する説明を行う予定だ。

(やつと、鉄竜の性能を間近で見られるのだな)

ハンキは内心でそう呟く。同行したヤゴウも鉄竜の性能には興味を持っていた。そしてなによりも、未確認騎の報告を裏付ける必要もある。外務卿側としてその任をヤゴウが担っていたのだ。

2人が緊張している中、訓練が始まった。ハンガーから4機のファイターが現れ、滑走路に移動する。

アフターバーナー起動。2基のエンジンから大推力を得たファイター達はあっという間に離陸速度に到達。離陸して上昇を続ける。ハンキとヤゴウの鼓膜を、エンジンの大轟音が刺激する。

「凄い轟音じゃのう…アレが、マイハークを飛んだ鉄竜か？」

「はい、その通りです。名前はファイターと言い、戦闘機…戦う為に作られた飛行機です。…まもなく、先程離陸したファイター達が切り返し、右側から時速850kmで進入してきます」

「なっ!？」

「何じやと!?!た、田中殿!!今時速850kmと聞こえたが、聞き間違いではないのか!？」
「間違いありません。時速850kmと言いました」

右側の空から、離陸したファイター4機が編隊を組んで近づいて来た。最初は無音だったが、やがて音が響き始める。

「何という速度…!!」

その時、ファイター4機は編隊飛行を保ったまま、垂直に近い角度で上昇を開始。主翼から白い雲を引きながら、青空へと上昇していく。直後、再度アフターバーナー。ファイター4機は短時間で青空へと姿を消した。

「…」

2人は、初めて見る戦闘機とその機動に、絶句する他無かった。

「まもなく、ファイターが戻って来ます。左側の空をご覧ください」

「え、もう!？」

「時速600kmで再び基地上空に進入し、旋回を開始します」

ファイター4機が、基地上空で大きく旋回、そのまま再度上昇を開始。

「凄まじい運動性能だ…しかもあの体勢から上昇まで…」

その後、ファイター4機は基礎的な飛行機動を行い、飛行訓練を終了する。

「…田中殿。あの…ファイターという鉄竜は、一体どれほどの速度が出せるのだ？あの様子では、全力飛行はしていません」

「最大速度は、マッハ4…音速、つまり音の伝わる速度の4倍です。但し、音速を超える衝撃波が出て地上に被害が出る可能性がある為、今回の訓練飛行では最大でも時速850kmに抑えておりました」

「……………」

翌日、ホテル新日航ロビー。

天気は晴れ、空気も澄んでおり、遠くもよく見える。というのも、フォーリナー大戦による環境汚染が転移によって大体が除去された為、日本の空気は一部を除いてとても澄んでいるのだ。

ホテルのロビーで待機していた使節団の前に、スーツを着込んだ田中が現れた。

「おはようございます。昨日はよく眠れましたか？本日は——」

田中が今日の予定を説明する中、ヤゴウは日本に於いて時を刻む概念がはつきりとしている事を実感していた。

腕時計が視察団全員に配られており、それは秒単位で時を刻んでいる。そんな代物を簡単に持ち運ぶ事ができるといふ事は、軍隊が時差なしの一斉攻撃を行う事がとても容易という事にもなる。軍隊運用に於いてこの効果は凄まじい物となる。そしてこれを誤差を殆どなく動かしている技術力も、彼なりに理解していた。(決して技術そのものを理解している訳ではない)

「田中殿、博多から大阪へは615km離れていると聞いていましたが…今日乗るリニアモーターカー高速輸送列車としての目的も兼ねて、2026年に九州と北海道まで開通されている。その為戦車輸送専用、資材輸送専用にかスタマイズされた専用列車も存在している。と呼ばれる乗り物は、地上を高速で走る乗り物という事は知っています」

「何か懸念な点が？」

「15時9分着、というのとは？分単位まで正確に計算できるのですか？」

「はい。災害や事故などと言ったイレギュラーが起きなければ、時間通りに到着します」

(…)「分かりました。ありがとうござま——」

その時、外から激しいブレーキ音。直後に衝突音が響く。

外を見れば、乗用車と歩行者の交通事故が発生していた。乗用車に轢かれた女性は、頭から血を流して倒れている。

「交通事故か…」

田中はすぐにスマホを取り出し、救急車を手配しようとする。

「マズい、早く治療しなければ!!」

「ヤゴウ殿、直ぐに救急の車が——!!」

が、ヤゴウが女性の様子を見て飛び出した。田中は制止しようとしたが、時すでに遅し。立场上、外国の使節団に怪我人の手当てをさせるのも問題がない訳ではないと判断し、救急車を手配しつつヤゴウを追う形で事故現場へ走る。

周囲には既に事故を目撃した者や、事故の音を聞いた者などによる人だかりが出来ていたが、人々をかき分けてヤゴウは怪我人の女性を診る。

女性は意識を失っており、頭に来た傷口から、脈打つたびに激しい出血が発生している。

「これはいかな………」

ヤゴウは女性の頭……出血部分に両手をかざし、何かを呟く。すると、ヤゴウの両手が淡い光を放ち始める。

(なん、だ……?)

変化はそれだけでは無い。女性の頭部の傷口が、まるで時を戻るかのように無くなっ
ていく。

（は、あ…!? 待て待て待て、傷口が塞がっていく!?）

「何だアレ…!? 見たか、今の!?」

「あの人が何か眩いたら、傷があつという間に…まるで魔法…!」

その光景を見ていた野次馬からも、思わず声が飛ぶ。ヤゴウが女性の傷口が完全に無くなった事を確認すると、周囲の人々の表情を見て顔を傾げた。

「…? まるでも何も、魔法ですよ? 何か珍しい事でも?」

その一言が、ある種の爆弾発言だった事は言うまでもあるまい。

（…魔法が実在する世界…まるでファンタジーだ…いや、最早ファンタジーですらないんだな。）

魔法の存在は直ぐに大阪本部に報告に上げられる事となり、それが1人の兎の耳に聞こえる事になるのにそう時間は掛からなかった。

「……………」

ジイ、とパソコンの画面を見続けている篠ノ之束。その画面には、件の魔法使用時に動画を撮影していた市民から提供を受けて入手した動画が映っている。

「……………」

何度も何度もループ再生し、そのシーンをじいっくりと見た後、彼女は唐突に叫んだ。「ふっざけんなファンタジイイイイイイイ!!」

彼女はそれはもうキレた。痲癩を起こす子供のようにキレた。

「惑星構造が天体化学に喧嘩売ってるかと思つたら、今度は人間が物理法則やらなんやらに喧嘩売り始めたとかマジどうなつたんのさあ!!!この世界ホントふざけてるよね!!束さんの常識はもうボロツボロだよ!!返せ!!さつきまで天体化学の異常の仮説を作つてた時間を返せ!!魔法も実在するとかもうホントになんでもアリじゃんコンチクシヨー!!!」

「ハアアアアアアもおおおさああああああ…」

幾らEDF随一の問題児であつても、天災である束も此処まで荒ぶる事はそうそうない。が、しかし、こればかりは勝手が違った。

フォーリナーテクノロジでさえ、テクノロジを発動する際に何かしらの「装置」が無ければならないという絶対条件が存在していた。マザーシップの天災的火力この言いは決して比喩などでは無く、戦闘形態に入ったマザーシップは文字通りの天災的火力でEDFを殲滅させんとした。しかし、それはたった一人の兵士が穿ち、地に墜ちたのだ。でさえも巨大砲台があつて初めて出来る事。幾ら人類の既存技術を超

越しているフォーリナーテクノロジーでさえも、その条件だけは共通だったのだ。

しかし、これはソレに当て嵌まらない。映像のそれは、明らかに何の道具も無しに、他人の傷を遠隔で治療してのけたのだ。

フォーリナーテクノロジーでさえも、そんな芸当は不可能だ。

だからこそ、彼女は此処まで荒ぶった。フォーリナー大戦で塗り替えられた常識でさえも、映像の光景は「あり得ない」。しかしそのあり得なかった事が起きてしまっていたのだ。

言いたい事を言っただけでスッキリさせ、机に突っ伏す。そしてクワ・トイネ公国に関する暫定報告書の内容を思い出した。本来の役職では、束がその報告書を見る事は権限的に不可能である。が、彼女は全人類的に随一の頭脳を持っており、転移現象に関わる情報に関しては大石司令直々に特別権限が与えられ、閲覧が可能となっている。

（そーいや、報告書の中に向こうが「大地の神の祝福を受けている」とか言っただけ……）

（え待って？まさかこの世界だとマジでいるの？神が？……え、ヤバくない？）

（いやいや、流石に比喻表現とかそんな感じだよ、うんそうだよ。…え、でも魔法と

か実在してるんだし……えっ？ヤバイヤバイ束さんの頭のキャパシティが混乱してパーンしちゃう）

（と、とにかく今すぐ報告書に書く内容を纏め始めよう。これホントに大真面目にやらなきゃヤバイ奴だ）

束は閃いてしまった事に顔を青ざめながらも、メモとペンを取り出して書きまとめていく。

…本当の所は「比喻表現」以外の何物でも無かったのだが、魔法の实在というインパクトの前に、本当にそうである可能性が捨てきれなかったのは、仕方ない事だ。

更に翌日。

大阪本部 情報局の一室にて、実務者会議が始まった。

1人の眼鏡をかけた男が、向かい側に座っているクワ・トイネ視察団に向けて話しかける。

「EDF日本支部情報局員の日村です。まず単刀直入に申し上げますと、我々は今、食料を欲しています。必要項目は書類上から――」

双方の書類にはE D F日本支部が欲している天然食料の必要項目が書かれていたが、視察団が日本語を読む事が出来ないという情報は既に共有済み。日村は口頭で項目を読み上げていく。

「総量が…年間1800万t!？」

「貴国は農業が盛んな国と伺っております。更に食料自給率が100%を遥かに上回っているということも。ですが、流石に我々も貴国の一国だけで賄い切れると思うほどに樂觀的な考えは持っておりません。このうちどれほどが可能であるか、知りたいのです。勿論即答は求めておりません」

ヤゴウは日村が口頭説明した項目と数字を書類にメモしており、それを今一度確認する。

「そう、ですね…正直な話、項目の多さに戸惑っています。…まず、水産資源は難しいです。それに、このコーヒー豆というのはよく分かりません」

「そうですか…」

「しかし…それ以外の項目、そして希望量なら…」

「年間1800万t、我が国一国だけで賄えます」

「――」

絶句。

もしくは、時が止まる程の衝撃と言った方が良いか。それ程にその事實は、EDFD本支部にとつて凄まじい事だった。

そもそも年間1800万tという量は、3600万の市民や兵士を1年間消費する量よりもやや多い、言わば「理想的数値」。ぶつちやけた事を言えば吹っかけに近い数値だった。

なのに、だ。ヤゴウは、クワ・トイネ公国は「その量を輸出する事が出来る」と断言したのだ。

これだけでも国交開設及び通商条約締結の価値は値京金に膨れ上がる。更に交渉をして、クワ・トイネ公国の土を手に入れれば、未汚染の大地を広げる事も決して難しくは無い。

確かに、日本列島復興計画が最低でも十年単位で前倒し出来る。

「但し、です。これ程の量を定期的に運び出す手段を我が国は持ち合わせておりません。内部に大穀倉地帯があるのですが、そこから港へ運ぶ人員も予算も足りないのです。それに港へ運べたとしても、それ程の量を積載し、輸送する人員と船さえも足りないのです」

「ではその問題が解決し、クワ・トイネ公国の許可が得られれば。食料の輸出は可能なのですね？」

「はっ」

この時点で、EDFの情報局員は既に方針を決定していた。故に、切り出しも極めて速い。

「前島です。クワ・トイネ公国さえ宜しければ、湾岸設備の増強及びクワ・トイネ公国内の穀倉地帯へのインフラ：つまり輸送手段、この場合は鉄道ですね。これらを我々の資金で整備する事で、食料輸出の対価をする事が可能です。如何でしょうか？」

この提案に、クワ・トイネ公国視察団は騒めいた。水と食料はタダ同然で調達出来るクワ・トイネ公国で、その食料を輸出するだけで国が強力に潤い、港と鉄道まで整備してくれる。彼等にとってこれ程の好条件は無かった。

その後は、他にもいくつかの項目を協議。双方共に調印を前向きに検討し、会議は終了した。

10日後、以下の内容でEDF日本支部とクワ・トイネ公国は国交開設及び通商条約を締結した。

1. クワ・トイネ公国はEDF日本支部に必要量の食料、水、土を輸出する。
2. クワ・トイネ公国のマイハーク港の拡充、マイハーク港から穀倉地帯へのインフラを整備する。

3. 為替レート及早急整備を行う。

4. EDF日本支部は食料一括購入の見返りとして、1年間はクワ・トイネ公国内のインフラ整備を行う。その後は為替レートによる食料額に応じた対応を行う。

5. EDF日本支部、クワ・トイネ公国両国の不可侵条約締結に向けた話し合いを継続する。

こうして、EDF日本支部はクワ・トイネ公国と友好関係を結び、クワ・トイネ公国は強大な軍事力を誇る国家との友好関係の獲得に、EDF日本支部は必要資源の補給に成功した。以後EDF日本支部とクワ・トイネ公国は、運命共同体となって動乱に挑む事となる。

第5話 変化の光、戦乱の影

EDF日本支部とクワ・トイネ公国が国交を締結してから、およそ1ヶ月が経過した。クワ・トイネ公国は、EDF日本支部との国交を隣国クイラ王国と共に結んでから、急速に発展している。

クワ・トイネ公国からは食料を、クイラ王国からは地下資源を輸入していくEDF日本支部は、その対価に両国へインフラを輸出。(両国から見れば)様々な超技術を惜しむ事なく投入していくEDF日本支部。

実際、EDF日本支部は国交締結直後から工作部隊や自前の軍用造船所のみならず、絶大な支援の元に民間の建設会社、造船会社、鉄道会社にクワ・トイネ公国開発の協力を依頼した。貴重な天然食料さえも報酬の一つとして提示した結果、極めて多くの企業がクワ・トイネ開発事業に参入し、凄まじいマンパワーと技術力によって、僅か3週間でクワ・トイネ公国 マイハーク港から大穀倉地帯へのインフラを完全に整備。その間に高速建造された複数隻の大型タンカーがクワ・トイネ公国と日本列島を往復し、両国に様々な物質を届けている。結果、クワ・トイネ公国の国内外の流通が極めて活発化し、今までとは比較にならぬ程の発展を遂げるだろうという試算結果が出ている。

そしてクワ・トイネ公国は武器の輸出も求めたが、EDF日本支部は武器の輸出は許しなかった。なんでも「他国が扱うには余りにも危険」という事らしい。ならば各種技術の提供も求めたが、此方も「機密などに抵触する箇所が多数ある」として、EDF日本支部が取り扱う最新の技術は提供されなかった。しかし提供されてきた前世代的な技術でも十分な物ばかり。様々な新技術のサンプルを前に、經濟部の担当者は「国がとつてもなく豊か」になると言った。

このようにクワ・トイネ公国は凄まじい活気に包まれる事となったが、しかし。EDF日本支部は、この比ではなかった。

それは何故か。一重にそれは「安心安全で、尚且つ美味しい飯がたくさん食べれるようになった」からだ。

度々繰り返す事となるが、フォーリナー大戦後、世界は深刻な食料不足に陥った。穀倉地域は全滅し、畜産業は99.9%が全滅。天然食料のみでの食料自給率は5%どころか1%にも満たない事態となった。日本列島の天然食料生産量が僅か十数tなお、これは天然食料を生産する為に必要な量を含めた量である。である事から、その凄まじさは分かるだろう。化学食料が開発されるまでの半年間、人々は僅かな食料を取り合い、

時には人類同士での戦闘にさえも発展した。フォーリナー大戦後の人類減少の3%はその内戦による犠牲者なのだ。化学食料の開発後は食料不足の問題は起こる事は無くなったが、別の問題が発生した。

化学食料は添加物を山のように使用している為、天然食料と比べると不味い。その上身体に非常に悪いのだ。

しかしその問題があっても、人々は化学食料を食べる他ない。天然食料が再び充分に行き渡るようになるのは90年後とも言われており、天然食料は安いものでも100万円もの超高価格。市民どころかEDFの士官でも手が届きにくい代物と化してしまっている。故に天然食料を一食でも食べる事が出来れば、それは一種のステータスでもあった。

しかし転移後、クワ・トイネ公国産の天然食料が文字通り山のように輸入されてきた。この夢のような出来事に、EDF日本支部に住まう全員が狂喜した。天然食料が民間に放出された日など、フォーリナー大戦を生き残ってきた古参の兵士をもつてして「百鬼夜行の地獄絵図」と言わしめた。天然食料が超低価格で購入できるようになった為、市民達は勿論、兵士達も財布の紐を盛大に緩めて買い漁り、およそ10年ぶりにもなる天然食料の美味を噛み締める事が出来るのだ。あらゆる人間が理性を忘れ、天然食料を^奪買い漁った。そして家に帰り、調理した天然食料の味に、思わず涙を流す者さえいた。

天然食料だけに留まらず、EDF日本支部はクワ・トイネ公国から無汚染の土と水、植物の種などを輸入している。

それらの目的はただ一つ。「国土の復興」だ。日本列島では今も、国土のおよそ50%がフォーリナー大戦によって焼き払われ、更にその内の23.1%が原子力発電所の崩壊による放射能汚染、毒ガス兵器フォーリナー大戦中期になると、人類支配圏外の地域：特に巨大生物が多数存在する地域が発見された際、EDFや各国軍は対巨大生物に超高濃度の毒ガス兵器や環境汚染兵器を投入していた。無論フォーリナー大戦前に各国が締結していた「化学兵器の開発、生産、貯蔵及び使用の禁止並びに廃棄に関する条約」などの条約など、もはや有名無実化していた。などによる深刻な汚染が発生していた。EDFとしてもこの惨状を放っている訳ではなかったのだが、地球各地がこのような状態。除染をしても人も予算も道具も全く足りず、トドメに対フォーリナーの防衛線構築や市民の衣食住提供に、EDFのリソースは尽く吸い取られてしまっていたのだ。しかも汚染を取り除いたとしても、そこに元の自然は戻らず。結局は汚染が無くならなかった、貧困すぎる荒廃した大地となるだけ。市民達も折角手に入れた安寧の地から離れたがらず、結論から言うと国土復興は下火同然だった。

が、此処にクワ・トイネ公国の栄養満点な土と水、そして植物の種が入った。勿論、国土に何かしらの悪影響を及ぼさないかしっかりと調査を行なって確認している。

これによつて除染大地はクワ・トイネ産の大地へと少しづつ切り替わる事になる。相変わらずその規模は、汚染国土の範囲と比べたら小さな物だが。しかし「復興計画が十年単位で前倒しに出来る」と、国土復興局の局員達は旧復興計画書を破り捨て、咽び泣きながら新しい復興計画の立案を書き上げる過労な毎日を送る事となっている。

こうして、より良い関係を築き上げつつある3つの国家。

しかしいつの時代、どんな場所であろうとも、「悪意」を持った者は存在するものだ。

クワ・トイネ公国の隣国、ロウリア王国。

元々は中規模国家の一つであつたが、侵略戦争を繰り返していった結果、現在ではロデニウス大陸の西半分を領土とし、人口3880万人にも達する大国となつた。

ロウリア王国は人間至上主義を国是としており、純粋な人類種のみが住まう事を許可している。逆に人類種ではない者達：エルフ、ドワーフ、獣人族などと言つた者達はロウリア王国では「亜人」と侮蔑し、醜い生き物であると迫害。亜人殲滅をも国是として
いる。

その為に、亜人比率が高いクワ・トイネ公国及びクイラ王国との関係性は悪く、国境は常に緊張状態に置かれていた。

そんな王国の王都 ジン・ハークの中心にある城の一室。春の夜の中、明かりの炎の揺らぎがいくつかの人影を作る。

今から行われるのは、王の御前会議。ロウリア王国の行く末を決める、最高会議の前に、ロウリア王国国王 ハーク・ロウリア34世を筆頭に、あらゆる重役達が一堂に会している。その中に、真つ黒なローブを着込んだ怪しい者も混ざり込んでいるが、それを指摘する者はいない。

ロウリア王国宰相 マオスが進行役として、言葉を紡ぐ。

「これより会議を始めます。まずは国王より、お言葉があります」

「…皆の者、これまでの長い準備期間、ある者は厳しい訓練に耐え、ある者は財源確保に寝る間も惜しんで奔走し、ある者は己の命を賭けて敵国の情報を掴んで来た。皆、大儀であった。亜人…害獣どもをロデニウス大陸から駆逐する事は、前々代からの大願である。その意思を、大願を叶える為に諸君らは必死に取り組んでくれた。その働きに、まず礼を言う」

ロウリア34世が軽く頭を下げた後、話を続ける。

「遂に全ての準備が整った…諸君。会議を始めよう」

会議室は静寂に包まれる。前々代、つまりは軽く考えても100年前もの前からの悲願が遂に達成される、ある意味では最終戦争の直前。それは極度の緊張感となり、この場を支配した。

進行役のマオスは、今戦争の運営責任者である將軍パタジンに向けて話し始める。

「まず、ロデニウス大陸の統一は目前です。しかしクワ・トイネ公国とクイラ王国の間には強い絆があり、それは同盟を結んでいると言つても差し支えないと思われます。片方に戦争を仕掛けた途端、もう一国も我々に宣戦布告をする可能性が非常に高い。つまり、今回の戦争は2国を同時に敵に回す事となります。將軍は、2国を相手にしても勝てる見込みはありますか？」

その問いに対して、將軍パタジンは自信を持った口調で応える。

「二国は農民の集まり、もう一国は不毛の地の貧国。数も質も我が方が圧倒しており、結束が高くても我々の軍の前には消し飛ぶのみでしょう。負ける事は、まずありませぬ。詳しくは会議後半にて詳しく説明いたすが、ご安心なされよ、宰相」

「分かりました」

「だが宰相殿、1ヶ月ほど前に接触してきた……イーディーエフ、だったか？その国に関する情報はありますか？」

実はEDF日本支部は、1ヶ月ほど前にクワ・トイネ公国とクイラ王国との国交を開

始した直後にロウリア王国とも接触していたのだ。しかしロウリア王国側はクワ・トイネ公国とクイラ王国との国交があるとして、EDF日本支部は敵対勢力と判断。門前払いしていた。

「クワ・トイネ公国から北東1000kmの沖合に出来た新興国家との事です。距離も1000kmと離れている為、軍事的影響は無いでしょう。それに奴等は我が国の竜騎士団とワイバーンを見て「初めて見た」と驚いていました。竜騎士の存在しない、取るに足らない国でしょう。情報はあまりありませんが」

ロウリア王国側は知る由も無いが、余りにも致命的な勘違いがあった。

EDF日本支部情報局員は、確かにワイバーンを見て驚いた。人は未知のものに驚かすには居られないから当然の事であるが、ロウリア王国はそれをみて致命的な勘違いをしてしまった。

「彼の国は大した軍事力を保有していない」。

これは余りにも致命的。しかしそれを知らない以上、彼等はEDF日本支部を侮って会議を進める。

「そうですか。ならクワ・トイネ公国がイーディーエフに助けを求めても大した事はありません」

「しかし、我が代で遂に…遂にこのロデニウス大陸が統一され、忌まわしい亜人どもを絶

滅出来ると思うと、余はとても嬉しいぞ」

ハーク・ロウリア34世が嬉しそうに発言すると、横から薄気味悪い声が口を挟んだ。真つ黒なローブを着込んだその人物は、第三文明圏列強国 パーパルディア皇国の使者である。

「大王様、統一の暁には、あの約束もお忘れなく……ククツ」

「分かっておるわ！」（第三文明圏外の蛮族と思つて馬鹿にしおつて……!!ロデニウス大陸を統一したら、国力をつけた後にフィールアデス大陸にも攻め込んでやるわ）

「コホン……將軍、作戦概要説明をお願いします」

その後、將軍。パタジンによる作戦説明が始まった。要約すると、以下の通りとなる。

1. 今戦争における総兵力は50万。内40万がクワ・トイネ公国侵攻軍であり、残りの10万は本土防衛用である。

2. 初戦はクワ・トイネ国境から近い人口10万人の都市 ギムを強襲制圧。兵站は現地調達。（クワ・トイネは豊富な食料に恵まれており、本国からの補給を必要としない為）

3. ギム制圧後は東方55km先にある城塞都市エジエイを全力攻撃。クワ・トイネ公国内で最も堅牢な都市エジエイさえ陥落出来れば、今回 戦争の勝利は決定的となる。

4. 航空戦力はロウリア王国のワイバーンのみで対応可能。

5. 並行して海から艦船4400隻の大艦隊でマイハーク北岸に上陸、経済都市マイハークを制圧。マイハークを制圧すれば、食料をクワ・トイネ公国に頼り切っているクイラ王国は脅威ではなくなる。

「クワ・トイネ公国の総兵力は僅かに5万人。さらに言えば、即応兵力のみなら1万にも満たぬ数であると考えられます。今回準備した我が方の40万の兵力をぶつければ、仮に質が上回っているように、小賢しい策を弄しようが、圧倒的物量の前には無意味です。この6年間の準備が、実を結ぶでしょう」

「そうか………今宵は、我が人生最良の日だ!!クワ・トイネ公国並びにクイラ王国に対する戦争を、許可する!!」

こうして、ロウリア王国の御前会議は終了し、クワ・トイネ公国とクイラ王国に対する戦争が決定された。

クワ・トイネ公国にある、EDF日本支部連絡館。

クワ・トイネ公国との国交開設後、EDF日本支部連絡館の代表として現地に留まる

事になった情報局員の田中の朝は、突如やってきた職員の記事によって一変した。

その職員によると、クワ・トイネ公国外交担当官が火急の要件があると、アポイント無しでE D F日本支部連絡館を訪れたのだ。その報告に、田中は僅かに残っていた眠気が吹き飛んだ。転移を経て、混乱を避けるために一応としての国家の体をとっているE D F日本支部だが、それ故に国と国とのやり取りを担当するものがアポイント無しで訪れる事など、相当な事態が起こらなければまず起こり得ない事だ。嫌な予感を感じたりつつも、田中は準備を早急に済ませて応接室へと入った。室内には、クワ・トイネ公国外務局長のヤゴウが焦燥の表情を浮かべていた。

「お待たせしました」

「田中殿、急な訪問となつてしまい申し訳ありません。至急お伝えしなければならぬ事態が発生しました」

「それは一体？」

「我が国の西方にロウリア王国があるのは既にご存知だと思います。多数の方面から得た情報を精査した結果、ロウリア王国が我が国に対し、侵略する事がほぼ確実となりました」

「……戦争、ですか」

「はい。既に国境20km付近にある町ギムの西側に、ロウリア軍の大群が集結しつつ

あります。ロウリア王国と戦争になれば、貴国に対して約束していた量の食料品の輸出は不可能となります…条約を反故にするのは大変心苦しいですが…」

「…分かりました。この件は直ちに本部に報告します。現段階では確約する事は出来ませんが、援軍を派遣出来るよう、要請しましょう」

「ありがとうございます!!」

「…以上が、つい先程入ってきた最新の情報です」

EDF日本支部にて緊急で開かれた、重役会議。その内容は、皆が頭を抱えざるを得ない物なのは、言うまでもない。

「…戦争、か…」

「…世界は変わっても、人間同士が争うのは変わりありませんね…」

「クワ・トイネ公国とクイラ王国、ロウリア王国の戦力差は？」

「情報によると、ロウリア王国軍の戦力が圧倒しているとの事です。仮にクワ・トイネ公国とクイラ王国が連合したとしても、とても耐えられるものではないと」

「我々が介入する他に無い、か」

「…」

沈黙が、流れる。

「…人類内戦とこの戦争、何方がマシなんでしょうね」

「人同士の戦いに、救いなどある訳が無いだろうに。最早我々には道は一つしかない。此処で介入せず、クワ・トイネ公国とクイラ王国が滅ぶ日など——」

「日本列島は、今度こそ滅びるぞ。しかもそれは、フォーリナーではなく人間の手によってだ」

そう。クワ・トイネ公国とクイラ王国の滅亡は、EDF日本支部にとってそれ程に大きい問題だ。

もしクワ・トイネ産の天然食料の供給が途切れれば、モラル・ハザードの発生は不可避との推測が出ている。冗談でも比喻でもなく、3国は「運命共同体」なのだ。

EDF日本支部が介入してもしなくても、間違いなく大量の血が流れ命が失われる。これは最早避けようがない事実。

ならば。

「直ちに第二種出動準備態勢デフコン⁵で例えると、通常より高度な防衛準備状態を指す。

に移行。対ロウリア王国戦計画を直ちに立案せよ」
せめて、赤の他人の血だけを流す。

数日後、クワ・トイネ公国 EDF日本支部連絡館。

その一室、来賓室にて。情報局員の田中とクワ・トイネ公国外務局長のヤゴウが居た。
「まず、結論から申し上げます。EDFは、ロデニウス大陸への軍隊派遣を決定しました」

「おお…!!ありがとうございます!!」

「つきましては、対ロウリア戦に関する提案があります」

「聞きましょう。我々が出来る全力を尽くします」

「では…まず貴国の情報では、侵攻軍はおおよそ40万。これを退ける規模を派遣するとなると、我々であっても侵攻までに間に合うかどうか、確約することは出来ません。しかし間に合わなければ、ギムの軍と民達は侵攻軍に蹂躪される可能性は極めて高い。…此処まで宜しいでしょうか?」

「…はい」

「そこで、
です」

「ギムを、40万の命と引き換えにしましょう」

第6話 Counter (カウンター) Over (オーバー) Kill (キル)

西暦²⁰²⁸年¹⁰月⁹日
 中央暦1639年4月12日、ロウリア王国はクワ・トイネ公国に宣戦布告無き侵略を開始した。

投入兵力は50万。内40万が、東方征伐軍としてクワ・トイネ公国へ侵攻する大戦力。対するクワ・トイネ公国の総兵力は5万、それも即応兵力だけになると1万を割る、戦力比50:1以下のワンサイドゲーム。

更に、その侵攻を率いるはロウリア王国三大将軍の一人、パンドール。その副将には極めて冷酷なサディストとして味方からも恐れられるアテムが配置され、更に第三文明圏では最強の戦力単位として恐れられる「ワイバーン」を500騎を用意。これは、クワ・トイネ公国及びクイラ王国が保有しているワイバーンの数をも凌駕している。

トドメに、ロウリア海軍から総数4400隻もの軍艦が出撃。目標をクワ・トイネ公国最大の経済都市マイハークに定め、陸海空全てにおいて、クワ・トイネ公国を破滅的に侵略する構えだ。

これは最早、戦争とは呼べない。蹂躪、殺戮、無慈悲。この表現が正しい程に、彼我

の戦力差は圧倒的かつ悲劇的に劣っていた――

ロウリア王国軍が。

中央暦4月12日午後、クワ・トイネ公国西部 ギム。

その街はロウリア王国との国境にある、人口10万人ほどの……特にこれといった達筆すべき特徴もない、平凡な街。しかし、それであるが故に、ロウリア王国軍の第一侵攻地点として指定されてしまった、哀れな街。

そこに向かって、ロウリア王国国境から、ロウリア王国軍が雄叫びと共にギムに向かって侵攻する。その戦力は、通常歩兵2万、重装歩兵5000、特化兵第三文明圏に於いては、破城槌や投石機の扱いに特化した兵士を指す。1500、遊撃兵1000、魔獣使い250、魔導士100、竜騎士ワイバシ150。総数3万、副将アテムに率いられたロウリア王国軍の先遣隊だ。

はつきり言ってロウリア王国から見ても、一開戦でこれ程の規模を投入するのは過剰を通り越して異常なのだが、しかし本国は先遣隊にそれ程の価値を期待していた。その

事実を今、より重く実感しているアデムは、緊張よりも嬉しさが勝っていた。

これ程の戦力であれば、ギムは1時間も保たずに陥落させる事が出来る。

そうすれば、後はオタノシミの時間だ。好きに略奪し、好きに陵辱し、好きに拷問し、好きに蹂躪する事が出来る。

さあ何をしてやろう、さあどう甚振つてやろう。思考の片隅にそんな事を考えていたが、ふと気付く。

(……………おかしいな。余りにも静かすぎる)

そう。今、ロウリア王国東方征伐軍先遣隊はギムに向かって侵攻してきている。それは既にギムの手前にあるクワ・トイネ公国軍の野営地の視界に入っているにも関わらず、何もしアクションが見えない。

(これは、恐らく……)

アデムの中に浮かんだ、一つの仮説。結果は、正解だった。

ロウリア王国東方征伐軍先遣隊が見たのは、誰一人として存在しない、正しく無防備都市化したギムの姿だった。

「アデム様、やはり搜索しても誰一人として見つかりません」

「そりやそうだろうな。全く、亜人とはいえず、そこまで知能は低い訳でもないか……」

ため息を吐く。侵攻自体は無傷で進められているから良いが、期待したオタノシミは後にお預けにされ、アデムは少々気分を害していた。恐らくギムの民や軍は、ロウリア王国軍の侵攻に気付いて前もって逃げていたのだろう。所々に慌てた形跡こそあるが、それ以外に特にこれといった違和感もない。

「それで、他には？」

「建物から食料や物資を集めております。物は元々多かつたのか、それとも持たずに逃げたのか、思った以上に多く集まっています」

「ふむ……」

さて、今後の予定をどうするか。本来ならばギムは死体の山を築き上げる予定だったのだが、せつかく無傷で手に入ったのならば有効活用したい。少し思考を回し、判断する。

「本隊に連絡を。『ギムは既に放棄され、先遣隊はギムの無血占領に成功。侵攻の足掛かりとする事が可能となった為、本隊の布陣をギムに移動する事を提案する』と」

「了解致しました」

この世界特有の通信手段「魔導通信」によって即時に届けられた情報と提案に、東方征伐軍司令のバンドールはこれを了承。37万の本隊をギムに移動し、1日かけて本陣の設営を行った。流石に全軍が入れる規模の街ではなかったが、しかし野営よりはしつ

かりと休む事が出来る。明日、4月14日には先にある城塞都市エジエイを攻撃する。クワ・トイネ公国も流石に城塞都市は放棄せず、そこでギムに駐屯していた軍と共に防衛線を張っているだろう。そうなれば、幾ら此方が数を圧倒していてもそれなりに激しい戦いになるかもしれない。

じっくりと兵を休ませ、次なる戦いに備えるのも、将の仕事だ。

「…此方スカウト1。熊は蜜壺に頭を入れた。繰り返す、熊は蜜壺に頭を入れた」
『此方本部、了解しました。着弾に備えて下さい』

中央暦4月13日、午前10時24分。

クワ・トイネ公国マイハーク港より北北西におよそ20kmの海岸線近く。そこに、12の鋼鉄の軍艦が停泊していた。

彼等の呼称名は、「第7機動艦隊」。

EDF日本支部より、クワ・トイネ公国の防衛及びロウリア王国の攻撃の為に派遣されたEDF派遣部隊の総軍だ。

艦隊布陣は、アイオワ級フリゲート艦及びセントエレモイジス戦艦が6隻ずつ、そして上陸部隊1個大隊。

此処で、軍艦の解説に入るとしよう。

まずは、アイオワ級フリゲート艦。

アイオワ級フリゲート艦は、ぱつと見の外見を見るとかつてアメリカ合衆国という国家が生み出した「アイオワ級戦艦」と勘違いする人が出るだろう。それは完全に間違っているという訳ではない。設計段階でアイオワ級戦艦を参考に設計された為、まるでアイオワ級がスケールダウンしたような印象を持つのだ。

全長は241m。武装は28cmレールガン3連装砲3基9門、12.7cmレールガン連装砲8基16門、20mmレーダー連動式ガトリング砲80基。

…これだけの武装しか積んでいない。これはアイオワ級フリゲート艦に求められた能力にある。EDF海軍は、フォーリナー大戦の経験から「無数の飛行ドローンを如何に効率的に迎撃出来るか」を優先課題とした。フォーリナーの戦力は質のみならず量も圧倒する。EDF海軍の主敵はフォーリナーの飛行戦力であり、無数の敵に積載数がどうしても限られるミサイルを乱発しては、あつという間に弾切れになる事実、

フオーリナー大戦時に人類が保有していた軍艦は、ほぼ全てがミサイルを主武装とし、艦砲や機銃は極めて少なかった。それ故に、幾千幾万と群れを成してやってくる飛行ドローンの物量に圧殺され、尽く沈んで行った。ならば弾薬の要らないレーザー兵器を搭載すると、今度はレーザー兵器特有の困難なメンテナンスが足を引っ張る。歩兵用装備や飛行兵器ならこの事は特に問題視されないが、艦艇となると話は別だ。海軍の艦艇は一定期間以上の無補給戦闘を前提に設計する事を求められていた為、メンテナンスが困難な兵器を、特に量産艦に搭載するのは避けるべき事だった。EDF海軍は考えに考えた結果、其々が中途半端な設計となるより、「それぞれの目的に重視もしくは特化した艦を設計、量産すれば良い」というある意味では割り切った考え方をする事にした。アイオワ級フリゲート艦は対飛行戦力に特化した、艦隊の直衛艦として量産される事になったのだ。

対してセントエレモイージス戦艦。

アイオワ級フリゲート艦とは真逆に、セントエルモ級イージス戦艦は対マザーシップ及び機甲戦力を主目標とした戦艦だ。EDFが誇るイージス戦艦であり、ベースはイージス艦であるものの、あらゆる状況に対応するように様々な改造が施されている為、原型はあまり残っていない。船体は三胴船型と波浪貫通タンブルホーム船型を掛け合わせたような形状になっている。その全長は全長310.1m、武装は38cmレールガ

ン連装砲7基14門、連装型35mm CIWS 24基48門、8連装水平ミサイル発射機9基、ミサイルVLS 72基を搭載。装甲はマザーシップの主砲を除く攻撃に有効的に耐える事が可能。最大速力は40ktと、かなり高速。更にヘリやVTOL機を離発着させる小型飛行甲板まで装備しており、EDF海軍の主力艦として採用されている。

そして何よりの特徴は――

「本部より第1艦隊全艦に入電。『熊は蜜壺に頭を入れた』」

「続いて第一艦隊司令より、『攻撃用意』の命令です」

「テンペストA0、用意」

「了解、後部ハッチ開放します」

輪形陣の中心に陣取る6隻のセントエレモイジス戦艦、各艦の船尾に存在する大型ハッチが開放。内部に格納されていた1本の発射台が展開され、全長20m、90度の角度で完全固定。

「発射台固定確認。テンペストA0、組み立てを開始します」

オペレーターの操作によって、発射台のほぼ直下にある空間圧縮搭載の格納庫からレールに乗り、ミサイルの弾頭のみが展開し、発射台のおよそ12mで一時固定。続いて燃料部が格納庫から発射台に展開され、弾頭が降下して燃料部に接続。内部ボルトと

内部溶接機構が自律起動し、確実に弾頭と燃料部を接続。全長12mの巨大ミサイルが完成する。

「テンペストA0組み立て完了。データリンク正常、カウントダウン同期正常、オールクリア」

「目標、ロウリア王国侵攻軍。ロフテッド軌道比較的高い軌道を取る軌道で、終末速度も上がるために迎撃されにくい。しかし位置エネルギーを稼ぐ必要があるため、射程は比較的短くなるで打ち上げます」

「カウントダウン開始。10、9、8、7、6」

ロケットブースター点火。膨大な推進力を生み出す炎が噴き出し、煙が発射台周辺を覆い出す。

「5、4、3、2、1、^発ロンチ!!!」

瞬間、6つの焰の矢は全ての束縛から解き放たれた。ロケットブースターによる推力は僅か十数秒で音速を超えて轟音を上げ、煙を吐きながら空へと消えていく。

テンペストA0。それはセントエレモイーズ戦艦専用の、対マザーシップ兵器の一つとしても開発されたミサイル。対地上用特殊サーモバリック弾頭と対フォーリナー装甲重徹甲弾頭の2種類が存在している。欠点として余りにも巨大過ぎてそのままでは圧縮空間に格納する事が出来なかつたが、兵器開発部は敢えて

ミサイルを2つに分割した状態で格納し、発射準備時に初めて組み立てるといふ変態的な発射方法を開発し、コンパクトな搭載を可能にした。

その威力を、ロウリア王国東方征伐軍は体感するだろう。そしてテンペストA0は、フォーリナー大戦前ならば恐らくこの二つ名で呼ばれていただろう。

Intermediate—Range Ballistic Missile。
日本語にして、「中距離弾道ミサイル」と。

ギムに本陣を敷いたロウリア王国東方征伐軍。

10万が住んでいた街に40万の軍人を押し込めるのは流石に無茶で、半数近くは郊外に陣を張っているが、ギムの物資を流用して普通の野営よりは豪華な野営となっていた。

少し早く昼食を取ろうとしている者もいれば、明日の戦いに備えて武器を整える者もある。そして、明日の戦いに勝利した後を想像し、顔を厭にニヤつかせる者も。多種多様の思いと考え、そして侵略中であつても、其処には戦いの気配は無かった。

其処に、宇宙からマツハ7で落下する6発のテンペストA0弾頭が飛来した。

その事実にも、最後まで気付く者は遂に現れなかった。何の迎撃も無く、何のリアクションもなく、飛来したテンペストA0弾頭地上からおよそ1・8mでその威力を、C70爆弾にも使用される史上最強の爆薬を点火する。

——カッ!!!

ロウリア王国東方征伐軍の軍人達は刹那、視界が真っ赤に染まる瞬間を目撃し、そして一瞬に到達した衝撃波と熱量と焰の前に、消滅した。

次いで周辺にその膨大な^{マツハシステム}衝撃波マツハシステムⅡ地面で跳ね返って戻ってきた爆風と、最初の爆発が起こした爆風に追いつき、2つの爆風が1つに纏まって生まれる、より強力な衝撃波。テンペストA0が生み出すその威力は、殺傷範囲を大きく広げるだけに留まらず、地下に向けてより強い力を生み出し、巨大生物が作り出した巢の強靱な壁をも、完全とはいかないが破壊する事が出来る。と熱量を撒き散らし、ギムの街並みを破壊。それに飽き足らず、40万の兵士やワイバーン、兵器、木々、自然を瞬間的に燃やし尽くす。衝撃波と熱量が吹き抜け、テンペストA0が着弾した周辺は爆煙で視界が塞がれ、一体どうなったのかは分からない。しかし、ギム周辺に浮かぶ巨大なキノコ雲

が、一体何があつたのかを想像させる。

「…スカウト1より本部へ。テンペストA0は正常に命中。魔法らしき現象及び迎撃は確認出来ず」

『本部よりスカウト1へ。生存者は確認出来ますか?』

「現在、着弾地点周辺に爆煙が発生していて確認は出来ない。が、まず殲滅と見ていいと判断する。万が一に備え、着弾地点に侵入可能な状態となり次第、生存者の確認に移る」

『了解しました。それまでは遠距離偵察を続行お願いします』

「スカウト1、了解。通信終了」

その光景を遠望から見ていたEDF日本支部 偵察部隊「スカウト1」の隊長は、大阪本部に攻撃成功の無線を送っていた。

EDF日本支部情報局は、対ロウリア王国戦計画：否、対現地世界戦計画に於いて「スピード」を最重視した。電撃的に、速やかに、スムーズに。早期の終結を目指した。

その理由としては、「魔法」の未知である。1ヶ月の間、原初の天災と呼ばれる篠ノ之博士と協力して魔法の研究を行っていたが、成果は全く持つて上がって居なかった。

「魔法」は、余りにも科学の法則から逸脱していたのだ。

どんなセンサーや探知機を用いても、魔法の使用原理が科学的に説明する事が出来な

い。何にも反応しないのに、何も無い空間から炎弾が出てくる。クワ・トイネ公国やクイラ王国曰く「魔素と呼ばれるものを使用して発動している」らしいが、そもそもその「魔素」さえも一体どういうものなのかさえも分からない。果てには詠唱による発動や、魔道具や魔石による物、魔素を直接利用する生物さえもあるときた。幾らフオーリナーテクノロジーがあるEDFとはいえども、此処まで真つ向に科学のソレから喧嘩を売る物が出てくるとお手上げとしか言いようがない。

そして「原理」が分からないという事は、「限界」が分からない。

魔法が扱える者が1人いるだけで、どれ程の攻撃が出来るのだろうか？それが10人いれば？100人いれば？1000人いれば？はたまた魔素なるものを大量に注ぎ込めば、一体どれだけの破壊力を持つ魔法が出来る？クワ・トイネ公国やクイラ王国にある程度は見せてもらったが、所詮は一つの基準。ロウリア王国はもつと凄いかもしれない。この世界の列強国と呼ばれる国なら、それらを超越しているかもしれない。分からない、わからない、ワカラナイ。

恐ろしい、おそろしい、オソロシイ。

「限界」が分かれば、それで良かった。だけど「限界」が分からないなら、有り得ないは有り得ない。

もしかしたら、町一個なんて簡単に吹き飛ばせるのかもしれない。

もしかしたら、人を至極簡単に洗脳させる事が出来るかもしれない。

もしかしたら、化け物さえも操れるのかもしれない。

もしかしたら、天地さえも操る事が出来るのかもしれない。

もしかしたら、天変地異さえも起こす事が出来るのかも知れない。

もしかしたら、未来さえも見れるのかもしれない。

ああ、そんな物がもし実在するのなら、なんて恐ろしい事か。そしてそれは決して無機質な物でなく、人の悪意で振るわれてしまう。

そんな恐ろしい物が使われる前に、撃滅しなければならぬ。

その恐怖の結果が、この光景だ。

EDF日本支部は、ロウリア王国の侵攻前にギムの人々と軍をクワ・トイネ公国協力の下にエジエイ等に避難させ、町一個を囿とした。

そして、ロウリア王国東方征伐軍がギムを拠点とした事を確認し、第1艦隊より戦術兵器テンペストA0ミサイル6発を発射。一撃でギム諸共、40万の侵略軍を叩き潰したのだ。

当初、この計画を聞かされたクワ・トイネ公国の反対意見は多かった。幾ら強力な策

とは言えど、街一個を丸ごと吹き飛ばしてしまう上、10万の民の財産や家を失わせてしまうのだ。EDFの支援が約束されているとは言えど、流石に簡単に首を縦に触れる者が少ないのは仕方がない。

だが、ある情報局員の一言が、クワ・トイネ公国の首を縦に振らせた。

「街や物は、もう一度作れば良いでしょう。しかし人の命は、命だけは。1人1人が何物にも代替する事の出来ない、唯一無二の宝なのです」

ロウリア王国東方征伐軍は1人として居なくなつた。

しかし、まだロウリア王国そのものを降伏させた訳ではないし、海軍の4400隻が残っている。

「全艦に告ぐ。碇を上げろ」

——EDF日本支部第7機動艦隊、出撃。

第7話 神速

「いい景色だ、美しい…」

目の前の光景を見て、ロウリア王国東方征伐艦隊海将 シャークンは呟いた。

4400隻もの大艦隊が帆を張り、風を目一杯に受けて大海原を進むロウリア海軍。その船内には大量の水夫と揚陸部隊を乗せ、マイハーク港に向かっていく。余りにも多い大船団故に、最早海が見えないと言わんばかりに、360度にひたすら船が映る。

ロウリア王国が6年の準備期間を掛け、更にパールディア皇国からの軍事援助を受け、漸く完成したこの大艦隊。4400隻もの大艦隊を防ぐ手立ては、ロデニウス大陸に存在しない。いやそれどころか、列強国パールディア皇国さえも制圧する事が出来るのではないかと、シャークンは一瞬思った。

(いや…パールディア皇国には「砲艦」と呼ばれる、船ごと破壊出来る兵器があるらしいな…)

今のロウリア王国では、パールディア皇国に挑むにはまだ危険が大きすぎる。頭をよぎったその考えを打ち消し、改めてこれから征服する、東の海を見て。

(…なんだ、水平線に何か)

マツハ7で飛来した、総数102発の28cm砲弾と12.7cm砲弾が、ロウリア艦隊を貫いた。

「砲撃、命中。敵船撃沈数、推定200」

「砲撃続行、全艦撃沈まで撃ちまくれ。決して近づけるな」

シャーコンが水平線近くで発見したのは、EDF日本支部より派遣、先程までマイハークにて停泊していた第7機動艦隊のアイオワ級フリゲート艦6隻だった。

彼等は単縦陣にて左舷砲戦を展開。左に指向可能な28cmレーンガン3連装砲18基54門、12.7cmレーンガン連装砲24基48門が各個射撃。途絶える事の無い極音速の砲弾幕は、4400隻のロウリア艦隊を蹂躪する。対フォーリナー機甲戦力兵器として開発された艦砲の威力は、直撃せずとも周辺に拡散される衝撃波だけで、木造船は粉々に粉碎。人体などは最早肉片と成り果てる。そして幾千幾万の破片が無事だった船に突き刺さり、貫通し、地獄絵図を作り出し、最期は砲弾によって粉碎される。

最早戦闘と呼ぶのさえ烏滸がましい、まるで的当てゲームのように吹き飛んでいく木造船の数々。それらを己の身体で体験しているロウリア王国海軍は、最早指揮や秩序も崩壊していた。未だ無事な各船は兎に角回頭し、全力で逃走の構えを見せている。が、無秩序に行われる逃走行為は、却って味方の船との衝突さえも引き起こす。中には発狂し、船から海に飛び降りる兵達もいれば、魔道通信でひたすらに助けを求める者もいる。シャーコンが「パーパルディア皇国をも打ち倒し得る艦隊」と豪語していた、文明圏外国最強の艦隊が。無慈悲に、冷徹に、無感動に、消えていく。

やがて、其処には静寂が訪れる。果たしてその海面に浮かぶのは、4400隻分の木造船の残骸と、幾万人の血で紅く染まった海面、そして幸運にも生き残ってしまった生存者達のみだった。その生存者の中には、將軍シャーコンと、パーパルディア皇国の観戦武官もいた。

「…ロウリア王国海軍、全艦撃沈を確認。損害、皆無です」

「少なくとも、30km^水_{平線}の距離を即時攻撃可能な魔法は無し、か…全艦、面舵の後最大船速。本艦隊の援護に向かう」

「…第7機動分艦隊、海域を離脱。周辺クリア」

「浮上開始。味方にも気付かれるな」

この時、ロウリア軍は海軍の悲鳴じみた救援通信を受け取ってしまった。

詳細は不明なれど、救援を求める声と悲鳴、次々と途切れる通信に尋常では無い事態に陥っていると把握は出来た。出来たが、肝心の一体何が起きているのかが分からない。

しかし、4400隻の大艦隊を見捨てるわけにも行かない。其処で、ロウリア軍は後方：王都防衛用に備えていたワイバーン250騎を全力出撃。艦隊を襲っている何かの正体が分からない以上、手加減する余裕など微塵も無い。

そうして天空に飛ばされた、第三文明圏最強の死神達は。王都から60km地点の海上で、1匹残らず叩き落とされた。

アイオワ級フリゲート艦の分艦隊と別れ、王都マイハークに向けて一直線に侵攻していたセントエレモ級イージス戦艦6隻のリーダーは、その性能に違わず超遠距離からワイバーンの生体反応を捕捉。これを引き付け、第二代VLSセルフオーリナー大戦前のVLSを第一世代、フォーリナー大戦中に開発された圧縮空間を搭載したVLSを第二世代と呼称している。内に搭載された対空ミサイルを全艦一斉射。イージス艦から

受け継がれたデータリンク能力やC4Iシステム、そして極音速対空ミサイルの威力は。一瞬にてワイバーン250騎を殲滅し、制空権を喪失させた。

当然、彼等はワイバーンの殲滅の為だけに来たのではない。ワイバーンを殲滅して制空を確認した艦隊は、次の一手を打つ。

各艦の艦橋後方部のシャッターが解放。艦内から、中に兵士を満載した輸送ヘリHU04ブルートが2機ずつ、そして戦闘ヘリEF24バゼラートが1機ずつ、計18機が極短距離の滑走路に移動。エンジンが始動し、回転数を上げてプロペラを動かす。やがてその勢いは空中へと浮かす程の浮力を獲得し、船体から機体が離れる。と、同時に。各パイロットは操縦桿を操作し、艦隊上空で編隊を構築。そして、全速力で艦隊から先行を開始。

目標はただ一つ。王城ジン・ハークの陥落、及びハーク・ロウリア34世の確保によるロウリア王国の降伏。

1個中隊を乗せたブルート編隊とバゼラート編隊は、高度100mの低空をおよそ300km/hの速度で王都マイハークに侵入。ヘリのプロペラ音で王都防衛隊に気付

かれるが、それは想定内。直ちに作戦通り、ブルート編隊は3重の城壁を越えて王城上空へ、バゼラート編隊は散開し、城壁や防衛施設の破壊を開始。バゼラートから放たれる重機関銃の弾幕やミサイルの攻撃により、王都防衛隊や防衛施設は次々と破壊されていく。

そんな中。王都上空にたどり着いたブルート編隊は、ヘリボーンに最適な中庭にホバリング。其処から中庭の制圧射撃を開始。銃弾幕や雷による破滅の雨は、僅か10秒で中庭に居た兵士達を殲滅に追いやった。

「総員、降下」

総隊長の声を合図に、上空10mから次々と兵士達が飛び降りる。普通に考えて、10mからロープも使わずに飛び降りるなど、自殺行為だ。

だが、しかし。大半の兵士達は両足で着地し、そのまま何事も無かったかの様に走り出した。

何故そんな芸当が可能なのか。それは、EDFが採用している第3世代アーマースーツの恩恵による。フォーリナー大戦後、フォーリナーテクノロジーを存分に使用されたそれは、アーマースーツ内部に埋め込まれている人工筋肉繊維による筋力補強機能と、巨大生物の硬皮を参考にして生産された特殊素材による耐衝撃性が合わさり、正しい姿勢で着地出来れば100mからのパラシュート無しのダイブにも無傷で着地出来ると

いう驚異の性能を叩き出している。他にも第2世代アーマースーツから継承された4つの圧縮空間で武器弾薬の携帯や継戦能力を劇的に向上させている上、ヘルメットに搭載された超小型生体電波両用識別式レーダーは、装着者の半径180m内に存在する生命体と機械を正確に認識する能力を持ち、同じレーダーを所持する者は「味方」として識別する機能も搭載している。このレーダーの前には、伏兵や罠などは無意味となる。

これが、最もEDFの通常兵科「レンジャー」の基本装備だ。そして此処から、特殊兵科の装備の差異が出て来る。

先程、大半の兵士達は着地したと描写した。では、残りの兵士達はどうかと言うと。

空を、飛んでいる。

冗談でも比喻でも無く、空を飛んでいる。そして更に特徴を挙げると、それは全て女性兵士で、背中に超小型のウイングを背負っている。そして彼女達の手には、ロングボウの様な武器やレイピアの様な武器を持っている事だ。

ウイングダイバー……またの名を、降下翼兵。それが彼女達の、兵科の名だ。

フォーリナー大戦を通して、人類はフォーリナーテクノロジーによって幾世代もの技術的ブレイクスルーを獲得した。その例は、数を上げればキリが無い。皆が想像する近未来の兵器や技術が大体半年くらいで現実の物となったと言え、その凄まじさは分かるだろう。

フォーリナー大戦初期。追い詰められたEDFは戦局逆転を賭けて、その技術をふんだんに利用し、一兵士を一個の戦術兵器と昇華させる為にある計画が発動された。それが「特殊兵科開発計画」。篠ノ之東の力があっても、開発が完了するのはマザーシップ墜後になったが：ウイングダイバーは、その成果の一つだ。

女性のみで構成されたウイングダイバーは、「飛行ユニット／プラズマジエネレータ」と呼ばれる装置を背中に装備。エネルギー生産量にも限界がある為、ある程度の制限はあるが：しかしそれでも歩兵で唯一飛行が可能であり、三次元かつ高機動な行動が可能。そのエネルギーを利用した超兵器を使い、人類を最も多く蹂躪した巨大生物を、逆に蹂躪し尽くし得る力を得た戦乙女^{ヴァルキリー}。

だが、その分欠点も多い。まず、ウイングダイバー自体の適正ハードルが高い。空中機動を行うと言うことは、高度な空間認識能力や可能な限り体重が軽い事が求められる。空間認識能力は男性が優れ、体重の軽さは女性が優れている。この点だけなら男性が居ても良いと思うが、次が女性のみとなった最大の理由だ。

飛行ユニット／プラズマジエネレータを動かす為に必要な「AMS適正AMSの正式名称は「Allegrory Manipulate System」である。」が、女性の方が遥かに高かったのだ。

ウイングダイバーは武器の特性上、EDFの兵士達の中でも一番多く接近戦が求められる。その為には、飛行ユニット／プラズマジエネレータを武器を持ったまま、一切のタイムラグ無く、精密に、確実に、動作させる必要がある。その時点でボタンやトリガー操作は却下される。人間の反応速度は限界まで鍛えても0.1秒。これは電氣的に覆しようが無く、そして殆どの人間はこれに遠く及ばない。しかしこの0.1秒が巨大生物との接近戦では致命的なタイムラグとなり得てしまう。

が、それは脳から手足までの精神信号の距離問題だ。ならば、脳から脊髄や延髄に流れる精神信号を拾い、間接的に脳と機械を直結させれば良い。

言うのは簡単だが、それがどれ程に困難な事かは、考えずとも分かるだろう。まず脳と機械の直結。これを行う為に、ウイングダイバーは脊髄部にAMS接続の専用機械を埋め込む為の専用手術を必要とする。これに失敗すれば、まず下半身麻痺は免れられない。最悪の場合は死亡だ。これを成功しても、次はAMS適正の問題が立ちはだかる。手術前に脳波検査などによって大まかにAMS適正は判明するが、実際に飛行ユニット／プラズマジエネレータとAMS接続し、どれ程に精密に動かせるか。そして脳に負担

が掛からないかを調べる必要がある。此処でAMS適正が低ければ、ウイングダイバーになる事は出来ない。フォーリナー大戦後でも手術後、最終的にウイングダイバーになれる確率はおよそ70%と言われている。なお、フォーリナー大戦後のAMS手術の成功率は100%を記録している。

フォーリナー大戦後であっても、このハードルの高さだ。当然、フォーリナー大戦中の開発時のハードルの高さは、この比ではない。何せデータが何も無いのだ。人類の未来の為とはいえ、これを持ち越える勇氣を持つというのは、男性であっても中々厳しい。

しかし…ウイングダイバーの開発主任は、篠ノ之束は、これに躊躇しなかった。

フォーリナー大戦中でありながら、人類至高の天才は、AMS手術の第1号実験台に志願した。当然、周囲や上層部の反対は大きかった。彼女は、篠ノ之束は比喻なく人類のジョーカーの一つ。彼女が開発した兵器無くしてフォーリナーの対抗は不可能だったと断言できる。実際に、原初の対フォーリナー兵器「AF14」も彼女の開発だ。そして当時も、彼女を筆頭に推し進めている兵器プロジェクトは幾つもあった。もし手術に失敗して彼女が死亡してしまったら、人類の滅亡は確定的になる。それ程までに、彼女の頭脳は人類の生存率を引き上げていたのだ。

最終的な結論を言えば、彼女は手術を強行した。彼等の言い分も分かるが、それ以上に人類は追い詰められ、時間も無かった。最早倫理や躊躇をしている段階では無かつ

た。そして、彼女はこの手術の成功を確信していた。何故ならフォーリナー大戦前から、ウイングダイバーの基礎理論は開発していた。

インフィニット・ストラトス。

宇宙空間での活動を想定し、開発を試みていたマルチフォーム・スーツ。だが、束の独力では理論は出来ても開発を行うには資金や技術が足りていなかった。彼女がED Fに入ったのも、開発する為のマネや資金を手に入れるのが始まりだった。

しかし、フォーリナーテクノロジがある今なら。兵器としてなら、開発出来る。彼女の夢も最早、フォーリナーによって打ち砕かれた。だからその夢を兵器に堕とす事に、そしてその身体を捧げる事に、何ら躊躇は無かった。

そして、篠ノ之束は原初のウイングダイバーとなり、ウイングダイバーの早期開発の礎となったのだ。

彼女が文字通り身体を捧げてまで作り上げた執念の結晶達は、異世界で空を舞い、雷やプラズマの刃、粒子砲を以って王城の窓から見える敵を殲滅している。最早歩兵の火力を超越し、近接航空支援じみた威力を發揮。しかも雷は人間を一瞬で黒焦げにするに留まらず、壁を反射し、射程限界まで建物内を暴れ回っている。

レンジャーや近接装備のウイングダイバーが突入し、雷攻撃は打ち止め。そのまま王

城外の制圧、及び防衛に移行。

城内に突入した部隊は、恐ろしい速さで城内に浸透していく。立ち塞がる兵士達は瞬時に粉々に砕け、バリケードも弾幕や力技によって粉碎されていく。

その中でも、特に恐ろしい速度で進んでいく部隊が、一つ。

その部隊は、5名のレンジャーで構成された小隊。その4人は、第3世代アーマースーツの筋力補強機能を存分に利用し、「前に飛ぶ」事によって自動車並みの速度で城内を突き進みつつ、恐ろしい精度で接敵した兵士達を薙ぎ倒している。

味方さえも置き去りにする程の速さで、しかも王がいる謁見の間に迷う事なく一直線に進んでいる。何も、王城の地図を前もって手に入れていた訳ではない。全て、隊長の直感によって進んでいる。普通ならそんな理由だけに頼る筈が無いが：彼自身も、そして部下達も、それを信じている。彼が打ち立てた実績が、全て証明している。彼が成してきた奇跡がそれを絶対とする。彼が積み上げた戦果が、それを信じさせるに値する。

「隊長、突出し過ぎてると思うが大丈夫か？」

「問題無い、この速度なら敵も付いていけない訳がない」

「そりやそうですけどね：流石にこんな速さで突っ走るのは少し疲れますよ？」

「気張れ。その程度で疲れるような訓練をした覚えもないし、妥協をしたつもりもない」

「おら、隊長の言う通りだ。置いてかれるぞ」

「うつへえ、それは勘弁です」

彼等は軽口を叩いているが、自動車並みの速度で城内を突っ走りつつ眼前の敵兵を千切っては投げている。はつきり言って人間業じゃない。

「…此処だ」

一同は、目の前に広がる大階段の前に止まる。隊長の直感は、この先にロウリア王国の王がいると、確信している。生体リーダーによると、何十人かが待ち構えているのは間違い無い。

「…陣形が妙、だな。待ち伏せか？ いや、だとしても1番前に3人だけってのは…」

「…前進するぞ。警戒を怠るな」

彼等はアサルトライフル AF100の装弾数を確認し、再装填。銃口を階段の先に向け、静かに、しかし迅速に階段を上がる。

「ヒッ…!!」

果たしてそこに居たのは、悲愴な表情を浮かべたメイドが2人。反射的に引き掛けた指を理性で強引に止める。

明らかかな、非戦闘員。戦意もなく、武器も無い。

「…ほう、止まるのか。破れかぶれの賭けだったが、お前達は——」

メイドの後ろの暗がりから、1人。銀の鎧に身を包んだ男が現れる。そして男が瞬きした瞬間、運命は決した。

——ドンツ!!

銃声が1つ。隊長の持つAF100から放たれたその銃弾は、メイドの間を通り抜けて男の胸部に命中。その威力を存分に發揮して、男の上半身を粉々に粉碎。無事だった下半身と上半身の残骸は、その衝撃で後方に勢いよく吹き飛んでいく。

そして、残りの4名からも弾幕が展開。これもまた、メイドの2人を避け、柱や壁の回転扉に隠れていた兵達を次々と射殺。障害越しだが、AF100の威力ならば貫通はとてまたやすい事。

「——クリア」

数秒後、リーダーの反応には自部隊とメイドの2人、そして奥の1つを除いて全てが消失していた。

メイドの2人は銃声に驚いて腰を抜かして、ガタガタと震えている。目の前で爆音が響き渡ったら仕方のない事ではある。

隊長は武器を下ろし、2人に近付いてしゃがみ、視線を合わせる。

「怪我は無いか？」

2人はコクコクと、頷く。

「なら良かった。…佐藤、神谷。此処を確保している」

「了解」

呼ばれた2人は了承し、周辺の警戒に当たる。さりげなくだが、メイドの2人を守るように立っている。

「俺達は王を確保する。さっさとこの戦争を終わらせるぞ」

ハーク・ロウリア34世は、玉座でガタガタ震えて何処かの神に命乞いをしていた。

服従と言っているほどの屈辱的条件を飲んで、漸く取り付けた列強の支援。

その支援によって列強式兵隊教育を6年間の歳月をかけて施し、漸く完成したロデニウス大陸統一の為の大軍団。

資材も国力の限界ギリギリまで投じ、数十年先の借金までして作り上げた軍隊で、更には念には念を入れ、石橋を叩いて渡るかのように軍事力にも差をつけた。

そうして圧倒的勝利でロデニウス大陸を統一する筈だった。その筈なのに、なんでこんな事になっている？

扉の前に積んでいた即席のバリケードが一瞬で破られ、緑色の服を着た奇妙な3人が部屋に雪崩れ込んできた。

手には魔法の杖の様な物を持ち、帯剣はしていない。どうやら全員魔術師の様だ。ロウリア34世の脳裏に、古の魔法帝国軍のお伽話が浮かぶ。

「まさか……貴様ら、魔帝軍か!？」

恐怖に震えながら叫んだその言葉に、1人の兵士が前に出る。

「我々はEDFだ。ハーク・ロウリア34世、この戦争を終わらせる。抵抗はするな、命が無駄に減っていくだけだ」

直後、王都制圧部隊及び第7機動本艦隊は以下の通信を受信した。

『此方は王都制圧部隊総隊長、ストームリーダー。ロウリア王 ハーク・ロウリア34世の捕縛、及びロウリア王国の降伏受諾に成功した。現在、ハーク・ロウリア34世自らの手で魔導通信を通じ、ロウリア王国の降伏を発信させている』

『作戦は、成功だ』

こうして、ロデニウス大陸の雌雄を決する筈だった大戦争は、僅か2日で終結した。

第8話 戦後処理と黒い作戦

第三文明圏列強国 パーパルディア王国 国家戦略局。

その一室の暗い部屋の中に、2人の男が居た。

「…以上、ロウリア王は謎の軍勢に捕らえられた模様です。直後、ロウリア王による降伏宣言が発信され、ロウリア王国は敗北したと…思われます」

片方の男が、冷や汗をかきながらも片方の男…上司に報告を行う。

「簡単にいってくれるな…!!ロウリア王国に一体どれ程の支援を行ってきたと思ってる?それがたったの2日で全て台無しになったなどと、我々以外に漏れてみる!!勿論隠蔽工作は行いが、国家戦略局そのものが危機に立たされている!!そうなれば、お前も私も唯では済まんぞ…!!」

「も…申し訳(ご)ざいませぬ!!」

「今回のロウリア支援はお前も知つての通り、我らの独断で行われていた。上手くいけばロデニウス大陸の資源と権益を一気に我が国が掌握し、その手柄を持って皇帝陛下にご報告する予定だった…:そうなれば他官庁を黙らせる事も出来て、我らの評価も相当なものとなっていた筈…:なのに今となっては、自分の命の危険さえ考えなくてはならなく

なつたな…!!」

部下の男は深く、深く頭を下げる。

「…返す言葉も、ございませぬ」

「ロウリア程の規模を持つ国が、我々の支援があつたにも関わらず2日で敗れたなど、一体何の冗談だ?! ロウリア王国を襲つた敵は一体どのような兵器を使ったのだ?」

「それが…現地の諜報員は王都の攻撃に巻き込まれて死亡したらしく、詳細は一切不明です」

「諜報員が死んでしまつても、戦闘を見ていた一般人が居るだろう! そこから情報の一部くらいは聞き出せる筈だ!」

「ロウリア人は皆…一切の情報を話さないのです。どれだけ金を積もうが、何をしようが全く口を開きませんでした。まるで何かを恐れているかのようで…」

「クソツ、唯でさえ時間が無いというのに…! もういい、その情報とロウリア王国の支援に関する履歴を全て焼却しろ!! 我らの関わりの証拠を何一つとして残すな! 国家戦略局と自分、そして家族の為にもな!」

ロウリア王国を支援していたパーパルディア皇国国家戦略局は、ロウリア王国が引き起こした侵略戦争の一部始終を徹底的に隠蔽する事を決定した。

ロウリア王国の無条件降伏より数日が経った、クワ・トイネ公国 政治部会にて。

「…というわけで、ハーク・ロウリア34世はEDFに捕らえられました。ロウリア王国は我々に降伏。向こうの損害は陸軍40万以上、海軍4400隻、王都マイハークの防衛施設の全損、との事です。」

その会場は、沈黙が流れ続けていた。出席者達の中にはEDF日本支部の国力を疑う者も居れば、その国力を信じる者も居た。

しかしこの結果は、何だ？ロウリア王国軍の越境から僅か2日で、侵攻軍を殲滅し、王都を陥落させるなど流石に想定外にも程がある。彼等からしたら、果たして戦争を行なっていたのかさえも分からない。それ程に速すぎる終結だった。

「…EDFは、何と？」

此処までの力を見せられると、今後の付き合い方も考えなければならぬ。これを引きつかけに、何らかの圧力を掛けられるのも十分に考えられる。

「それが…戦後交渉に関しては、我が国が主導で行なっても構わないとの事です。その代わり、ロウリア常設軍の大幅削減は絶対条件との事です」

「…それだけか？」

「はい。…あ、いえ。それ以外にも『今後の天然食料の安定供給を切に願う』…との事です」

「……………」

最も、それは要らぬ心配で終わる事になるのだが。

さて、此処で少し時間を巻き戻そう。

E D F 第7機動分艦隊とロウリア海軍が衝突し、ロウリア海軍が一方的に蹂躪されて終わった、後に「ロデニウス海戦」と呼ばれる海戦の終了直後。

実は、E D F の海軍艦はもう1隻存在していた。

「…第7機動分艦隊、海域を離脱。周辺クリア」

「浮上開始。味方にも気付かれるな」

海中から海面に、その巨体に反して驚く程静かに姿を現した巨大潜水艦。…否、決戦

兵器X7-1 アリコーン。

船内から24人のレンジャーと、黒色のウイングスーツを着込んだ6人のウイングダイバーが甲板に上がり、周囲を確認する。アリコーン周辺には、大量の木片や肉片、そして点在する僅かな生存者。

「此方^黒シユヴァ^ウアルツエ^サ・ハーゼ^隊。周辺に複数の生存者アリ。これより回収を開始します」

『宜しい、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐。お前達の主観で構わない、魔法を使えそうな者、もしくは階級が高そうな者を優先的に回収せよ。ブリーフィング通り、720秒後本艦は再潜行する。600秒後に艦内へ帰還せよ』

「了解しました。…行くぞ」

黒のウイングダイバー…黒ウサギ隊は隊長^{ラウラ}の声を合図に行動を開始。飛行しながら生体リーダーで生存者を探しつつ、艦長の条件に身合う生存者を探し、強制的に引き上げてアリコーンの甲板に怪我をしない程度に放り投げる。後は甲板上に待機していたレンジャー隊が確保する流れだ。

「ふむ…」

隊長のラウラも3人を見繕って確保しているが、手応えが微妙だという事は自覚している。何か一つ、グツと来る者はいない者か。とはいえのんびりし過ぎると時間に遅れ、この場に置いていかれてしまう。アリコーン艦長のマティアス・トーレスは、やる

と言つたら文字通り有言実行する人間だ。

「た、助けてくれ……」

ふと、声が聞こえた方向を向く。レーダーに反応はあつたが、一目見て確保するに値しないとスルーしていた生存者だ。木材にしがみつきながら、ラウラに向けて手を伸ばしている。

その返答は、ラウラの右手にあるレイピアGスラストから放たれた、数十のプラズマ刃によつて返される。対巨大生物接近装備として開発されたその威力は、およそ175cm程度の人体を、瞬時に数cmの肉片へと変貌させた。

「ふん……」

一瞥し、確保する生存者の搜索を再開。すると、如何にもそれなりの階級を持つていそうな生存者が彼女の目に入った。その人物は意識も朦朧な状態らしく、確保するのも然程苦勞はしないだろう。

余談だが……この時の彼女は知る由もなかったが、この人物はロウリア王国東方征伐艦隊海将のシャークンだ。

(最後の一人は、彼奴にするとしよう)

時間的にも、此処らが潮時。海面スレスレまで降下し、左手でその人物の腕を掴むと、そのまま海面に身体を引きずらせる形でアリコーンへの輸送を開始。一応身体に木片

が刺さらないように配慮はしているが、それでもかなり荒っぽい。

「つ、と」

アリコーンの目の前で、上昇を開始。捕虜の身体がラウラに引つ張られて宙に浮き、そしてアリコーンの甲板上に放り投げられる。直後にレンジャー隊が確保した。

「シュヴァルツェ・ハーゼ各員、間もなくアリコーンの潜行準備時間となる。後はアリコーンに任せて帰還しろ」

『『『『了解』』』』』』

その通信をきっかけに、搜索範囲を縮小しつつあった黒ウサギ隊はアリコーンに撤収行動を開始。同時に甲板のレンジャー隊も撤収。全員が艦内に入った事を確認し、水密扉を完全閉鎖。

「シュヴァルツェ・ハーゼより艦長へ。全部隊の艦内帰還、完了しました。確保人数は31名」

『了解した。ご苦労だ、ボーデヴィツヒ少佐。追って別の指示を出す、戦闘装備にて待機せよ』

「J a w o h r」

黒ウサギ隊の報告を聞いた艦橋は、ほんの少しだけ慌ただしくなり始める。

「さて、仕上げといこう。此処に我々が存在していたという事は、誰にも知られてはなら

ない」

「消せ」

瞬間、アリコーンのウエポンベイ8つが解放。内部からCIWS 8基が現れ、システムが起動。全ての銃口が、残された生存者達に向けられ、弾幕が放たれた。

分間6000発を発射可能なガトリング砲の弾幕は、瞬時に人体を解体させ、命を確実に断つ。意識がある生存者は何とか逃げようとするが、例外無く射殺された。

「…レーダークリア。生存者の殲滅を確認」

「CIWS格納後、潜行。深度500」

十数時間後、アリコーン艦内。

全長495m、全幅116m、全高54mもの巨大な船内によって獲得した豊富な艦内スペースの一つ…仮の営倉室としたその部屋に、パーパルディア皇国の観戦武官ヴァアルハルは居た。

ロデニウス海戦に於いては、彼が乗っていた船が主砲砲弾の衝撃波を受け、船体の左半分を粉々に吹き飛ばしつ、残りの右半分がおもちやのように空へ吹き飛んだ。その際、彼は奇跡的に軽傷で船から振り飛ばされ、その後も幸運にも生きて攻撃を凌ぐ事が出来た。

その後は、先のようにアリコーンに回収され、現在に至る。

彼は今、まるで赤子のように震えていた。

彼の任務は、ロウリア海軍の4400隻がどのようなクワ・トイネ公国を蹂躪しているのか。その経緯を記録する事だった。4400隻もの船が蛮族らしい大型弩弓バリスタに火矢、切り込みの原始的戦法を取ったらどのようなになるのか。個人的興味もあってこの任務に自ら志願した。

しかし彼が見たのは、粉々に吹き飛ぶ船や人の姿。

水平線から大量の木造船を粉々にするなど、彼の母国であるパーパルディア皇国であつても不可能。それどころか、世界一の列強国である「神聖ミリシアル帝国」でもこんな事が果たして可能なのか？それ程に強力で、無慈悲な猛攻。

彼の脳裏に、ある一つの国家の存在が浮かんだ。

それは神話の時代に存在していたラティストア大陸にて、世界を統べた古の魔法帝

国。

一人一人が人間の枠を超越した魔力を保有し、高度な知識を持ち、超高度な文明によつて全ての種を続べた人間の上位種「光翼人」によつて形成された国家。その名は、ラヴァアーナル帝国。

彼等の統治は過酷を極め、光翼人以外のあらゆる生物種を家畜として扱つた。

それ故に幾多の反乱が起き、国の命運を左右する程の戦いが何度も発生したが、その全てが光翼人の圧倒的な力の前に屈した。そして彼等はその傲慢の末に、遂には神にさえ弓を引いた。

そして神々はその所業に遂に怒り、ラティストア大陸に星を降らせた。

星の落下を防ぐ事は出来ないと判断したラヴァアーナル帝国は、ラティストア大陸全域に結界を張り、そして大陸ごと時を超越し、未来へ転移する魔法を発動させた。

《世界に我ら復活せし刻、世界は再び我らに平伏す》。

そう書かれた不壊の石板を残し、彼等は未来へと消えた。

ラヴァアーナル帝国消滅後、大陸の外れに取り残された僅かな光翼人の生き残りを、人間種は物量で圧倒し、吸収または絶滅させて成立したのが、第一文明圏列強国にして世界一の国力を誇る、神聖ミリシアル帝国だ。

それ故に、神聖ミリシアル帝国はラヴァアーナル帝国の復活を恐れていると言われている

る。

ヴァルハルは、あの攻撃の正体はラヴァーナル帝国によるものではないのか、と考えていた。

水平線から一瞬で数百の船を粉々に粉碎する魔法など、少なくとも彼は知らなかった。そして伝説では、ラヴァーナル帝国しか持ち得なかった魔法の存在も示唆されている。あの攻撃も、その類なのではないかと考えていた。

そしてトドメに、彼を回収したウイングダイバーの存在。彼はウイングダイバーが空を飛んでいる姿を見て、彼女達が光翼人であると勘違いした。結果的に彼は、ラヴァーナル帝国が復活したと思いついでいる。

その時。部屋の出入り口が開き、1組の男女が入り込む。ビクリと身体を震わせ、視線を向ける。

「…ヒイツ!!」

男の後ろに居る、シュヴァルツェ・ハーゼ隊長のラウラを見て、悲鳴を上げて後退ろうとする。しかし既に壁際で、それ以上の後退は出来ない。

「お前が、パーパルディア皇国の観戦武官…ヴァルハル、だったか?」

股間から液体を垂れ流す無様なその姿に一瞬だけ嫌悪な表情を浮かべた男…アリ

コーン艦長のマティアスは、無表情で問う。

「そ、そうだ！私がヴァルハルだ！話せる事は何でも話す!!」

「そうか、ならばこの後の質問も全て答えろ。嘘をつけばどうなるか、分かるだろう？」

「ああ、ああ分かつてる!!」

ヴァルハルの前に、既に部下が何人かを尋問している。その際に全員がヴァルハルに似通ったりアクションをしており、そして自分達：特にシュヴァルツェ・ハーゼの隊員達を、光翼人とやらの人種に勘違いしているということも把握している。だからと言って訂正する気もないが、むしろ好都合、引き出せる情報は全て引き出す。

そうして艦長自らが陣頭に立って始まった尋問は、極めてスムーズに進行した。何せ質問していない情報も勝手に喋ってくれるのだから。既に手に入れた情報と差異がないか、それとも新しい情報が無いかを脳内で整理しつつ、そしてメモに書き留めつつ、彼の言葉を聞く。

やはりロウリア軍の者達とは違い、パーパルディア皇国の観戦武官だけはある。確保した者達の中では彼しか知り得ない情報が出てきている。

国家戦略局という部署が、極秘にロウリア王国に軍事支援を行い、ロデニウス大陸を統一させた後に我が物としようと思っていた事や、パーパルディア皇国に関する彼なりの詳細な情報がその筆頭だ。

数十分の尋問を終え、搾り取れる情報は全て搾り取れたと判断したマティアスは、書き留めていたメモ帳を閉じる。

「…どうやらお前の持つ情報はこれで全てだったらしいな。ご苦労」

「あ、ああ、そうだ。だから、だから命だけは」

銃声。

命乞いをしていたヴァルハルの眉間に、9mmの穴が空き、弾丸が脳細胞を破壊し即死に至らしめる。全機能が一瞬にして停止した身体が傾き、床に倒れ込んで眉間の穴から大量の血が流れ出す。

「…宜しかったので？」

ラウラは、拳銃を引き抜いてヴァルハルを射殺したマティアスに問いかけた。

「必要な情報は手に入れた。此奴は用済みだ。そして何よりも、此奴は汚した…」

「此奴は小便で汚しやがった!! 真っ白なシートで完つ壁に整えていた、俺達の家を!!」

アリコーン

マティアスは衝動に駆られ、死体となったヴァルハルの腹部を蹴り上げる。そして戻り際にもう一発、ノールックで頭に弾丸を叩き込んだ。

「腐ると面倒だ、さっさと身体を解剖して海に棄てるとしよう。ボーデヴィツヒ少佐、後

を任せた」

「了解しました」

マテイアスが部屋から退室し、残されたのはラウラと死体のヴァルハルのみ。ラウラはまず清掃班と医療班を通信で呼び、死体の解剖と部屋の清掃を指示する。

通信を終えると、ラウラはヴァルハルに改めて視線を向けた。

「…お前はこのタイミングで死ねて、もしかしたら幸運だったかもな」

既に死んでいる為に、その眩きは空に消える。

アリコーンが何故生存者を確保していたのか。その目的は情報収集及び人体解剖による人体構造の差異の発見。情報収集自体は今後もチャンスは幾らでもあるが、後者はそうもいかない。何せクワ・トイネ公国やクイラ王国に「研究の為に遺体を解剖させてくれ」など、口が裂けても言えるわけが無い。だが、今戦争で敵となったロウリア軍なら、話は別だ。

フォーリナー大戦後のEDF規定の一つとして、「EDFに敵対する事は全人類に敵対する事と同意義であり、それ即ち敵対的人類外存在と定義する」と、明確に定められている。

この規定に則れば、ロウリア王国の人間は人間として認められておらず、人間に極めて酷似した敵対的人類外存在と定義する事は出来る。

出来るからと言って、不必要な虐殺などを行うかと言ったらまた別な話ではあるが。しかしマテイアス・トーレスは、アリコーンは、明確に倫理に反する冒険を行おうとしている。これをEDF日本支部が知れば、即座にその暴挙を止めようとするだろう。しかしその様子は、今も見られない。

当然だ。何故ならば、この事はEDF日本支部さえも知っていないのだから。

浮上の際にも、EDF第7機動分艦隊に知られぬように浮上したのも、彼等にもアリコーンの存在を知られない為だ。EDF日本支部は、指示通りに「現地世界の情報収集」の任務に就いていると思っている。

それは間違っていない。問題は、その手段が倫理的に反している事と、それがEDF日本支部にも極秘で行われている事だ。

万が一これが発覚すれば、叱責だけは免れる事は出来ないだろう。しかし彼等には止まる気も無かった。

EDF日本支部は、優し過ぎる。

勿論、それは美徳だろう。人類同士で争う事は如何に愚かしい事か、自分達も良く知っている。何せアリコーンの船員達は皆、人類内戦を生き残ってきた強者達だから。

そして自分達よりもその悲惨な光景を多く、いや、人類の中で一番多く目撃したのが、
オペレーション・リイカーフチャ
 地球奪還作戦を完遂させた日本支部だ。

だからこそ、EDF日本支部は博愛的思想を持ったのだろう。あくまでもそれは人類同士であり、フォーリナーなどと言った存在に対しては全力で殴る事は変わらない。なるほどそれも良いだろう。その考え自体は決して頭ごなしに否定するものではない。しかし理解はしても共感はしない。

それで自ら選択肢を狭めてはダメだ。弾いた選択肢に万が一正解があつた日には、3600万の市民達の命を、30万の兵士達の命を脅かす事態になりかねない。

相手は、物理法則を完全に無視した…部分的にはフォーリナーテクノロジーさえも超越した特色を持つ「魔法」を用いる幾多の国家…否、世界。対してEDF日本支部の戦力は、確実に足りていない。いや、正確に言えば文明圏外及び第三文明圏の推測技術レベルから言えば、圧倒する事は可能だと思われるが、此処で「魔法」の存在がそれを不確定にさせる。

フォーリナーテクノロジーは人類に幾世代の技術的ブレイクスルーを成し遂げた。ならばフォーリナーテクノロジーを部分的に超越した「魔法」が、フォーリナーテクノロジーに劣っている筈が無い。

その為には、「魔法」の限界を早く知らなければならぬ。

人類の未^レ來^ルの爲^ニならば、彼女達彼等は喜んで汚物の中に手を入れ、そしてその中に沈むダ
イヤモンドを手に入れる。

それが出来る者達だからこそ、人類の切り札の一つ、アリコーン級潜水戦闘空母1番艦決戦要塞X7-1アリコーンに乗
船し、操る事が許されているのだ。

「恨むな、とは言わん。お前達の魂が安らかに眠れる事だけは、せめて願おう」

こうして、残りの30人の生存者達の命運も、ロデニウス沖の深海の中に消えてい
た。

同時にアリコーンは秘密作戦ブラックオプスを完遂し、第三文明圏の基礎情報及びパーパル
ディア皇国内部の多量な情報、そして魔法や神話の伝承の情報。極め付きに、現地世界
の人間の人体構造データの入手に成功した。

第9話 今後の相談

先のロデニウス戦争にて、40万の陸軍と4400隻の海軍を文字通り瞬殺し、王都マイハークを陥落。そしてハーク・ロウリア34世を確保して僅か2日で戦争終結を成した立役者、EDF日本支部。

それから5日後。一連の報告書が提出され、大量に判明した情報を共有する為、大阪本部では大石司令を筆頭に、各部署の局長や篠ノ之束が集まり、重役会議が開始されていた。

最初はロデニウス戦争の戦後処理関連の報告で、此処で描写する程の報告はハッキリ言つて特に無い為、ざっくりと割愛する。

本題は、此処からだ。

「…………ラヴァーナナル帝国、神聖ミリシアル帝国、パーパルディア皇国。コア魔法、誘導魔光弾、時間超越魔法…………アリコーンの尽力のお陰で色々と判明したのは良い事だが……ちよつと、頭が痛くなるな……」

大石の言葉に、全員が無言で同意の意を示す。

「とはいえ、此処でそうしても何も始まらない。整理していくとしよう。情報局長、現

時点での分析結果はどうだ？」

「そう、ですね…まずはラヴァーナル帝国から行きましょう。まずこの国に関しては、情報伝承でしか伝わっていない為、ハッキリとした事は何とも言えません。しかし…伝承にて当時する「コア魔法」に関しては、危惧を覚えます。伝承によれば、コア魔法1発で都市が一つ吹き飛んだとの事を考えると、最低でもWW2第二次世界大戦のアメリカにて開発された原子爆弾 リトルボーイ史実において、広島に投下された核爆弾。は想定すべきです。そして誘導魔光弾は、我々が使用するミサイルに極めて酷似した特徴を持つと思われる…この事から、ラヴァーナル帝国は少なくとも現代的な魔法技術を保有していると考えるべきです」

「……………それで、なおかつ人類種を家畜扱いしていたのだろうか？」

「はい」

「…復活した場合、戦争は避けられない…しかも、テンペストレベルの大量破壊兵器の撃ち合いも前提の一つにしなければ…」

「待て待て、そんな事になったら碌な防衛兵器も持ってない他国が全滅するぞ!? 無茶は承知だが、コア魔法を迎撃しつつ通常戦力でラヴァーナル帝国を攻略した方がまだ…」
「そこにコア魔法を連発されれば纏めて吹き飛ぶ!! 幾ら遠距離対空能力が高いセントエールモ級が複数隻居たとしても、テンペストレベルの波状攻撃に耐え切れる保証は無い

上、陸では格好の的だ！」

場が荒れ始め、大石はわざとらしく咳をして静止をかける。紛糾する気持ちも分かるが、まだ聞きたい事はあるのだ。

「……この報告書によると、現地世界で随一の国力と技術を保有している神聖ミリシアル帝国は、取り残された光翼人やラヴアーナル帝国の領土を取り込む形で建国された、とある。……つまり、最低でも1万2000年後の現在では、ラヴアーナル帝国の技術を完全に取り込み、独自に発展してもおかしくない、という事だな？」

神聖ミリシアル帝国。現地世界最強と謳われる多民族国家であり、ラヴアーナル帝国の遺跡を研究・解析し、強大な軍事力を手にして領土を拡大していた過去を持つ、現時点ではEDF日本支部の要注意国家の一つ。

そして、敵性技術を解析していたという事は。

「……はい。最低でもコア魔法相当やフォーリナー大戦前の技術、最悪の場合は未知の大量破壊兵器に相当する魔法、及び我々と同等以上の技術力や未知の魔法兵器を想定するべきでしょう。相手は会話可能な存在であれど、その精神はフォーリナーに近しいものと判断出来ます。そんな国家が、例えば遙か未来であったとしても復活する事が確定しているのです。実際に支配を受けてきた者達の子孫ならば、ラヴアーナル帝国の復活に備え、ラヴアーナル帝国の技術を解析。我々と同じように、ラヴアーナル帝国の技術を解

析して独自に発展させているでしょう」

この時点で、情報局長の推測は外れていたのだが、上層部の全員はその推測が妥当と認識していた。それは何故か？

自分達という前例がいるからだ。

10年前のフオーリナー大戦^{生存戦争}にて、人類はフオーリナーテクノロジーを解析し、取り込み、発展させ、未解明部分こそあれど我が物とした。フオーリナーとラヴァアーナル帝国。違いこそあるが、根本的に人類そのものに敵対する存在だという事は変わらない。しかもラヴァアーナル帝国は復活する事が確約されている。ならば復活に備え、全力を以つてラヴァアーナル帝国の技術を吸収し、そして独自に発展させて対ラヴァアーナル帝国の兵器を獲得しているに違いない。

自分達が出来たんだ。ならば神聖ミリシアル帝国だつてこの程度の事はやっていると、確信していた。

「となると最低でもイージス戦艦、第5世代ジェット戦闘機、第5世代戦車相当の兵器、戦術級または戦略級の核兵器相当の攻撃魔法を想定する必要がありますね…：それに加えて魔法が深く関わる以上、科学技術では奇想天外な兵器がある事も考えられます。例

えば……空中戦艦や空中要塞のような」

「……下手したら、四つ足歩行要塞が空を飛んでくるのか」

国土復興局長が漏らした一言に、会議場は静まり返る。

フォーリナー大戦にて、EDF日本支部の戦力を単体で半壊させた悪夢が、空を飛んでくるなど、はつきり言って想像したくもない。

「……………それは……………あり得ないと断言、出来ないのが……………」

「……四つ足歩行要塞で思い出したが……他にも、魔獣という存在も確認されていたな。殆どは知性を持たない獣らしいが、もし魔法で操れるのなら……」

「……………エルフやワイバーンが存在しているんだ。ドラゴンやクラーケンもいたって不思議じゃない。それを使役する可能性もあるのか」

「それにワイバーン単体で魔法が使える事も確認されている。つて事は、魔獣は基本的に魔法が使える……?それじゃ一体一体が戦術兵器相当と想定しないと拙いぞ……!?!」

情報を分析すればする程、頭を抱えるレベルの重大な推測が判明するばかり。現実逃避したくなってくるが、しかし今後の対策や方針を決める為には必要不可欠な分析である以上、避けて通れない事だ。

暫くの意見交換の後、結論は出された。

「……今後は情報収集に努め、国交はクワ・トイネ公国とクイラ王国、ロウリア王国に留め

よう」

その選択は、ベストではなくベター。そもそもとして、EDF日本支部は余りにもこの世界に対して無知過ぎる。魔法や現地生物もそうだが、何よりも世界各国や世界そのものの基礎的な情報さえもまだ充分であるとは言い難い。トドメに、EDF日本支部はそもそも外交能力は無きに等しい。

フォーリナー大戦によって世界各国の組織が崩壊し、EDFが主導となつて世界秩序を再構築した結果。EDFが事実上世界政府の機能を併せ持つ事となつた。そしてEDFの目的は人類と地球の守護、そしてフォーリナーに対する防衛戦力の構築。つまり人類同士による利権争いなどは二の次どころか三の次、対フォーリナー主目的の副作用でしかなかった。更に世界を統治していたEDFには「外交」そのものが必要なく、本部や支部同士でも基本的に顔色を伺う事さえ必要なかった。そして外交スキルを持つ政治家や外交官達は、フォーリナー大戦と人類内戦の戦火に巻き込まれて多くが死んでいった。EDF日本支部の情報局員が外交官を代理している事から、その人員不足が透けて見える。そもそも、あらゆる分野で人員が不足している。フォーリナー大戦によって失われた人材はあらゆる分野に影響を及ぼしているのだ。

更に、日本列島の復興がクワ・トイネ公国の貿易によつて凄まじい勢いで進行可能となつた現在、正直言つて他国と接触して余計な問題を起こしたくなかつた。

他にも魔法などと言った多数の不確定要素を考えると、情報不足のまま他国に接触するより、時間をかけて十分な情報を収集した後、動くのが確実だと判断し、重役会議は終了した。

しかし、この時の彼等はまだ知らなかった。
既に今、物語の歯車が欠けている事を。

この時の彼等はまだ知らなかった。
やがて物語の歯車は空転し、そして歯車が壊れる事を。

この時の彼等^{世界}はまだ知らなかった。
どうしようもない程の悪意を持った、悪意の結晶が現れる事を。

この時の彼等^{EDF}はまだ知らなかった。
世界の三分の一の命運が、彼等の手に託される事を。

第10話 悪夢の襲来

突然だがここで、日本列島を統治しているEDF日本支部の軍備配備について、少々語るとしよう。

他の支部や総司令部でも言える事だが、統治地域の基地は大きく分け3種類存在する。

一つは、旧国家の県や州相当の地域に分けて細かく陸空軍を配置する駐屯地。

一つは、陸空軍の大拠点及び防衛戦線の起点となり、そして対宙防衛戦に於いて使用される対宙兵器を配備。場所によっては海軍のドックと沿岸部^{奪還}反攻作戦の起点の一つともなる防衛基地。

一つは、上記の駐屯地や防衛基地を隷下に置き、統治地域最大の施設と軍備を配置。絶対防衛戦線を築く本部基地。

日本支部の場合、本部基地は大阪に。防衛基地は千歳、帯広、山形、東京、岐阜、広島、高知、福岡、鹿児島に。駐屯地は日本国が定めていた都道府県に分けて配置されていた。

中でも駐屯地は、唯一とある任務が定期的に行われていた。どんな任務であるかは、

それを実行中の部隊の視点から語っていくとしよう。

彼等の部隊名は、スカウト11111。

その名が示すように、彼等は偵察部隊の一つ。部隊規模は小隊規模最少の8人であり、武装装甲車両グレイブに乗って荒野をそれなりの速度で走っている。

彼等の任務内容は、哨戒。担当地域に何か異常が無いかの確認であり、手を抜かないように気を付けつつ注意を払って周囲を見渡すだけの、簡単な任務。

何故そんな任務が行われているのかというと、端的に言えばフォーリナーの再出現の警戒だ。

フォーリナー大戦にてマザーシップ撃墜後、日本支部が主導した地球奪還作戦に於いて、4年もの月日をかけて幾多の巨大生物の巣を焼き払い、地球上の巨大生物を絶滅させたと言われている。

しかしし実際の所、EDFは現在も尚巨大生物を確実に絶滅させたという完全証明は出来ていない。彼等が成した事は、あくまでも人類の支配領域を地球全土に広げただけ。つまり巨大生物を絶滅させたという証拠は存在せず、悪魔の証明となっている。

を。

しかし人類は、未だにその事実よりもフォーリナーの殺意と恐怖が勝り、復興なんて戯言よりも軍事の増大を叫んだ。その事実を前に、EDFは暴走する熱意にドデカイ水を放り投げる事とした。

即ち、悪魔の証明による巨大生物の殲滅宣言。

勿論悪魔の証明の事は秘匿されて公表された。目覚ましの為に行う宣言にわざわざ爆弾を紛れ込ませる阿呆は居ない。結果、市民達は漸くフォーリナー大戦が終わった事を自覚し、世界復興へのステップを正しく踏む事に成功した。

そしてEDFは、世界復興と並行して巨大生物の再出現に警戒していた。世界復興の最中に再び巨大生物が現れば、復興がやり直しになるばかりか、直ちに殲滅しなければ世界がパニックになって幾多の死傷者が出る。そして殲滅宣言を出したEDFの信頼と権威は失墜するだろう。万が一再出現しても、直ちに殲滅する事で被害を最小限に止めようとしていた。

が、1ヶ月経つても、半年経つても、1年経つても、5年経つても、そして現在に於いても、結局巨大生物が再び現れる事は無かった。その為、哨戒任務をこなすスカウト隊も少しずつ肩の力を抜き始め、今ではある程度気楽に任務に当たっている部隊が殆ど

だ。

スカウト1—1—1もそんな部隊の一つだ。

彼等は哨戒範囲をグレイプに乗って走り、時には停車して周辺に何か異常が無いかを細かく調べたり、時には食事の為に景色がいい場所で休憩したり、任務をこなしつつ小さなピクニックでも行つてゐるような物だ。無論すっかり周辺警戒しながらだ。

哨戒任務も終盤に差し掛かり、後二ヶ所を哨戒すれば帯広防衛基地に帰還する予定だ。

「しっかし相変わらず、不毛な光景が広がるなあ…」

グレイプに搭載されている50mm軽速射砲を動かす砲手は、カメラから見える光景にそうボヤク。

彼等が走っている所は、元々は森林が広がっている場所だった。今はもう、そんな光景は影も形もないのだが。

地球奪還作戦第一フェーズの日本奪還戦に於いて、北海道、関東、中国地方西部、四国、九州地域はフォーリナーとEDF双方の大火力兵器による掃討戦によつて掃滅的被害を被り、世界復興にて整備された一部の箇所を除いて現在も廃墟の街や汚染された大地が広がっている。

「くあ…」

それなりの速度で不整地を走る揺れ（グレイプのサスペンションである程度軽減されている）が砲手の眠気を誘い、欠伸をする。

「おいおい、任務中にサボり眠は勘弁してくれよ?」

「分かつてる分かつてる、しつかり周囲警戒はしとくからさ」

運転手に欠伸の声を注意され、頭を軽く振りつつ息を吐いて眠気を振り切る。

車両後部の乗員席には残りの6人が座っており、覗き窓から周囲を見つつ会話を盛り上げていく。

話題は様々だ。クワ・トイネ産の天然食料の話、エルフやドワーフなどの種族の話、現地世界についての話、魔法や魔術といったファンタジーな話、各人なりのファンタジーな妄想や想像の話。何せ日本列島の外側は、文字通り「ファンタジー」が広がる世界。一体どんな光景が広がるのか、好奇心を刺激しない者は恐らく居ないだろう。

その光景は、会話の話題以外はこの数年で繰り返されるいつもの場面だった。

しかしそれは、各人の超小型生体電波両用識別式レーダーに反応が示される事によって崩壊した。

「ッ!!!」
「!!!」

運転手は咄嗟に急ブレーキを掛け、急停止。他の者はその勢いに身体のバランスを崩したが、それどころではなかった。

「…嘘だろ？」

それは、決してあつてはいけないモノなのだから。

「…ッ、砲手と運転手を除いて降車！レーダー故障も万が一にあり得る。目視で確認するぞ…！全武装安全装置解除、備えろ…!!」

隊長の指示によつて、1人の隊長と5人の隊員達がグレイプから降車。レーダーの反応群のある前方に各人の武器の銃口を向け、ゆつくりと前進を開始。反応群は丘の向こう側にいる。慎重に――

刹那、反応群がスカウト11111111に向けて接近を開始。

「ッ隊長!!!」

「射撃用意!!何にしても直接確認してからだ…!!」

そして。

リーダーに映る赤の反応群が。

丘を、越えた。

「ウ、オアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!」
「ツ撃え!!撃ちまくれええええええええええええええええ!!!!」

『帯広基地、帯広基地聞こえるか!?此方スカウト1111!!至急応援を願う!!』

『此方帯広基地!スカウト1111111111落ちて下さい!一体何があったのですか!?!』

『兎に角速く応援を寄越してくれ!!スカウト1111111111は現在コードブラックケースα下に置かれている!!』

『コードブラックケースα:ツ!?まさか、そんな!!』

『ああクソツ!!そんなに信じらんねえならハツキリ言つてやる!!!』

『スカウト111111は蟻型巨大生物多数と再遭遇!! 現在戦闘中!!!!』
中央暦¹⁶³⁹年7月26日
西暦2029年2月22日。

日本列島北海道にて、複数の蟻型巨大生物が同時多発的に再出現。

第11話 英雄以上、『英雄』未満

「状況はどうなっている!？」

「帯広基地からコードブラックスケースαが発令!! 詳細状況不明なれど、複数のスカウトチームが蟻型巨大生物と交戦中との事です!!」

「近海で投入可能な全海軍を北海道近海に集結させろ!! アリコーンも緊急招集だ!! 全空軍もスクランブル出撃態勢に移行!! 北海道から巨大生物を1匹たりとも逃すな!!」

「ミッドナイト爆撃機、カロン爆撃機、ファイターは既にスクランブル態勢!! 第5、第6、第7艦隊も出撃準備中!! 先程まで哨戒任務を遂行していた第8高速艦隊の各分艦隊は既に200ktで北海道に向け航海中!! 最寄りの第2分艦隊は後5分で北海道近海に到達可能!!」

「フロントライン、スプリガン、グリムリーパー各隊に本部権限による出撃準備命令を送信!! オメガチームは既に出撃済み!!」

「巨大生物に関する詳細状況は無いのか!？」

「スカウトチームからの情報が錯綜しており分かりません!! 各隊は遅滞戦闘を続行中!!」

「帯広基地からの増援部隊の到達は最寄りの部隊でも後3分かかります!!空挺機甲部隊は突破阻止線を急速構築中!!第6機甲大隊及び第8歩兵連隊の到達予想は後30分後!!」

「北海道から巨大生物を1匹たりとも出さな!!もし突破されたら、それは世界の終わりに等しいと思え!!」

『サー、イエツサー!!』

「うおおおおおおおッ!!!!」

「右側面、15匹!!」

「リロードする、援護を!!」

「俺がやる、焦ってマガジン落とすんじゃねえぞ!!」

「全員焦るなよ!増援がもうすぐ来る、足止めを第一にするんだ!!」

最初に巨大生物と接敵する事となったスカウト11111。

彼等は今、全火力を眼に迫る蟻型巨大生物に投射している。AF20アサルトライフルやスパローショットM3ショットガン、50m軽速射砲による弾幕で蟻型巨大生物の突進や接近を阻んでいる。

「クソツタレ!! 彼奴ら6年前より硬くなってやがる!」

しかし、巨大生物はこの6年の中で進化していたらしい。今迄は充分な威力を誇っていたAF20やスパローショットM3の銃弾の効き目はやや悪いように見える。そして偵察部隊であるが故に、ロケットランチャーなどの重火器を充分な数で持つてこなかったのが仇になった。

ゴリアスD2のロケット弾頭が、1匹の蟻型巨大生物に直撃。半径十数メートルの爆発によって複数の蟻型巨大生物を吹き飛ばす。

「隊長のゴリアスと50mmが頼りです!! 外さないで下さいよ!」

「お前らこそ、弾幕薄くするんじゃないぞ!! 近付かれたらゲームオーバーだ!!」

巨大生物の基本戦術は引き撃ち。

フォーリナー大戦前の戦術では、巨大生物の耐久力や数に押し潰されるのは目に見えている。その最中に生み出された、常に流動する防衛戦線。文字通り部隊全体が後方に下がりつつ、全火力を以って巨大生物の大群を漸減。そして殲滅させる機動戦術。

これをギガンテスやベガルタなどの機甲部隊が行うならば比較的容易い事。しかしこれを歩兵部隊が行うとなると、戦前の軍隊よりも技量を必要とする。

一つに、目の前に迫る巨大生物の大群の恐怖心を押さえ込む必要がある。

一つに、時速50km/hで迫る巨大生物の大群を確実に足止めする為の火力投射箇所を常に判断し続ける必要がある。

一つに、常に全力後退しつつ火力投射を行い続ける必要がある、周辺の正確な地形判断と一定以上の体力を必要とする。

殆どは機甲部隊にも求められる事だが、一定以上の体力というのが中々厄介な点になる。対巨大生物との戦闘の際には、閉所などといった環境でない限り、常に後方に全力疾走しながら弾幕を展開する必要がある。これが200mや400mならまだ良いが、しかし一戦闘毎に必要とされる平均疾走距離は数キロメートルを必要とする。

幾ら第3世代アーマースーツの機能があっても、並大抵な身体能力と精神力ではフォーリナーと戦うことは出来ない。つまり故にEDFは少数精鋭主義による、究極的な質の獲得を第一とし、そして成功した。

だが。

「畜生、畜生、畜生!!!こいつら一体全体何体居るんだよ!!!?」

スカウト111111は、巨大生物の物量に押し潰される寸前に陥っている。

6人の^{偵察部隊}スカウトチームと1台のグレイプに対し、数百の巨大生物の戦力比では、余りにも荷が重い。

「泣き言を言う暇があったらマガジンを交換して引き金を引き続けるんだ!! 応援はもうすぐ来る!!」

「つつても目の前まで詰められてますよ!?! 言っちゃあれですが、めっちゃキツイです!!」
「俺達が奴等の昼飯になりたくなきや死ぬ気で踏ん張るんだよ馬鹿野郎!!!」

怒号と銃声、巨大生物の悲鳴と足音が鳴り響く戦場。スカウト111111は半包围寸前の絶体絶命下に置かれても、決して絶望に膝を付くこと無く全力を尽くしている。

それ故に、彼等は間に合った。

「リーダー捕捉。スカウト111111は未だ健在のようです、よくやってくれています」

「総員、安全装置解除」

スカウト111111の後方から、地上を人間離れた速度で走る8人の人間。

『スカウト111111、聞こえるか? 此方オメガチーム、20秒後に合流する』

「此方スカウト111111!! 此方は半包围寸前、20秒も保つか分からん!!」

『10カウントする。合図で歩兵は伏せるんだ』

「了解!!」

『10、9、8、7』

眼前に迫る蟻型巨大生物。ひたすらに弾幕を張って阻止しているが、数匹が被弾に構わず突破してくる。

『6、5、4』

隊長のゴリアスランチャーの砲口が火を吹き、超音速のロケット弾頭が地面に着弾。爆発によって迫った巨大生物を吹き飛ばす。

『3』

巨大生物の壁が更に接近。全火力投射によって抑え込もうとしても、しかし物量はその火力以上に多い。

『2』

遂に巨大生物の牙が、隊員の1人を喰らおうと迫る。

『1』

咄嗟に後方に飛び込み、閉じた牙が空間を切り裂く。全力で飛び込んだ弊害で身体は完全に宙を浮き、そして背中から地面に着地。身動き出来なくなった彼に、巨大生物が群がろうとする。

しかし、巨大生物の行動が叶う事は無い。

『伏せろ!!』

通信越しの合図。一斉に残りの5人の歩兵も地面に伏せた。

同時に8本の赤い光線が空間を切り裂き、巨大生物群を数秒で灰に変えた。

「……………あぶ、ねえ……………」

「間一髪、だったな……よく耐えてくれた」

リーダーで周囲の安全を確認していた、地面に倒れているスカウト11111の隊長の元に、1人の兵士が手を差し出す。隊長はその手を掴み、立ち上がって顔を合わせた。

「此方こそ、救援に感謝します。オメガチーム」

現在のEDF日本支部には、5つの精鋭部隊が存在する。

ストームチームとして構成されるフロントライン、スプリガン、グリムリーパー。彼等は全人類の中でも最精鋭かつ最強の、人類史最大のジャイアントキリングを成した人類が生み出した化け物人類の最頂点。

決戦要塞X7ー1アリコーンを守護するシュヴァルツェ・ハーゼ。欧州の地獄の戦場に生まれ落ちた、フォーリナー大戦によって量産された英雄によって創られた部隊の一つ。

そして、オメガチーム。

彼等はただの英雄部隊にあらず。彼等は恐らく、フォーリナー大戦の最前線で誰よりも『英雄』の戦いを目撃し、『英雄』と共に戦った。

しかし『英雄』を追いかける事は出来ても、『英雄』と肩を並ぶ事は、並の武器では不可能だった。だから、E.D.Fは彼等に並外れた武器を持つ事を許した。

ブレイザー……またの名を、原子光線銃。

その武器は、法外ともいえる程のコストと技術力を結集して作り上げられた、フォーリナーテクノロジーと純粹科学が融合した超技術の集大成。全長僅か1mの銃に装填されるエネルギー・カプセルには小型原子炉並のエネルギーを搭載し、その膨大なエネルギーによって1万ボルト級出力で放出されるレーザーは、巨大生物を瞬時に灰に還す。当然、万が一人間を誤射した時など、アーマースーツの防護など刹那で無意味と化して、灰の仲間入りになるだろう。しかし彼等の技術の前には、最早誤射などという概念は存在しない。

だからこそ、全世界でも僅か13名しかいないブレイザー保有権利の内8名、つまり

部隊員全員が保有する事を許されている。

少数精鋭主義の結晶の一つであるオメガチーム、そして全世界で僅か13人しか持つ事を許されない超兵器。

この2つのピースが合わさったらどうなるのか？

その結果が、スカウト1111の眼前に広がる、数百の巨大生物分の灰の山。

「此方オメガチーム、スカウト1111と合流に成功。死傷者及び負傷者は無し」

『帯広基地、了解しました。…オメガチーム及びスカウト1111へ。現在後方では空挺装甲部隊と第6機甲大隊、第8歩兵連隊による突破阻止線を構築中です。貴方達には北方へ強行偵察、巨大生物の巣穴の発見をお願いします』

「オメガチームより帯広基地、我々のみでの強行偵察か？」

『いえ、多方面から複数のレンジャー隊が5分後に強行偵察します。しかし推定規模の戦力差によって、多くの成果は持ち帰れないと推測されます。また爆撃機による掃滅爆撃も、巨大生物がゲリラ化する可能性があるとして、現時点では不可能です』

「了解した」

オメガチームの隊長が帯広基地との通信を終え、再びスカウト1111に声を掛

ける。

「…という事だ。我々はこれより巨大生物の巣穴を発見する為に強行偵察を行う事になった」

「了解しました、英雄部隊と共に行動できる事は光栄です！」

「むず痒い事を言わないでくれ。本物の『英雄』には負けるさ。…スカウト111111はグレイプに乗車して、車内から援護射撃を頼む」

「其方は？」

「俺達は——」

その時。リーダー画面の上端が、赤に染まる。

「——どうやら話の時間は終了らしいな。すぐにグレイプに乗ってくれ」

「了解」

オメガチームはブレイザーに装填されていたエネルギー・カプセルを交換し、スカウト111111はグレイプに乗車し、車体横に小さく付いている覗き窓を開放。そこからAF20やスパロウショットM3の銃身を通し、射撃準備に入る。

「グレイプのドライバー、聞こえるか？」

『感度良好です、オメガチーム』

「全速前進だ。火力と速度で前方を強行突破する」

『全速前進、ですか?』

グレイプの最高速度は100km/h。不整地の此処ではどれだけ出せても70km/h程度しか出せないが、それでも並の兵士ではとても追い付ける速さでは無い。

「ああ、全速前進、真つ直ぐにだ。ハンドルも必要以上に切る必要は無い。俺達が道を開ける」

『…了解! 発進します!!』

グレイプのエンジンが咆哮を上げ、前進を開始。ギアを最高のタイミングで切り替え、理論値に近い加速性能で加速を開始。同時にオメガチームも疾走を開始。グレイプと並走する。

「……………うっそだろ?」

グレイプ横の覗き窓から、疾走するオメガチームを目撃した隊員の1人が、思わず呟いた。既に時速は60km/hは出ているだろう。しかしそれでも、オメガチームはグレイプの横を走っている。いや、正確に言えばオメガチームは前に跳んでいる。

確かに第3世代アーマースーツの筋力補助機能を全開に発動し、走る事が出来ればグレイプにも並走出来る速度は理論上獲得出来る。しかしそれを達成するには、恐ろしい程の難易度を必要とする。簡単にイメージするなら、交互に発動する2つのロケットブースターを搭載した一輪車を乗りこなす必要がある、といえはその難しさは分かるだろ

う。

故に、それが出来るのはごく一部の部隊に限られている。

そして、眼前に蟻型巨大生物の大群が目に見える。同時に、オメガチームのブレイザーとグレイプの50m軽速射砲が咆哮。8つのレーザーが巨大生物を灰に還元、50m軽速射砲で巨大生物の体を穴だらけにする。

真上から見れば、巨大生物の大群黒い大波がオメガチームとスカウト小波を飲み込もうとする光景が見れるだろう。

相対速度は100km/hを超え、僅か接敵から僅か数秒で2つの波は衝突。

そして、小波が黒い大波を穿ち始めた。

「……………スゲー」

小波の中心部、グレイプを操るドライバーは、眼前の光景に思わずそう呟いた。

彼はただアクセルをベタ踏みし、真っ直ぐ、真っ直ぐに進んでいる。左右には一切曲がっていない。既に巨大生物の大群のど真ん中にも関わらず、何かとぶつかる気配もない。

当然だ。

何故なら、オメガチームがグレイプの道を切り開いているのだから。

前方を中心に集中砲火される8丁のブレイザーのレーザーは、十何体かの巨大生物を貫通し、瞬時に灰と還し、更に十何体を瞬時に灰と還す。グレイプの道を開けるついでに、自分達の突破線を開けるといふ常人離れしたその神業を真似出来るものは、極めて少ないだろう。

(これが、英雄部隊…)

そして、黒い大波を、越えた。

「戦況は？」

「帯広基地の空挺装甲部隊が構築した突破阻止線におよそ5000の蟻型巨大生物が接敵。部分的破綻の危機に陥りましたが、後続の第6機甲大隊及び第8歩兵連隊が間に合い、殲滅に成功しました。強行偵察については、オメガチーム及びスカウト1111の合同部隊以外は被害甚大。撤退を余儀なくされました」

「衛星が1つもない影響が重いな…戦力の集結状況はどうだ？」

「第8高速艦隊は既に北海道を包囲。沿岸部に巨大生物を確認次第、直ちに主砲砲撃に

よって殲滅しています。アリコーンは600mmレールキャノンによる強行偵察部隊へ超遠距離砲撃支援を展開中。フロントライン、スプリガン、グリムリーパーは北海道以外の出現に備えて即時出動態勢で待機しております。空軍は全爆撃機はスクランブル態勢。帯広基地のファイターは現在突破阻止線に接近する巨大生物を漸減中」

「今の所は、なんとかなるか…」

「しかし油断は出来ません。現時点で推定される巨大生物の規模は、最低10万です」

「…最低クラス3の巣穴か」

「クラス3以上になると、重装甲弾頭及び空間制圧弾頭テンペストミサイルによる^{戦略地形崩壊作戦}アースブラストの実行は出来ませんそもそもクラス2以下の巣穴にアースブラストを実行しても、巣穴周辺の環境は甚大な被害を受ける。…歩兵部隊の突入が必要となります」

「…時間を掛けれないな。奴らの増殖力を考えても」

「司令ちよーかん、いま良いかな?」

「篠ノ之博士?…手短かに」

「分かっている。さつき帯広基地の生物分析部から私宛にも直接データが届いてね。調べてみたんだけど、これが割と大事なデータって事が判明したんだ。はい、これが精査したデータの書類」

「見よう。……………何だと？」

「中々クソツタレなくらいに愉快なゲーゲーだよね。もしかしたら奴等、弱り過ぎて耐え切れずに出てきた可能性があるだなんて」

第12話 拍子抜け

2029/2/22 10:12

スカウト1-1-11による巨大生物再出現報告をきっかけに、スカウト1-1-3、1-1-4、1-1-9、1-1-13も同様の報告が帯広基地に緊急報告。

2029/2/22 10:14

帯広基地、コードブラックによる特別権限を発動。空挺機甲部隊、第6機甲大隊、第8歩兵連隊を緊急出撃。突破阻止線の急速構築を開始。同時に近辺にて機動訓練を行っていたオメガチームにも出撃命令を送信、オメガチームはこれを受諾する。

2029/2/22 10:17

大阪本部、全基地及び全駐屯地に第一種即時出動態勢移行を宣言。近海で投入可能な全海軍を北海道近辺に集結させ、全空軍をスクランブル態勢に移行させる。

2029/2/22 10:19

決戦兵器X7-1アリアコーン艦長 マティアス・トーレス、対フォーリナー防衛戦争に於ける決戦兵器独自運用指揮権の発動を宣言。600mmレーザによる超遠距離砲撃支援を開始。

2029 / 2 / 22 10 : 26
 オメガチーム、スカウト1-1-1との合流に成功。複数のレンジャーチームと同時に強行偵察を開始。

2029 / 2 / 22 10 : 27

空挺機甲部隊、突破阻止線構築地点に降下。突破阻止線の構築に成功。

2029 / 2 / 22 10 : 29

第8高速艦隊第2分艦隊、北海道近海に到着。沿岸部の巨大生物殲滅任務を開始。

2029 / 2 / 22 10 : 30

蟻型巨大生物群5000この時点では5000と推定されていたが、戦闘中の双方の増援も相まって総数の把握が困難となった。後の調査で最終的におよそ1万弱だったと判明するが突破阻止線に侵攻を開始。空挺機甲部隊戦闘開始。

2029 / 2 / 22 10 : 43

第8高速艦隊、北海道近海の包囲を完了。

2029 / 2 / 22 10 : 51

空挺機甲部隊及びファイターのみによる防衛戦線が部分的破綻に陥りかけるも、後続の第6機甲大隊、第8歩兵連隊が突破阻止線に到達。形勢の逆転に成功し、巨大生物群の殲滅に成功。

2029 / 2 / 22 10 : 52 ~ 11 : 29

小康状態。強行偵察を行っていた複数のレンジャーチームは被害甚大により撤退。

2029 / 2 / 22 10 : 30

オメガチーム、スカウト1—1—11合同部隊、巨大生物の巣穴を発見。攻撃部隊が編成される。

2029 / 2 / 22 10 : 30 オメガチーム—帯広基地 通信記録

オメガ：帯広基地、聞こえるか？此方オメガチーム。

帯広基地：帯広基地、感度良好です。

オメガ：巨大生物の巣穴を発見。推定クラスは3。現在位置を送信する。

帯広基地：…受信を完了しました。直ちに攻撃部隊を抽出します。オメガチームは可能ならば巣穴の入り口を確保の継続をお願いします。

オメガ：了解。…それと帯広基地、妙な事がある。

帯広基地：妙な事、ですか？

オメガ：ああ、余りにも静か過ぎる。入り口とはいえ、奴等の足音が響かないにも程

がある……酷く静かだ。

帯広基地……まさか、罨？

オメガ：入り口を覗くだけじゃ何とも言えないな……ただ罨にしろ何にしろ、奴等の家を放つておく理由はない。突入部隊と合流して突入するしかないだろう。

帯広基地……了解しました。

「……………やはり、妙だな」

「……ええ、妙ですね」

第8歩兵連隊から抽出された第1陣の突入部隊と合流したオメガチームは、突入部隊長直々に部隊の指揮権を譲渡され、巣穴に突入していた。

が、その直後からその違和感は部隊全体が感じとり、不気味に感じさせていた。

「巨大生物の気配が一切しないなんて、明らかにおかしい……」

そう、彼等は戦つてすらいない。巨大生物と戦うどころか、その姿を見る事なく少しずつ深部に向けて進行を続けている。

「……どうします？1度ここに中継地点を設置するというのも……」

「…確かにな。これ以上入り口から離れた箇所に置くのは得策じゃない。どこかの広場に出たら中継地点を設立しよう」

「了解」

会話は途切れ、静寂が包み込む。視界は各人のヘッドライトランプによる明かりしか確保出来ておらず、極力音を立てぬように静かに、ゆっくりと進む。いつ巨大生物の大量が、通路を埋め尽くす程の物量でやってくるか分からない恐怖、そして巨大生物の棲家であるという恐怖、2つの恐怖を押し殺す弊害で、何人かの兵士の顔を冷や汗が伝う。暫く通路を静かに進み、やがて彼らは広場の入り口にたどり着いたらしい。狭かった壁が急速に広がり、ヘッドライトランプでは奥までの視界を確保出来ない。幸い今の所天井は低く、頭上からの襲撃はあまり考えなくても良さそうだ。

広場にたどり着いた者達から順に、周辺を見渡して死角を無くしていく。リーダーがあるとはいえ、しかし目視以上に信頼出来る物は無いだろう。どれだけ高性能な機械であったとしても、最終的に己の目で目撃する事が最も信頼出来る情報の一つだろう。

歩いていくと、その先に地面が無くなっている。どうやら縦穴か坂があるらしく、現在地では広場の全体を見渡せない状況だ。

彼等は言葉を交わすまでも無く、静かにその先に立つ。

「……ツ!!!」

そして彼等の眼前に広がった光景に、それを見たほぼ全員の表情が歪み、思わず引き金を引きかける。

彼等が立つ場所は、縦穴の端。そこまで深いわけでは無く、約15mと言ったところだろうか？

問題は、その縦穴の底に、蟻型と蜘蛛型の巨大生物の大群が存在しているという事だ。

「撃つな……！」

「しかし、このままでは……！」

「落ち着け、レーダーをよく見るんだ」

オメガ隊長の冷静な声が、恐慌状態になりかけた隊員達を落ち着かせる。そして、それに従ってレーダーを見ると。

「…反応が無い？」

そう。レーダーは、彼等のシグナル以外には何も感知していない。なのに、彼等の眼前には巨大生物の大群が存在している矛盾。

「…一体、どういう……」

「恐らく、レーダーに反応しない程極端に弱ってるか、死んでいる。こういうパターンは無くはなかった」

「…地球奪還作戦」

「ああ。その最中の巢穴攻略作戦や人類領土奪回作戦の時、ごく稀に見た光景だ」

話をしながら、彼等は僅かに残されている坂道を見つけ、ゆっくりと降り始める。

「こうなる理由の一つとして考えられているのは、食料不足だ」

「どういう訳かは未だ不明だけど、奴等の繁殖力は場合によっては過剰になる時がある。そうなったら、繁殖力に反して食料の確保が不足し、結果共食いを始め、最終的に総数が減少する。けど、それでも足りなかつたら休眠状態に移行し、消費エネルギーを極端に減少させる」

「だけどその状態が長く続けば、やがて奴等は眠ったまま餓死し、ゴミの山を築き上げる…これが、地球奪還作戦の最中に見られた、巨大生物の自然死の過程」

大阪本部にて、大石司令に精査データ書類を手渡した篠ノ之束は、巨大生物の生態の一つを解説していた。

「…この状態が、北海道で起こっていると？」

「多分。湧いてきた奴等は比較的動ける奴等で、北海道の外に出る元気は無いと思うよ。かと言って油断して喰われて元気にさせたら、どうなるか分かったもんじやないけど」

「しかし、なんで今になって…」

「こればかりは今は何とも言えない。そもそも巨大生物の生態自体が異常なんだよね。話すと長くなるから割愛するけど、明らかにフォーリナーが最初つから生物兵器として調整しないと、こんな変な生態にならない。生態そのものが管理者がいる事を前提として組まれてる」

そういう彼女の様子は、巨大生物に対する憤怒を隠す様子がなく、目を僅かに細めていた。

「…この様子だと巣穴の制圧もすんじやないかな？後は北海道で暴れてる連中を殲滅すれば北海道は安全になる筈。問題は他の地域だよ」

「…ああ。北海道の一件で、1度フォーリナー支配領域に堕ちた地域の安全が確約出来なくなつた。北海道の一件を引き金に、各地で巨大生物が沸き始めてもおかしくない」

「戦力を北海道に集中させて大丈夫なの？東北、関東、東海に巨大生物が沸いたら分断されかねないよ。…正直何処で湧いてもそうなるだろうけど」

「あくまでも即時動員可能な戦力を掻き集めただけだ。各地にまだ十分な戦力は残している。最悪の場合は防衛線構築を諦めて火力制圧戦ベルカ式国防衛を行う事も想定している。…行い

たくは無いが」

「大石司令、突入部隊より報告が入りました」

その時、戦術士官が大石司令に駆け寄った。

「何が起こった？」

「巢の制圧は想定以上のペースで進行中。巢内の巨大生物は殆どが休眠状態、もしくは自然死しており、最深部まで到達。連絡拠点構築後、後続部隊到着まで縦深確保路を維持するとの事です」

「…そうか。突入部隊は後続部隊と合流しつつ、巢の完全制圧を目指せ。防衛部隊は地上の巨大生物の殲滅、及び他の巢穴の捜索に移行せよ」

「……………」

その報告で大石司令が少し表情を緩めたのに対し、束はその表情を変えず、寧ろ少し難しい表情となった。

「…その報告の中に、女王に関する報告はなかったの？」

「…！」

「…いえ、報告はされております。しかし内容が問題です」

「巢穴最深部に、女王の部屋は確認出来ず。そして巢穴最深部の深度もクラス2相当と

の事です」

「は……!?!」

「いや、ちよつと待つて!?! クラスの差異はまだ分かるけど、それでもクラス2相当なら女王もいる筈! なのに女王の姿どころか女王の部屋すら無いなんて……!」

「オメガチームも同等の結論に達し、周辺の探索を行なっていたようです。しかし、最終的に女王の部屋は発見出来ず、そして不自然な通路の途切れが複数箇所確認したのみです」

「……………どういう事だ……………」

何の前触れなく、突如現れた巨大生物の再襲来。その終わりも、唐突で誰もが想定外な終わり方だった。

結局、オメガチームとスカウト1―1―1の合同偵察部隊が発見した巣穴以外の巣穴は発見されず、そして巣穴内部の巨大生物は、一部を除いて休眠もしくは自然死状態で、突入部隊は死者及び負傷者を1人も出さず事なく、巣穴の完全制圧を完了。

地上に於いても、空挺機甲部隊、第6機甲大隊、第8歩兵連隊が北海道全域を制圧。最初期に於いて強行偵察部隊や空挺機甲部隊に犠牲者が出たのを除けば、被害は一切出さないワンサイドゲームの展開が終始見られた。

その後、安全が確保された巣穴には調査チームや回収チームを派遣。そのメンバーの中には尾原博士EDF4(4.1)に登場する博士。原作ではフォーリナーに関する研究を行っており、新登場の敵の分析など際に登場する。が、本作ではオールラウンダーの篠ノ之束が居る為、リストラの方向で進んでいた。しかし最終的には「フォーリナーの前線分析要員」としての登場で登場出来た、という割と不憫な登場経緯を持つ。

：しかし今後、出番があるのか？や、特別に調査チームに組み込まれ、大阪本部から派遣された篠ノ之束の姿も見られた。

調査チームは巣穴の構造や現地に於ける巨大生物の解剖調査、回収チームは巨大生物の死骸や巣穴壁などの回収を担当。迅速かつ確実に行われた調査の結果は、余り芳しくなかった。

というのも、今回の事案に関して、そして巣穴の構造に関しての謎が分からな過ぎるのだ。

何故、このタイミングで極限にまで腹を空かした巨大生物が現れたのか。

何故、巨大生物はその状態になるまで巣穴に引きこもっていたのか。

何故、巢穴の通路が明らかに不自然な程綺麗に途切れていたのか。

今回の調査に於いて、その謎の答えを見つける事は出来なかつた。いくつか推測こそ出て、所詮は推測。そしてフォーリナー大戦に於いて、人類は楽観的な推測を立てた結果、その悉くが最悪の結果として返ってくる事が殆どだった。

その影響によつてEDFの不文律の一つとして、「推測で動く時は、常に考えられる最悪の推測を前提にすべし」と語られる程に、当時の見通しの甘さが全世界で語り継がれている。そして今回のEDF日本支部も、この不文律に基づいた行動を開始した。

EDF日本支部は第一種即時出勤態勢から第二種警戒配備態勢デフコンに於ける1と2の間に相当。本来はフォーリナーの船団が宇宙観測された際に発動する事を想定されている。に移行。陸軍は各地に分散配備され、巨大生物の再出現に警戒。空海軍も巨大生物再出現に備え、第5打撃艦隊、第6、第7機動艦隊、第8高速艦隊の各艦はローションで日本列島近海にて分散配備。空軍の各機もスクランブル態勢を維持しつつ定期的な航空哨戒が行われる事となる。

外交や現地世界調査は、ロデニウス大陸の外交及び交易を除いて完全に停止。日本列島防衛に全力を注ぐ事となる。

此処で万が一巨大生物を日本列島の外に出せば、再び巨大生物は命を喰らい、繁殖し、地獄を顕現させるだろう。

今の日本列島は、正に厄災が溢れ返りかけているパンドラの箱そのものだ。此処で対応を間違えて、箱から厄災を出すわけには行かない。そしてそんな時に、現地世界の調査や無関係の他国との新規外交などやっている暇も余裕もリソースも無い。故に此処までの対応をするのは残等とされた。

しかし、そんな嚴重態勢とは裏腹に、それ以降の日本列島には、1匹の巨大生物さえも再出現する事は永遠に無かった。

その原因を、彼等は永遠に知る事は無い。

残りの巨大生物と巣穴が、転移現象の際に、元日本領地に取り残されていたという事に。

「…まだ、宜しいので？」

「まだだ。あの時の二の舞は避ける必要がある。力が制限されていたとはいえ、奴等に敗北したという敗北という事実は変わらない」

「…」

「あの時は、人間をただの餌として見るのが間違いだった。故に驕らず、全力で踏み潰す。…魔帝様の為とはいえ、随分とつまらん戦いになるだろうな」

「もし、再び我らの元に太陽神の使いが現れた場合——」

「その時は我が出る。あの時とは違い、今は全力を出せる。蹂躪し、我らが食料の一つとしてくれる」

閑話 最悪に備えて

EDFには、さまざまな部局が存在する。その中でも一つ、ある特定の所にのみとんでもない特徴を持つ部がある。

その名は、兵器開発部という。

文字通り、EDFが使用する兵器全般のの考案、開発、試作を兵器開発部が担当している。

その種類は文字通り全般だ。歩兵火器は当然として、ミサイル、銃弾、レーザー兵器、大型兵器、戦車、ヘリ、ベガルタ、コンバットフレーム、戦闘機、爆撃機、艦船、決戦兵器、戦術兵器、戦略兵器。

誕生当時こそ国家軍の兵器などを数多く採用していたEDFだが、今現在使用される兵器の原型は全て、兵器開発部より誕生している。

その中でも特に、日本支部の兵器開発部は特異的と言える。

何せ、日本支部には人類史上最高と謳われる頭脳を持つ天才天災の篠ノ之束がいる。フォーリナー大戦前から画期的な発明をしていた彼女がいた為に、日本支部の兵器開発

部の加入ハードルはよりにもよつて彼女に付いていけるかどうかが一個の基準として機能してしまつた。

それ故に、彼女の加入以前の者達は置いてかれるかと奮起し、彼女の加入以後の者達も彼女に食らい付かんと奮起。自然と彼女に当てられて各人が其々の^{変態性}天才性を開花していった。…というか、開花出来なければ容赦無く置いてかれる蠱毒状態だつたというのが正しい。その蠱毒状態が、フオーリナー大戦によつて存分にその能力を引き出す事になつたのはある種の皮肉と言ふべきか。

そんな^{彼女等}彼等は今、兵器開発部の一室に集結し、テーブルを囲んでいた。

基本的にこうして集まる事は無い。何故なら彼等は其々設計図を引く種類が違う。ある者はレンジャー、ある者はウイングダイバー、ある者はフェンサー、ある者はビークル大型兵器、ある者は艦船、ある者は…いや、これ以上は長くなり過ぎる故に割愛する。

兎に角。各人の殆どが異なる分野の兵器設計者である以上、こうして集まる理由はそれ相応の事だ。

ある時は、兵器開発部全体で各人が引いた設計図に関する意見交換。ある時は、兵器開発部に与えられた予算の各人への配分決定。ある時は、一同の総力を結集して開発す

るト^ネンデ^タモ兵器の試作。中には本当に全力で巫山戯た目的で製作された兵^{かん}器^{しやく}もあるが（尚、発覚時は当然だが予算委員局長を筆頭とした上層部から怒られている）、大半は新技術の試作兵器である。

「…さーて、皆。この要求に応え得るスペックの兵器の概念を考えようか」

ある時は。

「日本支部のみで開発、維持、そして最前線へ投入可能な決戦兵器の原形を」

人類の切り札の象徴、決戦兵器の開発。

「…で、篠ノ之博士。何だつてこんなタイミングで決戦兵器の開発を？今、日本列島全域が第二種警戒配備態勢です。そんな状況下で数百m級の超大型兵器を建造する余裕があるとは…」

「そこは大丈夫。私が直接説得するし、このタイミングでも建造する価値がある兵器にさせるつもり」

「……」

「第二種警戒配置の理由は、巨大生物の再出現への警戒。今の所、北海道だけで済んでるけど……これがもし、ただ単にトンネルをずっと掘り続けてるだけだとしたら？もし10年後、巨大生物が現地世界に姿を表したら？」

「もし、現地世界にあの地獄が再現されたら、どうなると思う？」

「……」

沈黙。

それは、考えられる最悪の想像。フォーリナーはいつも人間の常識を破壊した。彼等の行動基礎の前には、有り得ないは有り得ない。奴等に対抗するには、荒唐無稽な説を考え、実現可能性を度外視し、最悪の中の最悪を突き詰め、そして逆転の策を考える。逆転の兵器を考える。

「そうなたら、現地世界……特に隣のロデニウス大陸や第三文明圏は確実に奴等の庭になる。それを阻止するには私達^{E.D.F}が動く他無いけど……此処で致命的な問題が立ち塞がるんだよね」

「……外征能力の欠如」

「正解」

正解が直ぐに出た事に気分を良くしたのか、東は指を鳴らす。

EDFの各支部の特徴として、「戦力の自己完結化」が挙げられる。これは、フォーリナー船団の対宙迎撃に失敗して大気圏内防衛戦に突入した際、全海域および全制空権の確保は絶対に不可能であると結論付けられている事に由来する。フォーリナー大戦にて見せ付けられたフォーリナーの航空戦力の物量は文字通り凄まじく、空軍は僅か16日で、既存艦隊の殆ども僅か数週間で殲滅された。現在では現代に復活した戦艦群や第6世代戦闘機、ファイターによる強力な海空軍を保有しているが、しかし全制空海圏の保有はまず不可能という結論に至っている。そんな状況下にて大規模な戦力や物資の輸送は厳しく、それ故に十分な数の戦力と十分な量の物資の備蓄が自然と行われていた。(後に明文化されたが)

その影響により、外征能力は自然と薄れていった。完全に無くなったわけではないが、しかし大規模輸送は余りにも非効率となっている。しかしその問題も転移現象が無ければ特に問題視されていなかった。

…そう、転移現象がその前提を180度ひっくり返してしまったのだ。

「インフラを最低限整えてるロデニウス大陸ならまだしも、それ以外の場所となるとまともなインフラも何も無いから…」

「…成る程、何らかの理由で外征せざるを得ない事態になったら…外征先でまともな軍事行動が出来なくなりますね」

「そ。無いとは思いたいけど、可能性がゼロじゃ無い以上ね…フォーリナー関連となつたら選択肢は無いような物だし」

「事情は分かつた。…で、どういふのを想定してるんだ？」

「まず大前提として、司令部機能を持った移動基地的な運用を想定。アリコーンみたいな決戦兵器独自運用指揮権による即席の移動基地化じゃない、最初っから移動基地としての運用を前提に入れる。攻撃能力に関しては、テンペストA0クラスの戦術兵器の投射能力、航空戦力の投射能力を搭載。機動力も最低限セントエレモ級イージス戦艦以上の速度は確保したい」

『……………』

再びの沈黙。

暫くして、1人が手を上げて発言。

「…あの。それ、無理がありません？」

すぐに彼等の思考に走ったのは、その一言に尽きた。

「……………だから皆のアイデアが欲しいなー、って」

グデリと東がテーブルに突っ伏す。

一応、彼女が想定したスペックを持つ決戦要塞自体は地球に存在していた。

エウロパ級要塞空母。

1番艦 *Euroopa*、2番艦 *Despina*、3番艦 *Fornjot*、計3隻のモンスター・キャリアー。その名の通り、空母としての機能は勿論として、マザーシップの攻撃にも耐え得る強靱な装甲を持つ。全長1400mもの船体に搭載された武装は、汎用主砲として4基8門の51cmレールガン連装砲、対空兵装として360基の巡航ミサイルVLS、420基の35mmCIWS、対地支援用として4基の対宙テンペストミサイルVLSを搭載。機関は核融合炉であり、その恩恵を受けて最大速度は30kt。デスピナ内部に簡易的な兵器製造機構、食料生産機構を備える等、無補給でも暫くは継続戦闘が可能となっており、正に「要塞空母」と言わしめるに相応しい性能を持っていた。

…つまりだ。東の要求スペックを再現しようとするなら、縮小版のエウロパ級要塞空母を建造する必要がある。幾ら天災達の集いとも言えども、「流石に無茶が過ぎる」の一言に尽きた。

エウロパ級要塞空母は、文字通りEDF総司令部を中心に様々なリソースを結集させて初めて完成した超兵器の中の超兵器。それを縮小させるとは言え、一個の支部がそう簡単に建造出来る代物ではないのだ。

「まあ万が一を考えると必要になるかも知れない、知れない、が……」

「このままじゃとても一個の支部が建造出来る物じゃないな……」

「何処か大きく妥協するべきじゃないか？ そうすれば可能性は出てくるだろう」

「いえ、あまり妥協し過ぎるのも駄目よ。移動基地的運用とはいえ、対フォーリナー能力を十分備えてないとただの的に成りかねないわ」

「……じゃあどうやってそんな艦を建造する？」

「……そもそも、艦という形で考える必要が無いのでは？」

一人の男の言葉に、全員の視線が向く。彼は航空分野に秀でた能力を持った人物だ。「確かに艦艇としてそんな代物をフルスペックで建造しようとするれば、それこそエウロパ級要塞空母レベルの巨艦となります。ですが今回、一番求められるのは「機動力」だと思います。如何に素早く現地に到着し、如何に素早く戦力を投射出来るか。それを考えると、攻撃能力と多少の戦力投射能力を妥協し、超巨大航空機を建造するのがベストなのでは……？」

「……どのくらいのを考えてるの？」

「司令部機能と航空戦力投射能力、そして戦術兵器投射能力を確実に搭載するとすると……最低でも全長3、400m。全幅と全高は……詳しく計算しないと何とも言えませんね。如何せん、これほどの巨大航空機の建造経験はないですよ」

「つまり前通りって訳だね」

「そうとも言いますね」

彼等の頭脳がフル回転を始める。何が問題で、何が解決手段となり得るか。思い付けるものをひたすらに議題に挙げる。

「まず、第一の問題としてどうやってそのレベルの超大型航空機を建造するか……」

「海軍艦の建造ドックを応用出来ないか？海軍艦は基本的にブロック工法で建造してゐる。複数のドックで部品を建造し、そして専用ドックで溶接を……いや、それだったら一から専用設備を作った方が早いんじゃないや……？」

「それをやろうとすると建造だけで5年以上を浪費するし、何よりリソースの消費が凄まじい事になる。それは避けたい」

「そもそも、そんな超大型航空機を離着陸出来るスペースを確保出来ないんじゃない？ロデニウス大陸なら可能な場所も見つかるかも知れないが、インフラや防衛環境的にも駄目でしょう」

「何も巨大滑走路を必ず作る必要など無い筈。航空機の中には、海上を滑走路とする機

種もある」

「…成る程、水上機か。それに加えて機体に補助ブースターを搭載すれば、機体の重整備の時には専門の点検設備を建造するだけでいい。弾薬輸送も輸送機を使えば簡単だ」

「…オツケー。原型の原型は固まってきたね。航空専門の人達は続けて設計図のアイデア出してみよつか。他の人は各自の自由に」

数週間後、EDF予算委員局的元の一つの計画書が提出された。

—決戦兵器X8 重巡航管制機（仮名）建造計画—

次章予告

神話の時代に、ある一人の男がいた。

伝説の魔獣や四色のオーガを従え、知能が低く統率の取れるはずのない魔獣を束ね、魔物の大群とともにグラメウス大陸から現れた。

他種とは隔絶した魔力を持ち、その力は圧倒的だった。

それ故に人類は連合し、太陽神の使いを召喚し、そして幾多の人類の命と3人の勇者の命を引き換えに、漸く封印に成功した。

——その、筈だった。

「復活したか……魔王ノスグーラよ」

「……お前は誰だ？」

この世界には、強烈な「悪意」を持つ者達がいた。

「我が名はダクシルド。魔王ノスグーラよ、貴様は我が復活させた。我はお前の創造神、古の魔法帝国……光翼人の末裔ぞ。我に忠誠を誓え」

「…」

彼等の目的はただ一つ。やがて復活する古の魔法帝国の為に、世界を献上する事のみ。その為に、目的を同じとする、古の魔法帝国によって生み出された魔王を利用する考えだった。

「貴様の力があれば、フィールアデス大陸に住まう人間共は容易く死滅する——」

「黙れ」

しかし。

「…何だと?」

「貴様が魔帝様…光翼人の末裔だと?その程度の魔力で、笑わせおる。確かに通常の種族よりは高い魔力を有しているようだが、所詮はそれだけだ。魔帝様の種族に比べれば足元にも及ばん。その上、翼も実体化するほどに魔力が落ちていないか。光翼人で翼が実体化するのは、死に際の老人だけだ。貴様の謳う光翼人の血など、そこらの雑種と同程度の薄さしか存在しない。その程度の存在が——」

「人間を、あの男を侮辱するなど、死に値する。故に死ね」

何事にも、想定外というのは存在し得る。彼の誤算は、それだけだった。

「…」

ダクシルドと名乗っていた男の心臓を右手で握り潰した魔王は、続いて左手の指を男の頭にあてがい、ゆつくりと頭蓋骨を貫通させながら脳髓に触れる。

魔法を発動。男の脳の記憶細胞から情報という情報を吸い取り、我が者とする。

「……………ふむ」

一通りの作業を終え、両手を抜き取り、こびり付いた血と脳漿を払い払う。最早、数十秒前に殺した死骸に一片たりとも興味は無かった。

自身が封印されてからの歴史、死骸からの視点のみとは言えどもそれは、自身が封印されていた間の出来事を知るには充分。

アンニユンリール皇国、パーパルディア皇国、ムー、神聖ミリシアル帝国、e t c、e t c、e t c、

どうやら、自身が封印されてからの世界も、大した進化はしていないらしい。およそ

12000年が経過した現在でも、まさか古の魔法帝国の足元にも及ばぬ国力しか持たぬ国々しか存在しないとは。想像以上に人間共は怠惰で平穩な時を過ごしていたらしい。相応の時間と時間は掛かるが、しかし世界を我が手にするには然程――

(――いや)

その時、脳裏に浮かぶは一人の男。矮小な人間でありながら、しかも魔力の残滓さえも持たぬ男。太陽神の使いと謳われ、己に身体一つで挑んできた者。

『人間無礼舐めるるんじやねえぞおおおおおッ!!!』

ああ、そうだ。彼だ。彼こそが、神話に語られるべき英雄だった。どう考えてもあの4人は、「勇者」などと驕られ、語られるべき英雄では無かった。

彼こそが、英雄勇気ある者だ。

(――ああ、そうだ。奴等は、人間は決して矮小な存在ばかりでは無い。彼のような、素晴らしき男が、確かにいた)

(目を瞑れば、今でも鮮明に思い出せる。あの男との戦いを、闘争たたかいを、戦争たたかいを。我が生まれてからあの戦い程に有意義で、素晴らしい戦いは無かった)

(そう、素晴らしい……素晴らしい戦いだつた。だからこそ我はもう、人間を嗤いやしない)

目を開き、空を見上げた。

「全身全霊で、敬意を持つてお前達^{人間達}を相手しよう」

化け物を憎む人間と、人間を認め^{愛した}た化け物。

その存在は対極のように見えて、しかし確実な共通点があつた。

どれだけ人外の領域に踏み込もうが、結局は人類種の1人であるという事実。

そうだ、彼等が知ら^{知りたくなかつた}ない世界には、どうしようもない程にドス黒い悪意を持った存在

がある。それと比べれば、人の悪意など余りにも小さい事だ。

しかし人の本当の想いは、そう簡単に出るものではない。だが究極の状況に追い詰められた時、その口から紡がれる言葉^想は、何処までも純粹で真実の色を帯びるだろう。

だからこそ。

「此処を一步も通すなあつ!! 此処を突破されれば王国は蹂躪されて滅亡するぞ!!」

叫べ。

「撃って撃って撃ちまくれ!! 我が軍の力を下劣な魔物共に見せつけるのだ!!」

叫べ。

「おのれ化け物共があああああああああつ!!!」

叫べ。

「皇国の存亡の危機に、そんな些細で巫山戯た事を口論する暇があるのか貴様らア!!!!」

叫べ。

「私はッ!!今までも陛下のお側に居たいのですッ!!どんな時であっても、私は…ッ!!!!!」

叫べ。

「列強の誇りなど捨てるんだ!!存続の為ならばどんな国でも頭を垂れる!!」

叫べ。

「皇国万ざあああああああああいつツツツ
!!!!!!」

叫べ。

「魔法がどうしたあ!!人類の科学舐めるんじゃないぞねえぞ!!!!」

叫べ。

「10年ぶりのジャイアント・キリングか…！」

叫べ。

「素晴らしい、素晴らしいぞ!!あの太陽神の使いをも凌駕した、その力!!まるであの男の
ように…!!」

叫べ。

「ああ口惜しい、口惜しい、口惜しい!!何故我は、あの男と同じ人間として生まれる事が
出来なかったのだ!!!」

叫べ。

「我を今度こそ殺してみせろツ!!素晴らしき人間よツ!!!」
「俺達が求めるモノ平和に、お前は邪魔だ、消えろ…!!!」

その果てに見えるモノは、叫んだ者にしか見えないだろうから。

本編第二章

第13話 魔王再来

何の因果か、何がきっかけか。EDF日本支部が突然迷い込んだ異世界…通称「現地世界」には、大きく区別して以下の地域に分けられる。

中世以下の文明技術レベルの中小国のみによって構成される文明圏外国群。

近世の文明技術レベルの国家が存在する第三文明圏。

近代の文明技術レベルの国家が存在する第二文明圏。

世界屈指の文明技術レベルの国家が存在する第一文明圏、通称「中央世界」。

こうして見ると、この世界はとても異様で、とても不気味だ。

たかが大陸を1個渡るだけで、大陸全体の文明技術レベルが百年レベルで異なっている。此処までの規模による文明技術レベルの差異は地球世界でも中々存在していかつた事であり、普通では考えられない事だと歴史学者は頭を抱えていた。何せ調査によると一つの世界に中世、近世、近代の文明が綺麗に分断された状態で存在している。しかも規模は違えど交易が行われている状態だ。

…しかしその不思議も、今のEDF日本支部からすれば割とどうでもいい事ではある。

が。

確かにインフラなどの問題はありますが、しかしそれは現地世界に進出する場合の話だ。ロデニウス大陸のクワ・トイネ公国やクイラ王国との国交で充分以上の天然食料や地下資源を入手出来ている以上、資源目的でこれ以上他国と国交を結ぶ必要は今の所無い。それに正直な話、これ以上他国と国交を結んで外からの問題を抱えたくない。

先の北海道巨大生物再出現によって現地世界の調査は完全に中断されているが、判明している情報だけでも、現地世界の少なくない国家が覇権的、華夷秩序的思想を持っており、無策の接触は不必要な争いの種になりかねない。巨大生物再出現の可能性がある今、余計な問題を外から持ち込まれるのは、正直言つてごめん被る。それが日本支部の結論だった。

人類の守護者の役目を果たす彼等でも、この世界では守れる命は余りにも少ない。それ故の、結論だった。

そして、今回の物語の始まりは。

日本列島北方。第三文明圏大陸　フィルアデス大陸と未開大陸　グラメウス大陸を結ぶ細い地峡の中央部に存在する、文明圏外国　トーパー王国。

トーパ王国は、他の文明圏外国とは明確に異なった特徴が一つある。

王国の北方領域には、「世界の扉」と呼ばれる広域城塞を有する城塞都市トルメスが存在する事である。トーパ王国は建国当初から、魔物が多数生息するグラメウス大陸から魔物の侵入を防いでいる。それ故に（第三文明圏の）人類の守護国としての誇りを持っており、そしてその軍事力も、文明圏外国として見ると突出した物がある。

しかしその戦いが毎日あるかどうかと言われると、否だ。そして今日も、そんな1日の時間が少しづつ過ぎていく。

「くああ…眠い。寝てえな…」

世界の扉の最上部、監査室の窓の縁に寄りかかりながらグラメウス大陸を見ているのは、非常勤として雇われている傭兵のガイ。欠伸を少しだけ噛み殺しながら、眠たげな声を出している。

「グラメウス大陸の監視は人類の生存に関わる重要な任務だぞ、ガイ。シャキツとしてくれ」

ガイの様子に苦笑しながら軽い注意を促したのは、トーパ王国所属のエルフの騎士

モア。彼は監視記録を書類に執筆している最中だ。

「んな事言ってもよ。俺達が今立ってるこの世界の扉は、高さ20mの城塞だぞ？此処10年、グラメウス大陸から来やがった魔物の最大規模は迷い込んだゴブリン10匹だ。10倍の100匹来たって、ゴブリンじゃこの城塞はビクともしねえよ。寝てても大丈夫だろ」

「100年単位で見れば、オークやゴブリンロードも来た記録がある。オークとなると厄介だぞ」

「…確かに、オークが来たら騎士10人揃えて漸く倒せるかどうかの強さがあるが…100年単位の話にされてもなあ…全く、エルフは真面目だな」

グラメウス大陸方面の視界は真つ平らな平原地帯のお陰で、見通しは良い。そして付近には南から暖かい海流が流れてきている為、高緯度の割には温暖な気候となっている。が、流石に現在の季節ともなると、雪が降り積もっている。今日は雪こそ降っていないが、しかし地面には見通せる限りに雪原が広がっている。

こんな様子なら、今日も平和な1日で終わるだろう。

誰もが、そう思っていた。

そのきつかけは、二つの異音と、揺れ。

悍ましい異音と、定期的な大地の揺れ。明らかな異常にガイの眠気は一瞬で覚め、窓の向こうを、グラメウス大陸方面を睨む。

「…何だ、あれは？」

真つ白な雪原が、少しずつ、少しずつ黒くなっていく。他の監視塔の兵士達も騒ぎ始めた。

「大地が、黒くなっていく…？いや、まさか、アレは…!?」

「ゴブリンの大群が迫ってるぞ!! オークも見える…!! 総数は1000を超えてる!!」

「いやそんなのを見てる場合か!? あの後ろのは、あのバカデケエのは一体何なんだよ!!!」

そう、異変は。明確な異変はもう一つ。

黒い大地の染み、魔物の大群の更に後方。そこに、何か。巨大な何かがいる。此処からでも明確にわかる程、巨大な、まるで山の様な何かがある。皮膚の一部が蒼く輝いているのが、余計にその異様さを引き立てている。

「デカイ…いやデカすぎる!! 一体何メートルあるんだ!!」

「伝説の魔獣のレッドオーガとブルーオーガも居るぞツ!! 何なんだこいつら、何でこん

な奴らが纏まって近付いてるんだ!」

魔物の群れが近付いてくる。徐々に分かるその陣営は、明らかに大規模過ぎる。ゴブリンの大群、オークの部隊。その後方に赤と青の伝説の魔獣。

更にその後ろに。列強国 パールディア皇国が保有する生物兵器 地竜を一回りどころか三回りをも上回る巨大な赤い四足歩行の竜。

そして、その上に立つは。オーガよりも大きい、人に近い姿をした1人の異形。

その異形を、兵士達は、知っている。

「まさか、まさかアレはツ:!!伝説の魔王、ノスグーラツ!!!」

神話の時代、人類を一度滅亡の危機にまで追い詰めた人類の天敵的存在。その象徴が、彼等の眼前に現れたのだ。

「通ツ信兵エエエエエエエエエエツ!!!」

監視室に居た防衛隊長が全力の音量で叫ぶ。世界の危機を伝えよと。世界の扉の南方に控える城塞都市トルメスに伝えよと。

世界の扉にいる常駐防衛戦力は150名。平時ならそれなりの規模でも撃退し得る

戦力だが。今回は、今回だけは余りにも頭数が足りなさ過ぎる。だが、やるしかない。この場所が、世界の扉が失陥する事は、それ即ち第三文明圏の存続の危機に直結する。何としても此処で食い止めなければならぬ。例え失陥するとしても、魔獣を可能な限り道連れにし、トール王国軍の本隊を少しでも助ける。それが彼等に課せられた義務だ。

だが、それすらも。

「滅ぼせ」

彼の魔王が率いる軍勢の前には、実現不可能な夢物語となる。

西暦²1639年⁶月⁴日
中央歴1639年12月5日。

グラメウス大陸方面より、魔王ノスグーラが率いる魔獣軍出現。第三文明圏への侵攻開始。

人類の防衛線たる世界の扉は、僅か14分で陥落した。

第14話 怪生物

伝令兵として、世界の扉から城塞都市トルメスに着いたモアとガイは、まず真つ先に非常召集を受けて最大限に兵力を増強させたトーパー王国軍北部守備隊の姿が目についた。

それを横目を通り過ぎ、緊急本部に辿り着く。そして案内の元、防衛隊長がいる司令所に到達した。

「世界の扉守備隊所属のモアです、これより報告致します!!魔獣群の発見日時は通信時、グラメウス大陸方面より侵攻!!ゴブリン2万以上、ゴブリンロード約4000、オーク400、王立古文書に記載されていたレッドオーガとブルーオーガを各一体確認!!他に赤竜に乗った伝説の魔王ノスグーラを確認した他、40m以上の未知の超巨大魔獣を一体確認しました!!」

「魔王ノスグーラのみならず、40m以上の超巨大魔獣だと…!!クソツ、道理で…!!」
元々悪かった守備隊長の顔色が更に悪化する。既に危機的状況だというのに、想像以上の敵勢力の多さに様々な想定が崩れていく。

「北部守備隊の全戦力でもとても敵わん…!!通信兵、王に緊急連絡!!『魔王ノスグーラ復

活、国軍の全力投入の必要アリ』と!!」

「ハッ!!」

通信部隊の1人が了承し、トルメスに向けて魔信を送り始めた。

「…2人とも、よくぞその情報を此処に届けてくれた。そして君達に、悪い知らせが一つある」

「何でしょうか?」

「…世界の扉は既に陥落した。城壁常備兵はどうなったかは分からないが…既に全滅したと言つて良いだろう」

「ッ…!!」

想定はしていたが、しかし現実となつてしまったその事実には、モアは人知れず力強く拳を握り締める。

「我々は此処で防衛線を張り、何としても国軍の到着まで持ち堪えなければならぬ。遅滞戦術を行いながらの後退も考えたが…道中で壊滅するのは目に見えているからな。お前達も戦力の一つとして数えさせてもらうぞ。今は戦えるのが1人でも多く欲しい」

「ハッ!!」

「…ま、やるしかないか」

彼等の働きは、一人一人が生涯最高の質と速度を伴っていた。祖国の危機に、皆の士

気も最高潮であり、そして祖国を護らんと皆がそれぞれの獲物を持つ。

5000と2人の戦士達は、来るべき戦いに備える。

「城塞監視塔より緊急連絡ッ!!!」

ただ。

「世界の扉方面よりっ、超巨大魔獣が接近中ッ
!!!!!!」

それは余りにも、速すぎた。

その魔獣は、余りにも巨大だった。

全長は50mにも及ぶその巨体は。その大きさに見合わぬ俊敏さで大地を駆ける。

一歩一歩が大地を揺らし、一歩一歩が大地を凹ませる。

身体の一部は蒼く輝き、身体に宿らせるその魔力の多さを物語る。

その殺意は城塞都市トルメスに。否、人類に向けられた絶対的敵意。

果たしてこの魔獣は、グラメウス大陸にて魔獣の進化の果てに生まれた究極的生物か？

否。

幾らこの世界と言えども、進化の果てにこれ程の巨大生物が生まれる事はありません。それこそ誰かの手引きがない限りは。

…そう。神話の時代。彼の魔獣を生み出した国は存在した。

古の魔法帝国 ラヴァーナル。彼の国が、この魔獣を生み出したのだ。

この魔獣を生み出した目的は、今となっては誰も知る由が無い。誰もそれを知らない。

だが、ひとつだけ。ある真実を語るのならば。

ラヴァアーナル帝国でさえ、この魔獣を屠る事は出来なかつた。

魔獣は創造者達にさえ反意し、あらゆる文明を破壊する化け物としてこの世に生まれ落ちた。処分を決定したラヴァアーナル帝国の全力を以つてしても、複数隻の空中戦艦パル・キマイラや海上要塞バルカオンによる総攻撃を以つてしても、果たして魔獣を屠る事は叶わなかつた。

遂にラヴァアーナル帝国の植民地の一つだったグラメウス大陸の文明を完全に破壊した。その魔獣は、対抗策として生み出された魔王と戦い、敗れた。そして封印魔法により、人知れずグラメウス大陸の大地の中に封じ込められた。

しかしおよそ2万年の時を経て、魔獣は魔王の手によって再び世界に現れた。

魔獣は魔王を認め、彼にのみ従う暴力装置として、再び世界にその牙を向ける。その、魔獣の名は。

怪生物 エルギヌス。

古代の技術と悪意によつて生まれ落ちた人類文明の破壊神が、この世に再誕した。

第15話 双方の思惑

—ラヴァーナル帝国 特殊生物兵器開発計画主任の走り書き①—

今日から、帝国の歴史には残らない、しかし名譽ある計画が開始される日だ。計画の内容を端的に言えば、生物工学と魔導工学の組み合わせによる、安価で強力な魔獣の研究及び開発だ。我が国は全世界を支配し、光翼人以外のあらゆる生物を家畜として飼育しているが：如何せん我々よりも家畜の数が多過ぎて、頻繁に反乱を起こすのだ。規模もバラバラで直ぐに軍隊が鎮圧してくれているが、それでも被害は出るし軍備も少しは嵩む。はつきり言って反乱が起こる度に一々軍隊が鎮圧に掛かるのは馬鹿馬鹿しい。時間も掛かるし金も掛かるしで何も生み出さない。家畜共のせいで我々の金と時間が浪費させられている。この状況を改善する為に、この計画が立案された。もしこの計画が成功すれば、反乱が起きても魔獣を差し向けるだけで容易く鎮圧され、我々の浪費も最小限に収まるだろう。我々の力を存分に發揮せねば。

—ラヴァーナル帝国 特殊生物兵器開発計画主任の走り書き②—

計画は順調だ。

予想してたよりも多くの予算が割り当てられた事もあり、よりハイエンドな生産方法

で開発が出来る。皇帝陛下には、計画の完遂を以つて感謝の意を示すでしょう。しかし、問題を挙げるとすれば材料の質が安定していかない事だ。魔力を多く宿している家畜を選定しろと言つたのに、並程度の家畜が紛れるとはどういう事だ？調達班の人員を入れ替えるべきかもしれない。材料の質は生み出される魔獣の強さとイコールする。良い魔力を持つ家畜を加工し、配合し、調整し、整形し、形成する。言葉にすればこれだけの作業に、しかしどれだけの労力を必要とするのか分かつているのか？ただでさえ良質な材料を使用しているのに、不純物ひとつ紛れるだけで全て台無しだ。後で調達班に一から要約なしでキッチリと説明してやるとしよう。きつと泣いて喜んでくれるに違いない。

—ラヴァーナル帝国 特殊生物兵器開発計画主任の走り書き③—

遂に完成した。これ程に完璧な完成度は、最早一種の芸術作品と変わりない。全長50mの巨体と繰り出される能力によって、そこにいるだけで反乱を起こした家畜共を威圧し、蹂躪し、殲滅するだろう。勿論、魔獣である以上此方の制御が効かない可能性はあつたが、そこは織り込み済みだ。脳に潜在洗脳と魔力誘導などによる嚴重な安全装置を5重に仕込んでおいた。これ程のセーフティを破壊された時は、奴の脳は完全に破壊されて死んでいるだろう。今日の最終調整が終われば、3日後にはいよいよ覚醒の時

だ。

3日後の覚醒が楽しみだ。お前もそうだろうか？エルギヌス。

—ラヴァーナル帝国 特殊生物兵器開発計画主任の走り書き④—

失敗した。

(以下、解説不可能な文章が数十行続く)

—ラヴァーナル帝国 特殊生物兵器開発計画主任の走り書き⑤—

私達はとんでもないモノを作り出してしまった。アレは、エルギヌスは。覚醒した直後に5重の安全装置を完全に破壊し、研究所を吹き飛ばした。殺処分の為に派遣された装甲歩兵部隊1個大隊と装甲機甲中隊もあつという間に殲滅された。おかしい、どう考えてもおかしい。確かにエルギヌスは強力な魔獣として生み出された。しかし我々の軍隊が敗北する程に強力な能力は備わっていなかった。なのにアツサリと敗北するのは有り得ない。まさか、この短時間で進化した？そんな馬鹿な。

—ラヴァーナル帝国 特殊生物兵器開発計画主任の走り書き⑤—

ああ、成る程、そういう事かクソツタレ。そりやそうなる筈だ、道理で勝てない筈だ。

これももしその通りなら、パル・キマイラやアルカオンでさえもアツサリと負ける訳だ。奴は進化した。奴は我々の天敵となった。奴は我々を滅ぼし得る存在となった。今はグラメウス大陸を蹂躪している最中だが、絶対にそれだけでは終わらないだろう。奴には渡海能力が備わっている。グラメウス大陸とフィルアデス大陸を蹂躪しきつたら、海を渡つて他の大陸の蹂躪を始める。奴を倒さなければ、世界は、帝国は終わりだ。だが、我々に奴を倒す事が出来る有効な兵器が存在しない。奴を完全に滅ぼすには、時間も、技術も、資金も、ノウハウも、何もかもが足りない。

そして私は、まもなく死ぬだろう。帝国に此処までの損害を与える原因となった私達に、最早挽回の余地は一切無い。まもなく処分部隊が私の元に辿り着き、そして私が存在していた痕跡を全て消滅させるだろう。…こんな筈じゃなかった。

トールパ王国 王都ベルンゲン。

その街は正に、模範的な中世ヨーロッパを思わせる城と静かな城下街で構成された、第三文明圏の中で見れば田舎的な趣を持つ。

行き交う人々の種族は様々。人間族、獣人族、エルフなどの姿が見える。トールパ王国

は、クワ・トイネ公国やクイラ王国のような多民族国家となっている故の光景だ。

日々の市民達や兵士達の苦勞によつて除雪されたその街の北部に存在する王城
ニールルの会議室。其処で上座に座る国王ラドスの他、深刻な顔色の重臣達が会議をし
ている。

状況としてはトールパ王国軍1万5千が、世界の扉陥落によつて最前線となつた城塞都
市トルメスに向けて出発。現在進軍中だ。

「…何故、今頃になつて突然、何の前触れも無く神話の魔王が復活した…？ いや、そもそ
もそれらの軍勢は本当に魔王軍なのか？ どうやって確認した？」

「神話によると…魔王は勇者4人の内、3人の命をも使用して封呪結界に封じ込めたと
あります。そしてこの結界は、時の経過と共に少しずつ弱まつて行く、と。魔王復活は、
封呪結界が消滅してしまつた事によるものと思われます。しかも今回、魔王は大軍を編
成して侵攻してきている為、時系列で考えると少し前に復活し、グラメウス大陸にて軍
備を整えていた物と思われます…！」

「突然ではない、という訳か」

「はい。魔王の判別に関してですが、これは勇者一行の1人、獣人族ケンシーバの記憶か
ら石版に魔写したものが残されています。報告してきた世界の扉からの報告でも、「正
に石版に描かれていた姿そのものだ」と遺しています。他にも伝説の魔獣であるブルー

オーガとレッドオーガも確認されている以上、今回の魔王復活及び魔王軍は本物であると判断します」

「そうか…」

王立大学の教授の言葉に、何かの間違いである事を願っていた王は、大きくため息を吐いて項垂れる。その様子に、外交担当大臣が発言した。

「いずれにせよ、万単位もの魔物が侵攻してきている。もしも我が国が陥ちれば、それこそ神話のようにフィリアデス大陸全土に魔物が拡散し、蹂躪しかねない！これは非常事態なのです、王よ！この事実を各国へと伝えても宜しいか？」

「うむ、魔物の動向は随時伝えてやれ。各国が援軍を組織中に戦況がどうなってるのか、把握しておきたいだろうしな」

「援軍の要請は…必要ですな」

「は、」

続いて発言するのは、騎士団長。

「当時の状況と比べれば、ドワーフの技術は向上し、武器の強度は遥かに高まっていきます。魔法もエルフの魔術研究によって、失われてしまった魔法も多いとはいえ、それでも質は非常に向上しております。そして戦術及び戦略も高度化し、軍の練度も合わされば。我々の強さは昔とは比較になりません。しかし…しかし神話でも確認されなかつ

た40m以上もの超巨大魔獣に、我が国のみで対抗可能とはとても思えません。撃退するだけでも、大規模な援軍が必須と考えます」

「…そうだな。すぐに各国に魔王復活の知らせと共に援軍を要請しろ。列強国のパーパルディアの援軍は絶対に引き出せ。彼等の強力な軍勢の力を借りるのだ。小規模でも良い、何としても彼等の持つ軽量魔導砲をこの地に引つ張り出せ」

魔王軍本陣。

夜の暗闇を、幾つもの松明が周囲を照らす。その中の中心、一つの松明に3体の魔獣が居る。彼等はそれぞれ岩や瓦礫に腰掛けている。その中でも、1体の姿は異彩を放つ。身体は黒く染まり、大きく盛り上がった筋肉、そして何よりの特徴は。頭により黒く、そして渦巻き状に突き出ている角だ。そしてその身に纏わせる魔力は、近くにいる他種の魔獣を超越している。彼等の周りには無数の骨…人間だった物が散乱していた。今も彼等は、人間だった肉を喰らっている。

そして、彼は。魔王ノスグーラは静かに話し始める。

「どうやら、人間共は随分と数を増やしていたらしいな。…まあ、食料の現地調達がしや

すくなつたと考えれば良いか」

「魔王様。今回の侵攻は何処までの御予定で？」

「南の大陸フィルアデス大陸の完全制圧までは予定している。その後は人間共の出次第だな」

「そういえば、人間共も手強くなっているようだな。前回の時には見られなかった武器などがありました」

(…):「…アレから随分と時間が経っているからな。奴等も学ぶ事は学ぶ、という事だろう。いずれにしろ、魔王様の復活の時が近付きつつある。それまでにある程度の征服地は拡げておくとしよう」

「応—」

ノスグーラの言葉にに気合を入れて応じたレッドオーガとブルーオーガだが、その後にレッドオーガの様子が神妙となる。

「ところで、魔王様」

「何だ？」

「前回の戦いで、我々は太陽神の使いに敗れました。太陽神の使い達は、強かった。甲高い音を鳴らして高速で飛び回る神の船、強力な爆裂魔法を吐き出す角を持つ鉄の地竜、全長が250mを超える魔導船：我々は手も足も出なかつた。使者達の爆裂魔法の恐怖が、今も魂にこびり付いています。俺は魔法帝国の力を知らない。魔帝様は、あの太

陽神の使いすらも上回るのですか?」

「…そんな事か」

ノスグーラは表情も変えず、語り始める。

「並の太陽神の使者でも、魔帝様の足元に及ばん。魔帝軍の対空魔船「天の浮舟」は音を超える速さを持つ。音の半分程度しか出せない神の船では、天の浮舟の敵にすらならん。巨大な魔導船も、魔帝軍の爆裂誘導魔法弾の飽和攻撃で容易く沈む。お前達にその力が無いだけの話だ」

「…?では、魔王様は?」

「その時に其処にいれば、太陽神の使者を皆殺しには出来ただろうな。今よりも力を振るえる状態ではなかったが、全力を出せば可能だった」

「なっ…!?それでも魔王様は、太陽神の使いに敗れてしまったのですか!?!」

「誰が太陽神の使者に敗れたと言った?」

その時、ノスグーラの膨大な魔力がレッドオーガに叩きつけられる。それに晒されたレッドオーガの額から冷や汗が流れ落ちる。

「我は太陽神の使者に敗れたのではない。たった一人に、あの男に敗れたのだ。其処を間違えるなよ」

「…御意ッ」

膨大な魔力の叩きつけが消失し、レッドオーガは思わず大きく息を吐く。

そんな様子を微塵も気にする事なく、ノスグーラは思考する。

（あの時とは時代も違う。再び太陽神の使者を召喚されたとして、あの男のような者がいるのかどうか。そういう類の強さだ、あの男は。：しかし、もしあの男に匹敵する強さを持つ者が召喚されたのならば：エルギヌスさえも手こずるかもしれんな。侵攻の片手間、何人かの人間の記憶を抜き取っておくとしよう）

（確か、あの男が名乗っていたのは…）

（^大ダイ^日ニ^本ホン^帝テイ^国コク軍、だったな）

第16話 怒涛

パーパルディア王国 皇都エストシラント第3外務局。

其処に魔王復活及び援軍要請の知らせを受け、魔王討伐部隊の派遣要請の為、トーパ王国大使が訪れていた。

「——以上の為、神話に伝えられている魔王が復活致しました。我が国の騎士団が総力を挙げて対抗中ですが：既に世界の扉が陥落し、我が国は危機的状况に陥りつつあります。貴国が保有している、歩兵でも持ち運びが可能な魔導砲が極めて有効である可能性があります。如何なる規模でも構いません。討伐部隊の派遣をお願いしたいのですが……」

「無理だな」

第3外務局担当員は資料を読みながら、トーパ王国大使にも目もくれずに即答した。

「はっ……？け、検討だけでもして頂けませんか？我が国が突破されてしまえば、フィリア大陸全土に魔王軍が侵攻する事になります！」

「理由は言えんが、皇国は今、ちと忙しいのでな……小隊とはいえ軍を他国に派遣している場合ではないのだよ。これは貴国に対して嫌がらせなどをしてる訳ではない。それ

に：50mの魔獣など、本当に存在している訳が無いだろうか？目測を大きく間違えたに過ぎんだらう」

担当員の言葉は、けして間違いではない。

現在、パーパルディア皇国は・フィルアデス大陸南方の島国 アルタラス王国の侵攻に向けて検討を始めたばかりだ。アルタラス王国は世界有数の魔石鉱山を有する豊かな国で、文明圏外国であるにも関わらず通常文明国並みの国力と文明水準を持つ。それ故に軍事力も通常の文明圏外国と比較して傑出しており、魔導戦列艦を保有する他、風神の矢等の独自兵器も開発しているなど、文明圏外国の中でも突出した特徴を持っている。

が、パーパルディア皇国からすれば息を吹き掛ければ吹き飛ばす紙同然の弱小国。アルタラス王国侵攻の為に派遣する戦力は戦列艦含む砲艦200隻以上、ワイバーンの航空戦力を海上から投射出来る竜母10隻以上、陸軍戦力を輸送する揚陸艦およそ100。ワイバーン200以上、陸軍数千による大部隊。唯の文明圏外国ならばこれほどの軍隊は必要無いが、アルタラス王国であるという事を鑑みてこれ程の戦力が投射される事が考えられている。

流石の皇国とはいえ、これ程の戦力を動かすとなるとそれ相応の時間と準備が要る。その矢先に、この知らせだった。

「まあ何にせよ我が国には関係のない話だ。それに…文明水準の低い古代に名を馳せた魔王如き、今更粋がった所でたかが知れた事だ。もしもお前の国が滅んで、それに満足せずにフィルアデス大陸に侵攻しようとするなら、その時は我が国も改めて考えるだろうし、瞬間に滅して見せよう」

「そんな…!」

トールパ王国 フィルアデス皇国駐在大使は、パールディア皇国からの援軍獲得に失敗する事となる。

…最も、それが間に合うかどうかは別問題だったが。

同時刻、トールパ王国王都ベルンゲン。

「ギヤアアアアアアツ!!」

「死ね、死ね、死ねエツ!!!」

「オーク5体接近中ツ!!もう駄目だあ!!」

「一步も引くなあつ!!我等が1秒でも多く王や民達が逃れられる時を稼ぐのだ!!!」

其処は今、地獄と化していた。

王都に侵食する幾多の魔獣。振われる暴力に倒れる騎士。斬られ、食られ、消費される民達。其処に人の尊厳や権利は何ら存在しない。

その光景は正に、何処かの世界で繰り広げられた生存戦争を思い起こすだろう。

しかし不意に、魔獣達が引き始める。それはけして潰走などではなく、後退。しかし慌てている様子さえ見える。

地面が揺れ、そして何重にも重なる破壊音が響く。

「ッあああああああ!!!」

奮戦する彼等が見たのは。城下町を踏み潰して近付いてくる^{超巨大魔獣}エルギヌス。50mの巨体が走りながら近付いてくる光景は、それだけで崩壊寸前の士気と陣形だった最前線の騎士団の心を折った。

だが、エルギヌスは彼等の目の前で止まる。そして蒼く輝く燐が、激しい点滅を始める。それを呆然と見る者、恐怖の表情に歪めて逃げる者、自分の死を確信して諦める者。彼等に共通した事は、逃れられぬ死の鎌が振られる寸前だったという事だろう。

瞬間、エルギヌスの口から怪光線が放たれた。

エルギヌスの膨大な魔力によって生成されたそれは、まるで制御された自然的な落雷

を思わせる。しかしその実態は、余りにも膨大な魔力投射によって空气中に可視化される程の直接魔力攻撃。それをまともに受けたあらゆる生命体が、即座に致死レベルの変質魔素中毒症を発症。即座に体の色素の変色が発生し、そして魔力が暴走を引き起こして首筋や耳に黒い文様が浮き出る。トドメに内臓が機能障害を起こし始める。それは胃や腸だけの話ではない。心臓が即座に心室細動を引き起こし、数秒後には完全に心停止。

唯の無機物には一切の被害は無い。何故ならその怪光線は、物理的攻撃力は何ら保有していない。魔力を保有する生命や兵器に対してのみ、その即死の威力を発揮する。ラヴァーナル帝国が打ち立てた「余分な損害を最小限にしつつ、確実に家畜を殺処分させる」というコンセプトは、およそ2万年が経過した今でも、凶悪な程に、悪魔的な程に有効な攻撃手段となっていた。

エルギヌスが咆哮する。魔獣達が駆ける。人が食られる。

王都ベルンゲンは、死都となりつつある。しかしまだ、まだトーパー王国の王が住まう王城ニールベルには、辛うじて魔獣の侵入は防いでいる。王都防衛隊はニールベル周辺に最終防衛線を構築し、1人でも多くこの地獄から逃れられる為の時間を作る。生還はあり得ない、決死の任務。それにもかかわらず、彼等は剣や杖を取り、奮戦している。

「…ふむ」

その光景を、魔王ノスグーラは上空に浮遊し、俯瞰していた。

「やはり、少し手間取っているな。被害は相当出ているはずなのに、人間の戦士達は全体的には引く様子が見られない…」

右手を顎下に添え、観察する。

「…起点となっているのはあの城、か。エルギヌスに破壊させるのが一番速いが…」
ニヤリと、笑った。

「あの時振りに本気を出す事だ。あの城で試すでしょう」

刹那、魔王よりエルギヌスにも及ばずとも劣らぬ膨大な魔力が活性化。空中に浮く魔王の直下に巨大な魔法陣が出現する。当然、それは騎士達からしても良く見えるが、しかし魔王に届く程の射程を持った攻撃方法を持っていない。故に彼等は悠々と攻撃準備をする魔王を睨む事しか出来ない。

そして攻撃準備が整い、魔法陣が消滅した。

どんな攻撃が飛んでくるのかと身構えていた城の騎士達は、拍子抜けた顔を見せる。

「…ん？」

ふと、騎士の1人が顔を上げる。

雲に覆われていた一部分が、ニール城のほぼ直上の雲が赤く、紅く変色し始めている。それはまるで太陽の様な色に徐々に紅く、鋭く。

あれは何だ、そう口を開く前に。

「災害」が、雲を切り裂いて墜ちてきた。

「え」

そしてその災害は、ニール城に直撃。その膨大な物理エネルギーと魔力エネルギーを解放し、爆発。爆煙がニール城を覆い尽くし、何者からの視界からも掻き消える。

「……総魔力の6割と長時間を浪費してこの程度か。やはり割りに合わんな」

魔王軍の侵攻から2日後の12月7日、トール王国王都ベルンゲン陥落。

これによってトール王国は戦力の7割、国力の8割、国土の3割を喪失。王族の避難こそ、海へのルートでギリギリの瀬戸際で完了した。が、しかし、戦力と国力を北部に集中していたトール王国の打撃は既に致命的であり、魔王軍の攻撃に耐える事は不可能だった。これによりトール王国の王族達はパールディア皇国に亡命する事となる。

王都ベルンゲンを陥とした魔王軍は、勢いそのままにトーパ王国南部に浸透。文字通りの破竹の勢いで次々とトーパ王国を侵略。

西暦²⁰²⁹年⁷月⁴日
中央歴1640年1月2日。

トーパ王国は完全に滅亡。

グラメウス大陸に巢食っていた魔獣達が、怪物達が。遂に第三文明圏に解き放たれる。その時、第三文明圏のあらゆる人間達は知る事となるだろう。

蛮族と、時代遅れと見做し、蔑んだ怪物達の、真の恐怖を。

そして、第三文明圏に迫りつつある危機を。

「やはり国土の復興は遅れているな…」

「はい、やはり先の北海道の件が大きな遅延を生んでいます。再び本格化させるには安全が確約出来ておりません…」

「仕方あるまい。焦って余計な被害が出るよりは確実性を取ってくれ。今ならクワ・トイネ公国から山程の天然食料がある」

「おーい司令ちよーかん。例の建造の進捗報告書持ってきたよー」

「ご苦労、篠ノ之博士」

「ほいほーい。それじゃ私は久しぶりの休暇取ってくるね。あ、スーくん何処に居るか知らない？」

「頼むから、問題行為は控えてくれよ…?」

人類の守護者は、まだ知らない。

第17話 侵食

グラメウス大陸方面の防衛を担っていた国家、トーパー王国の滅亡。

このニュースは複数の魔導通信によって、比較的速く世界に拡散されていたのだが、世界の反応はかなり鈍かった。しかもそれは、魔王の脅威が直接的に晒される範囲内にある第三文明圏南部に於いても。

世界の中で三番目に遅れた文明の国家が一個滅んだ程度で、この世界は騒がない。特に近年では第三文明圏列強国のパーパルディア皇国が周辺国家を併合し続けている為、余計にそういった感覚が麻痺していた。「たかが第三文明圏の田舎国家が一個無くなっただけだ」と。「たかが北の蛮族の国家が、古代の蛮族に蹂躪されただけだ」と。世界の関心は所詮そんなものだ。弱肉強食、弱いものは強きものに蹂躪され、そしてその強きものも、より強きものに蹂躪されるだけの世界。関心ごととは自国の利益になるか否か、それだけだ。

それ故に、彼等は甘く見ていた。古代より蘇りし人類への悪意を。

トーパ王国を制圧した魔王軍は、大きく分けて3つに分割された。

一つは、魔王ノスグーラ及びレッドオーガ率いる魔王軍本隊。魔王軍の5割を率いて第三文明圏東海岸沿いに沿って南下を開始。

一つは、マラストラス及びブルーオーガ率いる魔王軍分隊。此方も魔王軍の5割を率いて、第三文明圏中央部に向けて進撃を開始。

此処で妙な事に気付いた方もいるだろう。魔王軍の戦力は2分割で完結している。それなのに3つに分割されているのは、矛盾していると。

確かに魔王軍の戦力は既に無い。しかし最後の一つは、それだけは魔王軍は必要無い、むしろ魔王軍が居たところで枷となるだけだ。

最後の一つ、それは。エルギヌス単体による、第三文明圏フィルアデス大陸北部の文明破壊。

トーパ王国陥落の連絡を受けて、フィルアデス大陸最北部の5カ国は即座に其々の軍隊を抽出、連合軍を結成。元トーパ王国との国境線に厳重な防衛線を構築した。

トーパ王国と変わらぬ高緯度の為、ワイバーンによる航空戦力は連合軍には存在しな

い。しかしその代わりに5カ国の軍隊による121万もの兵力とパーパルディア皇国のお下がりである旧式の魔導砲を171門も揃えていた。

5カ国連合軍とはいえども、これ程の数を揃えるのは並大抵の事ではない。しかし最前線となつてしまったヌシ王国が殆どの戦力を対魔王軍に振り向けた事によつて此処までの戦力を用意できた。魔導砲に関しては約半数の95門、国内の魔導砲をとにかく掻き集めていた。昔にパーパルディア皇国の旧式魔導砲が大量在庫処分を行なつていとお陰だ。射程が1kmから倍の2kmとなつた新型魔導砲が開発され、その際に行われた戦列艦や陸軍の武装更新の際、大量の旧式魔導砲が用済みとなつた。いくつかはお下がりとしてそのまま利用が続行されたが、しかし元の数が多く、最終的に値段を何倍にも引き上げた上で第三文明圏の文明国にいくつかの魔導砲が売り捌かれた。

集結した5カ国連合軍の戦力を見た指揮官達が、「これならば魔王軍の攻勢も不可能ではないのでは？」と思うのも無理は無いだろう。人間よりも強い魔獣が群を成している以上、其れ相応の被害が出てしまうのは確実だ。しかし、しかしだ。たかが数万の魔獣に対して、121万もの兵力と171門もの魔導砲。これ程の戦力を投射すれば、如何な魔王とて倒れるだろうと。そう思つて、何人かの指揮官は攻勢計画を考え始めていた。

…そして、その楽観的考えは。たった一体の魔獣によつて粉碎される。

又シ王国国境線 5カ国連合軍防衛線。

そこは今、凄まじい轟音が響き渡り続けていた。

「撃て撃て撃て撃て、撃ちまくれええええええええええええッ!!!」

数十門の魔導砲が秩序無く乱射される。その照準はたった一体の超巨大魔獣、エルギヌス。又ス。

魔導砲だけでは無い。遠距離攻撃方法を持つあらゆる兵士がエルギヌスに向けて攻撃していた。怒濤の数の弓矢や魔法が次々とエルギヌスに着弾する。

放たれ続けるその大火力は、パーパルディア皇国の軍隊を以てしても、何も考えずに突つ込めば大損害を負う事は確実な程。しかしそれ程の火力を受けて尚、エルギヌスは全く痛がる様子を見せない。ただゆっくりと、恐怖を煽るように一步、また一步を踏みしめる。

悉くの攻撃が、エルギヌスの強靱な皮膚の前に弾かれる。それどころか魔法や魔導砲の砲弾の爆発は、エルギヌスにとっては唯のエネルギー補給にしかなり得ない。

魔力吸収能力。

それは、2万年前のグラメウス大陸蹂躪の際。ラヴァーナル帝国軍と戦っている最中に獲得した、エルギヌスの進化の一つ。この能力によって、ラヴァーナル帝国はその一切の攻撃能力を事実上消滅する事になったのだ。どれだけ技術が最先端であろうと、ラヴァーナル帝国軍の兵器の根本的な分類が「魔導攻撃」であるという事実は変わらない。

魔導銃も、魔導砲も、アトラタテス砲も、誘導魔導弾も。天の方舟も、パル・キマイラも、パルカオンも、果てにはコア魔法でさえも。エルギヌスにとつては、唯の魔力補給源へと成り下がったのだ。その瞬間、ラヴァーナル帝国の敗北は決定された。当然だ。ありとあらゆる攻撃が、エルギヌスに余計なエネルギーを与えてしまう。この理不尽の前に、ラヴァーナル帝国軍は悉く敗走し、そして一つの大陸が廃墟となった。最早そういう類なのだ、エルギヌスという存在そのものが。

そして再び、その理不尽が牙を剥く。

彼我の距離、僅か100m。

突然バチバチと、エルギヌスの身体から厭な音が響き始める。そして、蒼く輝く鱗が一層激しく点滅する。その変化を、連合軍は気付く事が出来ない。魔導砲や魔法の攻撃によってエルギヌスの巨体の多くの面積を目隠ししてしまっているからだ。

唯、其れだけが広がっていた。

瞬間、その事実を十数秒掛けて漸く認識。たった一撃で半壊した5カ国連合軍の士気は完全崩壊。指揮も何も無く、バラバラに壊走を開始する。

それをエルギヌスが逃がすわけがない。先程の威力の怪光線は出さないが、しかしそれが無くても十二分。咆哮の後、エルギヌスは駆けた。その巨体に反した鋭い機動力は、人間を容易く踏み潰し、轢き飛ばし、吹き飛ばす。

後の展開は、語るまでも無い。この時点で、ファイルアデス大陸最北部の運命が決定されたのだから。

ファイルアデス大陸最北部、壊滅。最北部5カ国も滅亡し、およそ2億の難民が数を減らしながら、南を目指す。